
とある魔術の禁書目録 ～戦いの神と呼ばれた者～

霞 空斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録 Ⅰ 戦いの神と呼ばれた者Ⅰ

【Nコード】

N4977R

【作者名】

霞 空斗

【あらすじ】

かつて戦いの神と呼ばれた男がいた

テレスティーナを逮捕し、戦いの神は皆を守る為に潰えた、かに見えた

だがそれは、始まりに過ぎなかった…

大覇星祭編から始まるという異色なスタート、おまけに原作をベ
ースにちよくちよくオリジナル要素を加えていくというものです。
そんなのでよろしければ…

因みに前作「とある科学の超電磁砲 〓今を戦うガタツク」の続
編です。まずはそちらを読む事を推奨します

ブローグ 0 ハジマリ

伽藍の堂

「…式」

壁に寄りかかってコーヒーを飲んでいる式に声をかける

「…目は慣れたか？アラタ」

式、と呼ばれた女性はコーヒーから口を離しアラタに目を向ける

「だいぶ。最初は死ぬかと思ったけどな」

「…義手は？」

義手、というのはアラタの右腕の事

蒼崎青子に助け出されたはいいが既に酷い怪我を負っていた右腕は治せず燈子によって義手になったのだ

「そいつは問題ない。バッチリだ」

「義手の調整諸々を兼ねて、トウコも行くって言ってるんだけど？」

「別に問題ないけど。義手の調整は燈子にしか出来ないだろう？」

右腕の義手は人形師、蒼崎燈子にしか作れない

従って破損した時にいちいち学園都市から出てくるのは面倒だ、だから行く…、というのが燈子の弁

「ま、念の為オレと幹也も行く予定だけどな。学園都市にも少し興味あったし」

幹也というのは式の彼氏だ

お互いが結ばれて俺は良かった、と思ったがそんな事実を知ったうなだれてた鮮花が俺にアプローチをかけてきた

「…いい迷惑だ」

「そうか。俺は似合ってると思うけどな。アラタと鮮花なら」

「止めてくれ。俺には決めた人がいる」

たった一人の女の子

「全く…。その女の子、今泣いてるぞ」

「わかってる。…だから、俺は帰るんだ」

「はは。お前らしいな」

奥の部屋から燈子が歩いてきた

なんか白い服となんか帽子っぽいものが

「燈子、その服は？」

「お前の服だ。スカルだからな」

俺に鳴海荘吉になれというのかこの女

「まあそうだ」

「心読まれた!？」

「流石に名前や振る舞いまで真似ろとは言わない。見た目だけだよ。それに」

「それに？」

「帽子がないスカルはスカルじゃないと私は思っ」

仕方ないじゃんか

最近頭にSが刻まれたけど

俺帽子被ってないんだし

「確かに。帽子がないスカルはなんかな」

式までも！

「いいじゃん!!帽子ないスカル!!クリスタルもカッコイいじゃん!!」

「確かにカッコイいけど、なあ式」

「なあ」

なんだこの女達！！

「…わかったよ」

………

促された結果着る事になりました

「…お、結構馴染む」

帽子をきゅ、と被る

「…似合ってつか。帽子」

「なかなか様になってんじゃねえか」

不意に後ろから声がした

「…貴方は？」

「…鳴海荘吉、とでも言っておこうか」

鳴海、荘吉…！？

「誰だか知らんが帽子が似合うのは一人前の証拠、お前が俺のドライバーを使う事も、文句ねえな」

告げると共に荘吉は霊体のように消え去った

「…鳴海…莊吉…」

再び俺は名前を呟く

（覚えておけ。人は皆、N o b o d y , s P e r f e c t、だ）

それを機に完全に声は聞こえなくなった

「…N o b o d y , s P e r f e c t」

…完璧な人などいない…かな、確かそんな意味だったはず

「アラター、まだー？」

ドアの外から幹也の声が聞こえた

何時の間にか来ていたのだろう

「ああ！！今行くー！！」

俺は返事して再び、と服を整える

「…待つてろ、学園都市」

俺は呟くと意気揚々と部屋を出た

………

伽藍の堂の外

皆それぞれ軽い荷物を整えている

幹也は肩に背負う程度の荷物

に関わらず式はいつもの赤いジャンパー、その下に和服

燈子はデカイ鞆二つ

二つの内一つはかなりデカイアタツシユケース

多分あの底無しの使い魔が入ってんだろう

「準備はいいか。多分学園都市は大覇星祭間近だ。人だかりはハンパないぞ」

「大丈夫です。式はちゃんと見張ってますから」

「幹也、それどういう意味だ」

「あ、いや…あはは」

…バカップルめっ

内心毒づいてはいるが二人が結ばれて安堵してるのは俺だけじゃないだろうな

「…行くか、学園都市に！！」

俺、鏡祢アラタは歩き出す

その後ろに見知った三人がついてくる

凄腕の人形師：その正体は魔術師、蒼崎燈子

直死の魔眼を持つ少女、両儀式

その彼氏にして物探しのエキスパート、黒桐幹也

俺は一本のメモリを取り出しておもむろにボタンを押しガイアウィ
スパーを起動させる

> S K U L L <

1 大覇星祭

大覇星祭

学園都市で九月の十七日から一週間ぶつ通しでやる大規模な学園祭

「わかつてはいたが…かなり人がいるな。この分なら、学園都市の外からも来ているな…」

蒼崎燈子がタバコに火をつけ口にくわえる

「確かに…。この人の量は予測してなかったですね…」

幹也もキョロキョロと辺りを見回しながら呟く

「はぐれちゃダメだよ、式」

「幹也…。オレをバカにしてないか」

なんかまたバカッフルぶりを発揮している幹也と式

「ま、いいか。純粹にこの大覇星祭を楽しもうか。アラタ、散歩や久々の学園都市を歩きたいなら急げ、二人は私が見張っとく」

燈子がタバコの煙を口からふう、と吐きながらアラタに言う

「そうさせてもらうぜ。誰かにあつたらなんて名乗る」

「適当に名乗っておけ。どうせバレるんだからな」

いや、まあそうなんだけど…

「んじゃ、歩いてくるか」

とりあえずアラタは帽子を軽く被り直しゆつくりと歩を進めた

「学園都市か…2ヶ月ぶり…位かな…」

アラタは久しぶりに来た学園都市に多少の期待を込めて

そして今回は大覇星祭を観客として楽しむのだ

………

自然に自分が通っていた高校の場所に足を運んでしまった

「…元気かな」

ボソリと呟くがその呟きはアラタにしか聞こえない

しかし今は会う時ではない

どうせならなんか演出したいのだ

…なんかを

とか何とか思考していると第一競技が始まった

棒倒し

相手陣地の棒を引きずり倒す、みたいな

みたいというのは鏡祢アラタが棒倒しの知識を忘れている為だ

ふと気付くと自分の教室の前に来ていた

よほど未練があつたのか

がらり、と扉を開ける

まばらな机の並びに出したままの椅子、適度に汚れた黒板

何もかもが懐かしい

ふと自分が座っていた机に目をやると妙に綺麗だった

微細なほこりはあるがそれでも他の机よりは幾分マシに見える

「…つたく…バカだよな…」

いなくなっているというのに

誰が「もういない」奴の机を拭いたり綺麗にするのやら

「…誰だかわかんないけど…」

何時の間にか自分が少し泣いていた

やっぱり嬉しかったから

時計を見る

棒倒しが終わった時間帯か

アナウンスが聞こえる

どうやら上条たちが勝ったようだ

「…、」

今はただの観客

嬉しいのは嬉しいがなんか微妙な気分だ

その時ガラリ、と教室のドアが開いた

競技が終わって汗をかいだ吹寄制理が入ってきたから

………

扉を開けると見慣れない白い服と帽子を被った男性が窓を開けて校庭を眺めていた

私はふう、と溜め息をついて注意を促す

「すみません、ここは関係者以外立ち入りは禁止しているはずですが？」

軽く着替える為に私は教室に来たのだ

神代や上条たちが怠けないようにしないといけない

…鏡祢は、もういない

彼がいてくれたなら神代や上条たちのやる気を引き出してくれるだろうに

だから鏡祢の分まで頑張ってこの大覇星祭を成功させるんだ

もし鏡祢がいたなら私は彼を運営委員にスカウトするつもりだった

何だかんだで鏡祢は真面目にやってくれる気がする

口では面倒だなんだ言いながらしっかり仕事をこなしてくれる気がしてならなくて

「…泣いてるのか？」

「えっ…？」

指摘されて気づいた

私は泣いていたのだ

故に問い掛けられるその声が「聞き慣れた」声だという事に気付かなかった

「す、すみません…、初対面なのにこんな恥ずかしいところ見せてしまつて」

ハンカチで目元の涙を拭きながら白い服の男性に答える

「大丈夫だよ。人間泣きたい時もあるっさ」

白い服の男性はゆっくりと歩を進める

先ほどまで陽の光の逆光で顔が見えなかったが徐々に輪郭とはつきりしてきて

「……!？」

驚愕した

「泣かせてた？」

今日の前に

服は違うし帽子を被っているけれど

鏡祢アラタが立っていたから

……

両儀式と黒桐幹也はお互いはぐれないようにしっかりと手を繋いで大覇星祭を見て回っている

「にしてもホント人が多いな……。ゴミみたいだ」

「式、今すごい失礼な事言っただけからね」

さらっと来る幹也のツツコミをスルーし繋いだ手を離さず歩を進める

「式、定番だけだとたこ焼き買ってこうか？」

「幹也の奢り？」

「足元見るなあ…。うう、今月の給料燈子さんからまだ貰ってないのに…」

言いながら一度手を離し財布の中身を確認する幹也

「…割り勘じゃダメ？」

「来ると思った」

式にはお見通しだった

割り勘でたこ焼きを購入した幹也と式ははふはふ言いながらゆっくりとたこ焼きを食べる

「にしてもこの学園都市って、なんなんだ？超能力なんてくだらないもの、人為的に作り出すなんてバカみたいだ」

「確かに。僕も良くわからないんだけど…なんでなんだろうね？」

幹也ならその気になれば調べ尽くせるが必要はない為調べていない

「きつと何か思惑なんかがあるかも…」

幹也と式は空を見上げる

「…なんか雲行きが怪しいな…」

「どうしたの、式」

「…変な胸騒ぎがする。…久々にオレも戦つかもしれないな」

「…無茶しないでよ、式」

幹也が心配の色を隠さず式に言う

「わかってるよ。それなりに戦つさ」

「…不安だなあ…」

不安がる幹也を余所に式はたこ焼きをもふもふするのだった

……………

神那賀雫は出番待ち

鏡祢アラタが亡くなったという知らせを聞いて一晩泣いた

ただ泣いた

その倍御坂は泣いただろう

御坂の気持ちはもうわかってる

自分の気持ちはもわかってる

鏡祢アラタが好きだった

「神那賀さん？」

後ろで自分を呼ぶ声がした

「御坂さん」

御坂美琴

常盤台のレベル5、そして神那賀の恋敵

「棒倒し、すごい白熱してたね」

「うん。上条さんや神代さん、すごかったね」

二人してそんな日常会話に花を咲かす

「…ここにアラタがいたらな…」

御坂の一言で少し沈黙があつた

「…うん」

神那賀も押し黙る

彼女は仮面ライダーバースなのだ

「…さ、しんみりしてても仕方ないでしょ。次は借り物競争だっけ。範囲広いから、結構しんどいのよねー」

借り物競争は第七〇九学区というかなり広い範囲の中で指定された物品を探すというマラソンのパワーアップバージョン

広い上に一般人もたくさんいる為能力も迂闊に使えず如何にして最短ルートを構築するかが問題となる

「そうね。同じ赤組どうし、頑張りましょう」

神那賀と御坂はお互いの二の腕をぶつけ合って健闘を祈った

.....

左翔太郎は射的をしていた

「いよっし！命中！」

銃口にふ、と息を吹きかけハードボイルドっぽく決める（本人は決まってると思ってる）

「……たく、アラタは何やってんだか」

命中し落とした商品を受け取りながら翔太郎は呟く

「……お前が都市泣かせてどうすんだよ……全く」

アラタが死んだと聞いたのはあの戦いが終わったすぐ

流石に驚きを隠せなかった

「…いけね。しんみりして適わねえや」

商品が入った袋を下げながら翔太郎は再び歩きだす

「上条や神代の競技でも見に行くかな…」

今はアラタの代わりに守っていこう

この都市を脅かすなら

Wが相手になってやる

.....

蒼崎青子は焦っていた

「くっそ…ヤバい所に運び屋を入れてしまったわね…」

彼女はとある人物の捕縛する依頼を貰っていた

依頼主はイギリス聖教の最大主教アークヒショップ

ローラ・スチュアートだ

「まったく…あの女、面倒なの頼んでくれたわね…!!」

しかしそれでも生計を立てる為には仕方ない

「姉貴に連絡してみるか…?」

青子は走りながら携帯を取り出して姉である蒼崎燈子にかけた

今日は「あそこ」は大覇星祭なのだ

お祭りを壊すわけにはいかない

何より「あの子」も少しは楽しみにしているはずだ

蒼崎青子は思考しながら走る足に力を込めた

.....

「はぁ!？」

その連絡を聞いた蒼崎燈子は苛立ちを隠さず声を荒げた

「お前ほどの魔術師がなぜ仕損じる!？私に対する嫌がらせか!？」

> そんな訳ないでしょ!!それに、勝手に私の名義でお金おろして
るあんたに言われたくないわね!!<

いらん所で何言い合ってるのか

分かる人にしか分からない会話だ

「それで、何人だ?何人の魔術師がこの学園都市に入り込んだ?」

燈子は冷静に状況を分析する為に青子に問いかける

> 二人ね。ローマ聖教「リドヴィア」ロレンツェッティ」、んでそ

いつが雇ったイギリス生まれの運び屋、「オリアナ・トムソン」。
両方女ね。だけど取引先の相手はまだ確認は取れてないってく

ー通り聞くと燈子ひ憎々しげに舌を打つと

「なんだ？品物は。あながちなんかの霊装かと思うが」

>さっすが姉貴。学園都市はお互いに無闇に干渉しちゃいけないからね…。大覇星祭という警備が緩くなった所を突かれたわね…<

「青子、味方側の魔術師は何人潜ってる」

それを聞くと青子は>んー<と考えて

>ステイルって子と、土御門って人じゃなかったかしら？<

「その二人は「使える」のか？」

>私も実力は知らないわ。けど実力はあると思っけど<

燈子はまた舌を打つと

「式に動いてもらう状況も考えなくてはな…」

>悪いわね…私も急いで急行するから<

「問題ない。妹の不手際だ。尻拭いは姉の勤め。悪く思ってるならさっさと来い」

>…わかってるわよ！！<

ブヅ、と電話が切れる音がした

「…やれやれ。アラタには言いたくないが、言わないといけな
い」

一瞬躊躇ったがやはり伝えよう、とそう考えてアラタにメールをす
る事にした

………

上条当麻と神代ツルギは二人して密談をしていた

「どうする当麻。リドヴィアとオリアナを探すのもそうだが、イン
デックスを騙しきる自信がないぞ」

ステイルと土御門から事のあらましは聞いていた

またツルギは真面目な空気になると口調が変わる

「そうなんだよなあ…あいつ空腹で倒れてないといいけど」

と、思考してるとぼむ、と肩を叩かれた

振り向くと半袖短パンの姫神秋沙と清掃ロボにちよこんと座った土
御門舞夏がいた

「どつしたの？」

「腹減ってるなら弁当くうかー？」

二人が聞いてくる

「いやいや、カーミンジョンが空腹のインデックスを放置してるらしくてな。おまけに場所も分からないという始末だ」

「？ シスターなら。小萌先生とあっちを歩いていたらけど」

姫神がび、と茂みを指差す

「うん。私も見たから間違いはないんだぞー？」

「？ わかった、探してみる。ありがとな二人共」

それだけ告げて上条はその茂みの方に歩いていった

そして清掃ロボに乗った舞夏もウィーンという音と共に弁当販売に戻っていった

「さて…。俺も多少」

言いかけて自分の服の裾が何かに握られている事に気づいた

「…」

姫神だ

「…どうした？ヒメガーミン」

「少し。一緒に歩きたい」

微細に頬を染めツルギに言う

「…構わない。俺で良ければな」

書かれてはいないが神代ツルギは三沢塾の時に姫神を助けたのだ

上条当麻と共に

………

吹寄制理と鏡祢アラタは公園を歩いていた

因みに後ほどここに上条たちが来るのだが

「貴様は今まで本当にどこにいたのかしら。人に心配をかけさせて…」
「…つとに」

因みに学校で正体がバレた時号泣しながら抱きつかれた

宥めるのが本当に苦労したが過ぎた話はもういいだろう

「悪かったと言っているだろう。…にしても」

アラタは吹寄の体を下から上に見て

「相変わらずでかいな、お前」

瞬間ビキリ、とこめかみに青筋が浮かび上がった

「…けど今日はいいか。…貴様が生きているという事がわかっただけで、十分よ」

怒りが収まっていく吹寄は本当に楽しそうな笑顔を一瞬見せた

「ったく。運営委員だっけ？大丈夫なのかお前」

「っと、いけない。忘れる所だった」

そう言つて一度背伸びするとアラタに背を向けて走り出した

「…鏡祢」

不意に吹寄に声をかけられた

「なんだ？」

「…また、学校に来るのよね？」

振り向いた吹寄は悲しい表情を浮かべていた

「…ああ。いつになるかはわからないがな」

それを聞いた吹寄は笑みを作り

「…そ。ならいいわ」

満足そうに走っていった

「…美琴とかにはなんて会おうかな…」

普通に会つと雷を喰らいそうな気がする

まあ泣かせたから雷くらいなら問題はないけど

そんな事を考えていると携帯にメールが届く

差出人は蒼崎燈子

件名は「仕事だ」

「アラタ、仕事だ。悪いが今から指定する場所に来てくれ」

その文面を見て鏡祢アラタの表情が変わる

今

科学と魔術が交わった

1 大覇星祭（後書き）

早速吹寄と再会

なんかキャラが変わってるような…

不安です

2 オリアナ「トムソン

鏡祢アラタは指定の場所まで歩いてきた

それなりにまばらな人がいるが怪しまれる事はなさそうだ

「燈子」

アラタは目的の人物を発見し声をかける

声をかけられた本人はタバコを吹かしながら顔を向ける

「来たか。今から簡単に説明するぞ」

魔術師が入り込んだ、という事だ

「またいきなりだな。連中の目的は？」

「さつき青子から連絡が来た。取引霊装は刺突抗剣。^{スタッフソード}聖人を問答無用に殺す類の霊装だ」

アラタの耳に聞き慣れない言葉が届いた

「聖人？」

「ああ、説明してはいなかったか。聖人と言うのは、十字教の「神の子」によく似た体質の人間の事を指す。十字教の「偶像の理論」じゃ「神の子」の処刑に使われた十字架のレプリカにもある程度の力が宿る性質を持つ。それを「神の子」と人に置き換える、「神の

子」に似た人間には「神の子」の力が宿ることとなる。この選ばれた人間こそが「聖人」なんだ。ま、早い話荒耶みたいなヤツだよ。だけれど」

そこで燈子はタバコを吸い煙を吐き出す

むわぁ、と灰色の煙をアラタが息でふー、と吹き飛ばしながら燈子の言葉の続きを待つ

「その「聖人」には欠点がある」

「欠点？」

「ああ。強さにクセがある。聖人というのは神の子に似た性質を待つ人間だ。つまり与えられるもの全てを引き継いでいるという訳なのさ。弱点、とかもな」

「弱点：？なんだそいつは」

燈子はくわえたタバコを手にとって口から離し再び煙を吐く

そして薄く笑いながらアラタに問うた

「神の子は何で殺されたと思う？蘇ろうが何だろうがその事実が変わらない。では何で殺されたか」

戸惑うアラタを尻目に燈子は続ける

「それは刺殺だよ。両手両足を釘付けで十字架に固定して槍で脇腹をグサリ。槍がトドメか生死確認の為か知らんが結果「刺し殺す」

事に変わりはない」

手に持ったタバコをまったくわえ

スタッフソード

「『刺突抗剣』というのは処刑、及び刺殺の宗教的意味を抽出し、極限まで増幅、凝縮、集中させた霊装だ。人間には意味はないが、聖人には一撃決殺の威力を誇る。距離、場所に関係なく、切っ先を向けられただけで、な」

その言葉にゾツとする

「…連中はそんなのを取引して何するつもりだ」

アラタが聞くと案外素っ気ない返事が返ってきた

「戦争だろうな。聖人は魔術の世界じゃ核兵器並だ。敵の聖人だけ殺して味方を保護するだけでも戦況は変わってくる」

戦争

あまり実感は湧かない単語

「ま。私から説明出来る範囲はここまでだ。後は追々お前の耳にも入ってくるハズだ」

「え!？」

あまりに一方的に話を切り上げた燈子は吸い終えたタバコを内ポケットに入れてあった携帯灰皿にぶち込むとまた別のタバコを取り出して火をつけ始めた

「あ、ちょっと燈子!？」

背中を向けた燈子は手をヒラヒラさせて去っていった

「…ったく。相変わらずだなホントに」

アラタは内心呆れながら、しかし変わらない燈子に感謝しながらその場を後にした

……………

報告をメールで受けた両儀式と黒桐幹也は顔を見合わせる

「式の予感が当たったね」

「だな。幹也、お前はトウコと合流してる。オレはアラタと合流して仕事する」

幹也はその言葉に頷くと

「…無茶しちゃダメだよ、式」

「…安心しろ。オレは無茶しない」

それを聞くと幹也は安堵の笑みを浮かべ

「良かった…。こんな事言つのもあれだけど…頑張つて」

「ああ」

式はそれに軽い笑みで答えると人だかりが多い場所に走っていった

.....

鏡祢アラタが歩いていると燈子から連絡が来た

>アラタ。そう言えば「虚像幻想殺し（イマジンブレイカーもどき）」はちゃんと機能しているか<

鏡祢アラタの右腕は義手だ

だがただの義手にするのもつまらない、という燈子の提案で上条当麻の「幻想殺し（イマジンブレイカー）」の力を模した力が宿っている

「使った事がないからなんともな」

>お前の虚像幻想殺し（イマジンブレイカーもどき）は本物とは違う。確かに異能は全て打ち消せるが、上条当麻みたいに無限には使えない。...いや、打ち消す、ではなく蓄積する、が正しいか<

上条当麻の「幻想殺し（イマジンブレイカー）」は異能を打ち消す

鏡祢アラタの虚像幻想殺し（イマジンブレイカーもどき）は異能をその手に蓄積する

「蓄積量が限界を超えると？」

>右腕が吹っ飛ぶだろうなく

背筋に寒気が疾った

「蓄積したヤツを放出するにはどうしたらいい」

> 私に言え。時間が経てば勝手に放出されてくが、私に頼んだ方が手っ取り早いだろうく

つまりは時間を経ればまた使えるようになるらしい

> だが極力虚像幻想殺し（イマジンプレイカーもどき）には頼るな。
基本は「直死魔眼」で犯せころく

イーブルアイズ
「直死魔眼」とはアラタの能力だ

その眼で視た死の線、及び死の点をなぞるか射抜けば対象を犯す力だころ
形無いものも例外はない

「…わかった」

> くれぐれも壊すなよ。複製が大変なんだからなく

また燈子は一方的にブヅリ、と電話を切る

「…本当に感謝しても仕切れないな」

携帯を閉じながら内ポケットにしまう

道中とある「短髪」とすれ違ったがアラタは気付かなかった

.....

「あれ？」

御坂美琴はすれ違った人物を見て変な感覚を覚えた

「...白い服に帽子...。あたしの知り合いにそんな人いたかな...」
だけどなんか懐かしい

彼の隣を歩いたらなんか心が安らいだ感じがした

「...まさか」

アラタ？

考えたがすぐに思考を放棄する

「...ないない...。引きずり過ぎだぞ御坂美琴!!」

パンパン、と頬を叩いく

「...アラタはもういないんだ...。もう」

受け入れたくない現実を受け入れて美琴は前に歩き出す

だが心のどこかでは

彼が生きている事を信じて

.....

アラタがしばらく歩いてると見慣れたツンツン頭と無駄に巨乳な女性、そして作業服を着た金髪の外国人のような女の人が立っていた

ツンツン頭は上条当麻だ

巨乳の女性は吹寄制理

金髪は…知らない女性だ

だが金髪はともグラマラスで作業服はなんと第二ボタンしか止めていないのだ

おまけにズボンもかなり緩そうだ

ひょっとしたらお尻が見えているのでは、錯覚させる

また何か大きい看板のような荷物を抱えていた

アラタはこほん、と呼吸を整えて声色を変える（ただ低くしただけだが）

「どうかしたのか。運営の嬢ちゃん」

吹寄は顔を見て一瞬名前を言いそうになるがアラタの「しー」というジェスチャーに気づいて

「あら、貴方は」

「んあ、なんだ吹寄。知り合いなのか？」
隣の当麻がアラタを向く

事前にサングラスをアラタはかけていた為正体はバレていない
ある意味奇跡かも、とアラタは思う

「あら。二人の知り合い？お姉さんちよつとよそ見してたら二人と
ぶつかってしまつて」

金髪がアラタ（グラサン装着済み）を見て喋る

よく見るとヘアスタイルはかなり手を入れてるようで全体的には髪
を細い束ごとにアイロンでクセをつけて小さい巻き髪を互いに絡め
るように三本の太い束に分けてる

（…吹寄以上かも）

たわわなバストに目がいかないように自制する

「とりあえずお近づきのしるしに、握手でも交わそうかしら？」

金髪の女性が手を差し出した

「おっと。こりゃご丁寧に」

アラタはふと考える

（虚像幻想殺し（イマジンプレイカーもどき）でも使ってみるか。
ま、意味ないと思うけど）

考えながらその手を右手で握り返し

バシユウ！！ と右手が「何か」を破壊し蓄積した

「…え？」

その声を上げたのは上条当麻だ

だがその言葉が入ってくる事はない

アラタは何を「蓄積」したが確かめる途中だし

金髪は「何を破壊されたか」を確認してる最中だ

「…とと」

金髪は苦笑を浮かべようとしたがそれすらも失敗し

「そろそろ私もお仕事に戻らないといけないから、行ってもいいかしら」

言うだけ言つと返事も待たず立ち去ってしまった

(…マジかよ)

内心舌を打ちながらある程度距離ができた事を確認し、そして当麻に

「（仲間に連絡入れておけ）」

そう呟くとアラタは当麻の返事を聞かず走っていった

「あ、おい！」

後ろから上条の声が聞こえたが気にはしなかった

「ち……！始まりやがったな……」

毒づきながら呟く

決して喜ばしい事では、ない

……………

作業服を着崩した金髪の女性は脇に大きい看板を抱えて人ごみを縫って歩いていた

おもむろに作業服のズボンから暗記に使うような単語帳を取り出す

白紙の厚紙に銀のリングが通しただけの

「はむっ」

女は単語帳のページを噛んで引つ張り取り外す

するとリトマス紙のように文字が浮かび上がった

筆記体で書かれた「WaterSymbol」という黄色い文字

その紙を携帯のように耳に当て

「あー、あー、もしもし。こちらは「オリアナ」トムソン」。聞こえてるなら返事をしてくれると助かるわん」

> なんだ。まだ指定の場所にはついていないハズだが<

聞こえてきたのは男の声

「あら。お嬢ちゃんは？」

> 「リドヴィア」の事か？さあな。私は知らん。私はお前から貰った紙でこう通信してるに過ぎない<

「そう？まあ簡単に説明するわ。お姉さんが自分に使ってた「あの術式」が破られちゃったの」

あの術式

それは一種の保険みたいなものだ

向き合って話す間は特に意味はないが少しでも背を向けたら「呼び止める事じゃない」と思いこませ二度とその背中に声をかけようとは思わなくなるというものだ

> …直接的な原因は<

「わからないわ」

>これからの対応策は<

「わからないわね」

>…切るぞ<

「ああ！切らないで切らないで！お姉さんにはそついつの喰らって喜ぶような趣味はないんだから」

>…これからどんな策に出る？<

「そつね」

オリアナ「トムソンはニコリ、と笑って

「まずは、後ろにいる坊やを撒かないとね」

………

とあるホテルの一室

先ほどの通信を切り男は深い溜め息をつく

「…やれやれ。念のため私も出た方がいいか」

男は椅子から立ち上がると緑色のデッキを前に突き出す

すると腰にバックルが現れる

指をパチン、と鳴らし

「変身」

バックルにデッキをセットする

光と共に男は姿を変える

「…食事の時間だ。バイオグリーザ」

ベルデはデッキからカードを取り出し

バイオバイザーにセット

>クリアーベント<

その電子音が鳴ると同時ベルデの姿が消えた

3 SKULL(前書き)

やっぱり微妙な出来です

だが後悔はしていません

3 SKULL

アラタの見ている先で作業服の金髪、おそらくオリアナはいきなり角を曲がった

「気付いたか！」

まず見失ってはいけない

気配を断つのを止めて走り出す

幸いな事に進行ルートに人だかりはできてない

ビルの輪郭に従って角を曲がる

結構遠くで金髪の髪が揺れている

意外にもこのスーツは動きやすく機能性も抜群だ

唯一心配なのは

「やべ、帽子帽子！」

走ってるせいか帽子が脱げやすくなってる

追跡もそうだが今のアラタにとって

追跡<帽子

なのだ

「いけないのわかってるけどねっ！」

「アラタ！」

後ろから声が近づいてくる

和服に赤いジャンパーを着た両儀式が走ってきている

「標的は！」

「目の前の作業服、金髪！デカイ看板を持ってる女だ！」

「看板じゃないな、スタッフソード多分「刺突抗剣」だ！！、くそ…早い…！」

お互い走りながら目の前の標的を逃がさないように目を凝らす

「いいぜ…久々に面白そうだ…！」

「ちょ、速度上げんかって…！」

前を走る式に追いつくようにアラタはついていく

……………

（しつこい…！てゆうか一人増えている！？）

走りながら後ろを振り向いて内心舌を打つ

迷いやすい小道を何度も通って見失わせるように努めてきたが全く

の徒労

「一応学園都市も協会諸勢力も今の街中じゃ手は出せないって話だったハズだけど…、やっぱり甘くはないわね…」

オリアナの足がブレーキをかける

（多少苦しいけど、あそこを通るのが安全かしら…）

思い、計算し、決断する

オリアナは横合いの別ルートに飛び込んだ

………

「行動パターンが変わった？」

式とアラタはオリアナが止まった場所で立ち止まる

周囲を見渡すと前方に人だかりが出来ていた

「あの看板っぽいの抱えてあの人だかりは通れないな…」

「…バスターミナル？」

オリアナが逃げた方に目を向けると一面アスファルトの空間が広がっていた

辺りを警戒しながら式と二人見回す

不意に後ろから気配がしたのでアラタは振り向いた

そこには上条当麻と土御門元春、赤い髪の神父が走ってきていた

どうやら燈子の言っていた味方の魔術師だろう

「アラタ、こうなると地上の追跡は諦めて、オレたちは空から追跡しよう」

式の提案にアラタは同意し

「だな。地上はあの三人に任せるか」

式を抱えると壁を蹴ってアラタは華麗に跳躍した

.....

「あれ！？あの人達が…」

上条当麻は先ほど跳躍した二人に驚愕の声を漏らす

「上条当麻、いちいちあいつらを相手にしようと考えてるな。協力者なんだからこれ以上なれ合う必要はない」

ステイルが吐き捨てるようにそんな言葉を呟いた

「気になるのもわかるけど、今は目の前の仕事に集中しようぜい」

土御門が上条にそんな言葉を投げかける

「あ、ああ……」

当麻はそれに素っ気ない返事を返すが

（なんなんだ、あの白いやつ……。どっかで会った事があるのか……？）

………

空での追跡は綺麗に失敗に終わった

「……壁蹴りした努力はなんだったんだ」

「悲観するな。いざとなったらトウコとかにも頼めばいい」

隣で携帯を操作しながら式が呟く

「今トウコから連絡が来た。敵さん、万が一に備えて迎撃術式を仕掛けたい。場所は……とある中学の校庭ド真ん中」

「……マジかよ。たしかその中学あと少ししたら競技始まるじゃんか」

「正面から入るにやちよつとマズいな。アラタ、二手に別れよう、落ち合う場所は校庭だ」

その後少し言葉を交わすとお互い顔を見合わせてビルから飛び降りた

………

燈子と携帯で連絡を取りながら目的の中学目指して歩いていた

>彼女の迎撃術式は「魔術を行う為の準備を読み取りそこから使用者の生命力を識別して妨害する」というものだ<

「準備？言霊みたいなやつか？」

>可能性だな。もしこれに反応するならかなり厄介だ、オリアナの「速記原典」の近くで話ただけでターゲットの追加を入力するハズ。一般人も十分危ない<

「なっ…！！」

アラタは驚愕の声を漏らす

>あとは「触れる」だな。もし速記原典がそれに反応するものなら、かなり危つい<

「…、」

>本格的な魔術師なら触れる位じゃ問題ないだろう。だが素人なら別だ。条件が曖昧でも生命力を解析して侵攻もされるだろう…<

頭の中で嫌な事が浮かび上がり

即座に否定した

>多分上条らもそれに気づいてる筈だ。とにかくさっさと迎撃術式を片せ、一般人の被害者は出したくない<

そこで電話が切れる

「無論に決まってるだろ……!!」

何の為に戻ってきた

俺の「大切なモノ（テリトリー）」は

必ず守り抜いてやる
!!

.....

なんとか中学に潜り込むには成功した

行われる競技は玉入れだ

しかし不安が別にある

競技を行う中学に常盤台中学が出てるのだ

審判は運営委員の吹寄

まだ見かけてはいないがどこかに必ず御坂美琴がいる筈なのだ

今は会いたくない

本音をぶちまけると今すぐ会いたい、抱き締めたいという気持ちが
いっぱいだ

しかし今はオリアナ・トムソンが仕掛けた迎撃術式を探し出すのが
先決だ

アラタは周囲に注意しながらオリアナが仕掛けた迎撃術式を探し始めた

.....

「...お姉様？」

白井黒子は怪訝な表情をした御坂美琴を眺めながら声をかける

「どうなさいましたの？もうすぐ玉入れが始まりますわよ？観客席には初春に佐天さん、国法先輩も見て応援してらっしゃいますのよ？」

無論その隣には神那賀雫や左翔太郎と言った馴染みの面子の顔もあった

黒子に指摘され美琴はハツとして

「いや、今なんか見覚えのない白い服着た人がいたからさ...」

「白い人？」

黒子はその言葉を聞くとキョロキョロ、と辺りを見回し

「どこにもいないではないですよ」

「あつれー...気のせいかな...」

美琴はそう判断し

「まあいつか。黒子、よろしくね」

「お任せくださいお姉様！！この白井黒子、必ずや勝利ももたらしてみせますわ！！」

『始め！！』

吹寄の声が響き渡った

刹那戦争が始まった

.....

「にやわわわ！？」

鏡祢アラタは怯えていた

始まった玉入れに恐怖を覚えているのだ

「玉入れ！？これが玉入れ！？弾丸投げじゃないの！？」

帽子が飛ばないように抑えながら迎撃術式を探す

その時この激戦の中に見覚えのある顔が見えた

土御門と上条だ

二人は玉入れのポール籠に近づいていた

（となると、八本のポール籠のどれかが…！？）

軽い推測を立てると気づかれないように二人を追った

.....

「玉入れ、か」

両儀式は玉入れという名の戦争に驚愕していた

「アラタ、悪い。いけないかも」

流石にこの戦乱を突っ切る自信は式にはなかった

「ん？」

妙な気配を感じた

まるで透明人間が隣を歩いてく感覚

「錯覚？ いや、まさか……」

式は考えながら注意を凝らして校庭全体を見渡した

.....

ほとんどのボールはすべて不発

おまけに最悪なタイミングでピー！！ と笛の音が響き渡った

スピーカーから流れていた競技用の音楽が止まりその直後

がし、と八本目のポール籠を横合いから掴む手があった

ちなみに七本目のポール籠はすべて不発

「全く。上条当麻、貴様ここで何をしているの」

上条当麻の不幸スキルが発動した

幸いかアラタにはまだ気づいてはいない

しかしよく目を凝らすと

ポールの支柱と掴む吹寄の掌の隙間に

「一枚の厚紙が挟まっていた」

セロテープで留められた厚紙

厚紙には青い文字で

「英文が筆記体で書かれていた」

バギン！！ と異音が炸裂する

ぐらりと吹寄が揺らいだ

離れた支柱に吹寄がつかんでいた場所には「Windows Symbo

式が走ってくる

このトラブルで収まった機を見計らって走ってきたのだ

「…一般の被害者…。重度の日射病と同じ症状だ。救急車を呼べばまだ何とかなる…」

「…いや、救急車じゃ間に合わない…！式、彼女を連れてここに行ってくれ」

アラタは吹寄と共に一枚のメモを渡す

「…わかった」

式はゆっくり頷くと吹寄を抱えて走っていった

「…おやおや。被害者が出てしまったみたいですね」

何もない空間から声がする

刹那、虚空から緑の仮面ライダーベルデが現れる

「…スペシャルマッチだ。逃げてみな」

……………

「ちょ、何か出ましたよ！？」

佐天の叫びがこだまする

「仮面ライダー！？」

「そんな、マスクドシステムは今矢車さん達が…！？」

初春、国法が声を紡ぐ

「待て、あの白い服のヤツ…なんかおかしくねえか」

翔太郎の言葉に国法は首を傾げて

「…戦う気なの！？」

………

「お姉様、あのライダー…！」

黒子が声を荒げて美琴に言う

「見た事ないわね、あんなライダー…。カメレオン…？」

「御坂さん…！」

神那賀雫がバーストライバーを巻きつけて走ってくる

「神那賀さん…！」

「下がってて…！ その貴方も…！」

神那賀が白い服を着た男性に叫ぶ

だが男性は全く聞く耳を持ってない

.....

「仲間か」

低い声でベルデに聞いた

「だとしたら？なんだ。何が出来る」

ベルデはさも面白そうに

「ったく。彼女には同情するよ。あくまで保険に仕掛けたあの迎撃術式に引つかかるなんてな」

「...なんとも思わないのか」

「全然。運が悪かったただけだろう」

アラタの中で何かがキレた

「...お前は」

おもむろにロストドライバーを腰に巻き付ける

そして内ポケットの中から一本のメモリを取り出し

「...越えてはならない一線を越えた」

言いながら余った左手で帽子を取る

その素顔に誰しもが驚愕した

.....

「...お、お姉様...?」

「う、嘘...?だって、だってアラタは...!?!?」

御坂美琴も白井黒子もただ驚くばかり

神那賀に至っては変身に使用するメダルを地面に落としてしまっていた

.....

国法は目を見開いた

「...アラタ?」

「佐天さん...わ、私、夢でも見てるのでしょうか...?」

初春の目尻には涙があつた

「ううん、夢じゃない...夢じゃないんだよ、初春っ...!!」

佐天は初春の頭を撫でながら慰める

泣きたいのは佐天も一緒だ

だが国法は隠す素振りもなく眼鏡の奥の瞳を潤ませた

.....

「...やっぱり生きてたか...!!」

翔太郎はくすぶる気持ちを抑えながら帽子をかぶり直す

頬に伝う涙を隠すように

.....

>SKULL<

アラタはガイアウィスパーを起動させロストドライバーにセットし
ドライバーを開く

>SKULL<

「...変身」

ヒュオオ!! と風が巻き起こりアラタの姿を変える

白いマフラー

漆黒のボディ

髑髏のようなマスク

頭にはSの文字が刻まれている

それが今の鏡祢アラタ

「…誰だ、お前」

左手の帽子をゆっくり被り直し

「仮面ライダー…スカル」

左手で仮面ライダーベルデを指差す

「…さあ」

普段ならば自分なりのアレンジを加える所だが、
敢えて言葉を借りて次の言葉を放った

「お前の罪を数えろ…！」

3 SKULL（後書き）

遂にアラタの事が皆に知れた…

E X 吹寄の想い（前書き）

かなり短いです

EX 吹寄の想い

両儀式は走っている

吹寄制理を抱えてはいるがそれでもかなりのスピードだ

抱えられ運ばれてる状況、朦朧とする意識の中吹寄は思った

(…く、るしい…)

自分が誰かに運ばれてるのはなんとなく理解できる

だけど現実味がなかった

頭の中で誰かが言っていた言葉が耳に残る

日射病

体育や全校集会とかにはさほど珍しくはない症状

ゆえに軽く見られがちだが原因は急速な脱水症状で重度になれば命の失う危険性もある

もちろん吹寄も日射病にかかるのは今日が初めてではない

だがここまでの症状は体験した事がなかった

水分はしっかりと補給していたし体の熱も適度に逃がしてた

疲労など体調不良の要因もない

そんな中耳に聞こえてきたのは自分を抱えて走っている一人の女性
赤い皮ジャンパーを着てこんな時期に和服を着ている

しかし恐ろしいほど早かった

「…巻き込んで悪かった」

式は思う

「この子だつて頑張った。人に見られないところで一生懸命頑張ってた筈なんだ」

両儀式は吹寄制理の事はよく知らない

だが遠目から見ている限り彼女がこの大覇星祭に並々ならぬ努力をしてたに違いない

その言葉に吹寄は心の中で思う

つまりは全て自分のせい

せつかく

せつかくアラタが帰ってきたのに

こんな形で大覇星祭を台無しにしてしまった

（いや、だな…）

今まで何があつたかわからない

ただあゝして生きていた

せつかく彼にも大覇星祭を楽しんでもらいたって思ってたのに

彼は残る日程を悲しそうな表情で過ごすのか

（…それは、嫌だな…）

………

両儀式はふと足を止めた

そして違和感を覚える

（…なんで人がいないんだ？）

今だってそれぞれ競技に向かう人々が行き交うはず

なのに誰一人としていないというのはどういう事か

「 お前か」

一人男の声がする

式が振り向くとそこには虎のようなライダーがいた

片手には斧のような武器

「…皆の幸福の為、お前を倒す」

言つと斧を肩に乗せて構えをとつた

「っ…やる気かよ…！」

式はナイフを抜こうと思い、止めた

「今お前なんかと遊んでる暇はない！！オレは、こいつを運ばない
といけないからな！！」

式が叫ぶと同時に跳躍する

虎のライダーを飛び越え式は走った

「待て！！」

虎のライダーが振り向いて追いかける

意外にも早かった

（くそ…！なかなか早いな…！）

「式」

横合いから声がした

「トウコ」

「下手な魔術を感知したからな…。む、その子は？」

燈子は式が抱えている吹寄を見て眉をひそめた

「…被害者だ」

「…そうか」

燈子はそう頷くと空を見た

「…そうだトウコ、悪いけどこの子連れてここ行ってくれないか？」

「構わないが…お前は？」

式はちらりと後ろを見る

そこには虎のライダーがいた

「…遊んでく」

「…無茶はするなよ」

燈子はそう言って式から吹寄を譲り受けると走り出した

「…戦う気になったか。女」

「ああ。一度戦ってみたかったんだ。仮面ライダーってのさ」

式は帯の背に隠してある鞘からナイフを抜き放つ

「…生きているのなら」

そして式は駆ける

「神さまだつて殺してみせる…！」

4 再会と暖かさ（前書き）

今回も短いです

4 再会と暖かさ

校庭で周りの観客が見守る中

「は、罪を数えるだと？よく言っな」

ベルデはさも愉快そうに笑うとデッキからカードを取り

「くだらないな」

太ももにあるバイザーにセットする

>ホールドベント<

バイオグリーザの目の形をしたヨーヨーがベルデの手元に現れる

「潰してやる…!!」

バイオウィンダーを伸ばしスカルに放ってくる

「つと!!」

ウィンダーを避けながらスカルは接近しそのまま蹴りを与える

「ぐ!?!」

顔面に蹴りを喰らったベルデはのけぞり体制を崩す

「はぁ!!」

その隙を逃さず胸部にパンチを叩き込む

「ち…！！調子に乗るなよ骸骨野郎…！！」

再びカードを取り出しバイバイザーにセットする

>クリアーベント<

電子音が響くと同時ベルデの姿が景色に同調し

「消えた！？」

ベルデの姿が消えたのだ

スカルは必死に目を凝らしながら辺りを見回すがベルデの姿はなく

「はあ！」

声と共に痛みが疾る

右側を振り向くが誰もいない

「ち…！！厄介な能力だなちくしょ…！！」

辺りを見回していると戸惑った表情の上条当麻と土御門元春がいた

「当麻！！さつさといけ！！ここは俺に任せな！！」

「わ、わかった！！」

スカルに促され自分の使命を再認識した当麻は土御門と一緒に校庭から抜け出した

その姿を目撃した後姿を隠しているベルデを再び探す

しかし気配すら消えている為全くわからない

「くっそ……!!」

舌を打つと同時に背後に痛みが疾る

背中を攻撃された

連撃が成功した事に気を良くしたベルデはそのまま攻撃を叩き込む

「ぐ、か、うわぁ!!」

……

「……アラタ……!!」

美琴は名前を呟くと同時に駆け出していた

そしてスカルの近くに走り寄ると

「正々堂々と、戦ええー!!」

美琴の叫びと共に雷が放出され辺りに撒き散らされる

「ぐを!？」

一瞬雷を喰らいシルエツトを現したベルデを確認すると

「そこか!！」

スカルマグナムを抜き乱射する

弾丸が命中しベルデが姿を現した

「ちい…能力とは厄介だな…!!」

「お前の方がよっぽど厄介だと思うけどな…!!」

スカルはマグナムをドライバー左側のホルスターに戻し言い放つ

「姑息な手ばかりか使いやがって…」

「戦いに姑息も糞もあるか!!それに忘れてないか!?ライダーの敵はライダーって事をよお!!」

ベルデは激昂しカードを取り出す

>ファイナルベント<

「潰す…!!」

ベルデは跳躍すると足にバイオグリーザの舌が巻きついて振り子の要領でスカルを掴む

「のは!？」

「アラタ!？」

ベルデはそのまま遠心力を利用しスカルの頭から叩き落とす必殺技、
デスバニツシュを繰り出す

そのまま脳天を叩きつけられスカルは絶命する ハズだった

>ブレストキャノン<

一人の乱入者によって防がれた

バースに変身した神那賀がブレストキャノンの射撃でベルデを撃ち
落としたのだ

「ぐああああ!？」

「アラタはやらせない…!!」

バースは呟きながらスカルと美琴の隣に移動する

「…ライダーの敵はライダー、か…」

半ば落とされた形のスカルはゆっくりと立ち上がりながら

「俺の場合、ライダーの味方はライダーってとこだな…」

スカルは一気に走り出すとベルデの顔の側面に蹴りを打ち込む

「あがあああ!?!」

盛大に吹っ飛ぶベルデ

スカルはゆつくりとドライバーに手をやりスカルメモリを抜く

そしてスカルマグナムにメモリをセットする

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

「…スカルパニツシャー」

ベルデにマグナムを向けて引き金を引く

放たれた四つの金色の弾丸は確実にベルデを捉え

「ぐあああああ!?!」

デッキを破壊した

倒れるベルデを背に、そして今度はバイオグリーザに向けてスカルパニツシャーを放つ

同じように放たれた弾丸はバイオグリーザに全て命中しバイオグリーザを爆発四散させた

スカルはその爆発を背に向けてマグナムをクルリ、と回しながらホルスターにマグナムを戻した

「…やれやれ、だな」

.....

変身を解除した直後に待っていたのは

「アラタあああー！」

御坂美琴の体当たりのような抱きつきだ

「あばあ！？」

いきなりだった為支えきれず盛大にすっころぶ

「アラタ！！アラタ、アラタだあ……！！」

泣きながら胸元に頼ずりする美琴にアラタは戸惑いながら、しかしそのぬくもりに安らぎを感じながら美琴の頭を撫でた

「……お兄様。今までどこにいらしたのです」

美琴を追う形で黒子、初春、佐天、国法が歩いてくる

「ったく。おやつさんかと思っただぜ」

そして左翔太郎だ

「……皆」

「アラタさん……今まで何してたんですか……！！」

「そうですね！！御坂さんこんなに泣かせて……！！」

言う初春と佐天も泣いている

「……ジャッジメント散々風紀委員サボっておいたんだから、覚悟、出来てるわよね？」

国法も眼鏡の奥の瞳を潤ませながらそんな言葉を投げかける

「……やっぱり、馬鹿アラタは馬鹿アラタね……」

変身を解いた神那賀も嬉しそうな表情だ

本当はオリアナを追いかけていなければならないが……

（少しだけ、再会の余韻に浸ろうか……。だけど、吹寄の敵は必ず取る……！！）

こんな言い方だと彼女が死んだような言い方だが死んではない

巻き込んでしまったのだ

お詫びは必ず……

だから、間に合ってくれ……。吹寄

………

ガキン！！　と刃と刃が交差する

両儀式と仮面ライダータイガは自身の獲物をぶつけ合う

「やるじゃないかトライダー、ぞくぞくしてくるぜ」

式はナイフをタイガに向けて構える

「お前もな。流石と言っべきか」

お互い睨み合いながらジリジリと間合いを取る

しかし

ふとタイガの殺意が消えた

「…なんだ。止めるのか」

「仲間がやられたんでね。…少し体制を立て直す」

タイガは変身を解除し

「…僕は東條、また会つかもね」

「会ったとしたらオレじゃないな。骸骨ライダーに注意しなよ」

東條、と呼ばれた青年は特に頷きもせず背を向けて歩き去っていった

「…トウコ、間に合ったかな…」

………

「よほどあのカエル医者には自信があるんだな」

式に渡されたメモを頼りに病院にやってきた蒼崎燈子

燈子は内ポケットからタバコを取り出すとライターで火をつける

「…私も、無関係ではいられないな…」

吹寄を医者に渡すとカエル医者はかなり自信に満ちた表情で

後は僕に任せてくれないか？

そう言っ て治療室に入っ ていっ た

多分あの子はカエル医者に任せておけば間違いなく助かるだろう

燈子は軽く着崩れを直し

「さて。行くか…」

ゆっくりとした足取りで歩いていっ た

オリアナを捕らえる為

（私から逃げられると思うな？「追跡封じ（ルートディスタープ）」）

5 速記原典と幻想殺し 骨と虎

オリアナを追わないといけない

だが

美琴が腕を組んで離してくれない

事情を話せば離してくれそうだけれどだからといって美琴を魔術側に誘う訳にもいかない

故に

「全く。散々心配かけたんだから…ホントにもう」

美琴が頬を染めながら握った手を離さない

く、これは次の競技が始まるまで移動出来ないな…

「聞ってるの？アラタ」

「つと、悪い悪い」

鏡祢アラタ、一時離脱

………

両儀式が走っていると隣の車道を走っていた自律バスが突然火を噴いて爆発した

「っ！　なんだ！？」

流石にびっくりして足を止める

自律バスは轟々と炎が燃えている

バスの奥にはツンツン頭の少年と金髪頭のグラサン少年がいた

「あの爆発はお前たちか」

式はその二人に近寄って話かける

「にや、まさか一般人…、て訳でもないにやー」

「ああ。オレは両儀式。にしても随分派手にやったな。相手がオリアナじゃなかったら大惨事だ」

その言葉と共に轟々と燃え盛っている炎が消え始める

吹き飛ばしたのは「霧」だ

「うふふ、魔力を使い意思を通した炎からともかく、ただ物理的な燃烧だけではお姉さんを熱くすることは出来ないわよ？　最も少々焦って濡らしちゃったけど。見る？　下着までびちゃびちゃだよ」

「は、この期に及んで冗談かよ。海外の魔術師ってのは変態だな」

式は鋭くオリアナを見据えたままナイフを抜く

またツンツン頭　　上条当麻　　は僅かに目を細くした

僅かだが確実に

「…お前が仕掛けた術式で全く関係ない人間が倒れたぞ。お前と初めて会った時一緒にいた女。アイツが魔術と関係あるように見えたのかよ」

上条の言葉にオリアナは

「この世に関係ない人間なんていないわ、その気になれば人間誰でも関係を持つ事が出来るもの」

反省した様子はない

「…今更どうこう言う気はないけど、あの子を傷つけるつもりがなかったのは本当だよ？お姉さんだって一般人を傷つけるのはためらうもの。」「こういふのとは違って」

言って単語帳のページを口で破る

カキン、とグラス同士が縁をぶつけたような澄んだ音が響く

瞬間土御門の体がくの字に折れ曲がった

「が…！？」

脇腹を押さえながら眼光鋭く土御門は睨む

「土御門…！」

上条は慌てて駆け寄った

「お前、この金髪に何をした」

式はナイフを構え声をあげる

「再生と回復の象徴である火属性を青の字で打ち消しただけ」

「…なるほど。音を使った魔術か」

「あら、なかなか察しがいいわね…。一定以上の怪我を負った人間を昏倒させる術式よ。貴女と貴方はそれほどひどい傷はなかったよ
うね」

（…となると上条当麻の幻想殺しは効かないって事か…あの金髪が
どんな事情かわからないけど…アラタに念の為送っておくか）

式はさりげなくポケットに手を入れ画面を見ずアラタにメールを送る
場所は伝えてはいないが彼ならオリアナの魔力を感知してここにく
るだろう

上条当麻はオリアナを睨んでいる

対してオリアナは楽しげな表情で昏倒の札を左手で掴んだ

そしてそれを風に乗せるように宙へと放り投げた

瞬く間にページはオリアナの後方に飛び去っていく

上条当麻の顔が熱を持つ

「デメエ!!」

「彼を助けたければ一刻も早くお姉さんを倒すこと。さもなくばお姉さんがいいと言うまで彼はずーとおあずけよ？そもそもそれまで彼は長持ちするかしら。案外短い方だったりして、ね？」

.....

鏡祢アラタは走っていた

やっぱり美琴を置いていくのはかなり躊躇ったが残りの期間を一緒に過ごす、と言ったら

「...仕方ないわね。絶対だかね！」

やっぱり罪悪感はいっぱいだった

それでも今日中にオリアナを捕まえれば残りの期間を一緒に過ごせる
今まで泣かせてしまった分ずっと隣にいる事が出来る

「だから、待っててくれ」

空気に漂う魔力の流れを詠みながらアラタは足を進める

待ってくれる人の為に

.....

「…む」

ふわり、とタバコの煙が揺らぐ

微細な魔力を感知したのだ

「…使い魔を持って来てはいないが…アンサズFだけでは少々不安だが、な」

燈子はとりあえず歩きながら魔力の方向に歩いていく

……………

「…大丈夫かな、式」

黒桐幹也は大覇星祭を見て回っていた

しかし恋人や友人が危ない目に遭っているのを知っている為素直に
楽しめない

「今僕に出来るのは、待つ事しか出来ない」

黒桐幹也は恋人である式を、そして友人であるアラタの無事を願
いながら練り歩いた

……………

「見つけた…」

アラタが辿り着くと既に一触即発な空気だった

じた

振り向くと一人の男性が立っていた

「……」

青年は右手を突き出す

それはカードデッキ

ベルデのものと似ているが違う

紋章のようなものは虎みたいな形で何よりデッキの色が青かった

ば、ばっ！と手を交差させ右手をバックルに持っていき、叫ぶ

「変身！」

刹那鏡の碎けるような音と共に残像が重なり青年の姿を変える

「仮面ライダー……！？」

アラタは戸惑う

なぜこんな事に手を貸しているのかわからない

「……僕は英雄になる為にリドヴィアに手を貸した。彼女の理想は、世界の平和」

アラタの心を読んだように虎のライダーは呟く

「僕は東條サトル。英雄になる為に、貴方を倒す」

そう言つてサトル　タイガ　は白招斧「デストバイザー」をアラタに向かって突きつける

アラタは逡巡する

今後ろでは式と当麻がオリアナと戦っている

式は戦えるだろうが当麻は生身、到底タイガには適わないだろう
ならアラタが取る行動は一つ

「英雄、か…」

アラタはロストドライバーを取り出して腰に巻きつける

「…くだらない幻想に取り付かれたな」

内ポケットに忍ばせているスカルのメモリを取り出してガイアウィスパーを起動させる

>SKULL<

そしてロストドライバーにスカルメモリをセットしてドライバーを開く

>SKULL<

「変身」

ヒュオオ！！　と風が吹き渡りアラタの姿をスカルに変える

スカルは左手で帽子を押さえて

「相手してやる。英雄なんて下らない理想は、俺が纏めて撃ち抜いてやる」

「下らない…？」

タイガはピク、と体を震わせる

「ああ、下らない。そもそも人は英雄を目指した時点で、英雄にはなりえない」

「！　それは、後世が判断してくれる！　今僕は、お前を倒すんだ！」

タイガはデストバイザーを構えながら一気に走ってくる

スカルはドライバー背中にある一本のナイフ　スカルエッジを抜き放ち

「…犯^{こゝろ}してやるよ。お前のその現実を」

6 浮かんだ疑問

タイガがデストバイザーを大きく振りかぶる

ブン！ と真っ直ぐ振り下ろされたデストバイザーの一撃をスカルはバックステップで回避しスカルエッジによる刺突する

すかさずデストバイザーを構えてエッジを弾く

「ちっ！！」

弾かれながらスカルは距離を取る

タイガはデストバイザーを開き

デッキから一枚のカードを取り出す

「このカードは本来相手のモンスターを凍結させる事で力を発揮する、しかし」

>フリーズベント<

「こんな使い方も出来る」

即座に辺りに氷の壁が出現する

「何！？ こなくそ…！！」

氷の壁をスカルマグナムで撃ち砕く

壁の向こうには

「んふっ」

オリアナ「トムソンがいた

「な!？」

相手が変わってる!?

思った瞬間にスカルの右側から風の刃が襲いかかった

スカルは虚像幻想殺しを発動させその刃を右手に蓄積する

「ち……!」

マズいな、あまり時間はかけてられないのに…

おまけに相手は一定以上の怪我人を昏倒させるらしい

だが、何故か使用してこない

「ふふ。お姉さんは一度使った術式を何度も使う趣味はないの」

その告白は余裕の現れか

「五大元素なんて近代西洋魔術では基本の基本よ。錬金の視点で自然を学べば誰でも取得出来る、単なる前戯に過ぎないの。扱いは簡単で応用もしやすいけど、逆に言えば読まれやすい。防護術式も逆

算しやすいの。だからお姉さんは飽きが来ないように沢山の手札を用意して、使い捨てる為に作った「魔道書」は日捲りカレンダーみたいに破り捨てないといけないってわ・け」

言ってオリアナは単語帳を口で破る

瞬間スカルから突風が巻き起こる

あまりの強風によるめいたスカルにオリアナは距離を詰めてスカルの脇腹に蹴りを打ち込んだ

ガ！！ という衝撃がスカルを襲い後ろにのけぞった

.....

対戦相手が変わった当麻と式は辺りを走り回りデストバイザーの斬撃を回避していた

「おいおい！！どんな手品ですか！！俺たちはさっきまでオリアナと戦ってたんじゃないのかよ！？」

叫ぶ当麻に対して式は

「わかる訳ないだろ！多分氷の壁生み出した時になんかあったかもしれないけど...」

「はあ！！」

喋ってる間もタイガがデストバイザーで攻撃を繰り返してくる

「おわあ!？」

当麻が身をかがめて攻撃を避ける

彼の幻想殺しは異能なら科学、魔術問わず、果ては神の奇跡も打ち消すが刃物とか物理的なモノは不可能なのだ

「上条当麻!お前は無闇に戦うな!はつきり言って危険だ!」

式はナイフで斬りタイガはそれをデストバイザーで受け止める

「くそ…!」

式は確かに強い、しかしそれでも性別は女性、男性の腕力には適わない

タイガに力負けし式は吹き飛ばされる

「くっ…!!」

空中で起用に体制を戻し着地する

いつの間にかスカルと当麻が同じ場所に立っていた

……………

「次に放つは赤色で描く風の象徴。総ページ数五七七枚目の使い捨て魔道書、「ブレードクレター明色の切断斧」。一応宣言しておくわね」

オリアナはそこで言葉を切り

「あなたたち、そこから動けば死ぬわ」

一言で宣言した

「そして動かなければ次の一手であなたたちは必ず降参する羽目になる。どちらを選ぶべきかは、わかるわよね」

動けば死ぬ

言葉を思い出すと同時に地面に何かが走った

まるで魔法陣のようなものが

降参しろ、頭が言いかけてスカルは即座に否定する

当麻も式も端からは巻き込まれた形なのだ

本来なら普通に大覇星祭を楽しめた筈なのに

何よりもこの大覇星祭を成功させようと誰よりも尽力していた女の子が頭に浮かんでくる

吹寄制理

巻き込んでしまった女の子

誰よりも努力していた女の子

その努力が今全て崩れ落ちようとしている

（そんな事が、許されていていいハズがない…！！）

スカルは一気に踏み込んだ

「今更死なんざに、戸惑ってられるかよおお！！」

.....

（ッ！？　このお馬鹿さん！！）

明色の切断斧が展開されてスカルを八つ裂く、かと思っていたが現実
は違った

スカルは全くの無傷

ありとあらゆる場所からやってくる刃を撃ち、斬り確実にオリアナ
に向かってくる

「上条当麻！」

「ああ、わかってる！！」

式と当麻もそれぞれスカルを追いかける

「…予想外だな。オリアナさん」

何時の間にか隣にいたタイガが呟く

「ええ、全くよ…なら！」

オリアナは単語帳のページを噛み取り再び魔術を発動させる

一度限りの魔術

見た目はただの風の槍、しかし当たった者の意識を強制的に吹き飛ばす力を持つ

しかしその槍はスカルの右手に蓄積され

当麻の右手に打ち消され

式のナイフで犯こゝろされる

「な…!？」

なんで、とオリアナは考えた

驚愕が頭を支配し対応する方法を忘れてしまっている

（なんで対処が出来るの!?いくら特殊な力を持っていたとしても…何か、何か判断する材料が…!!）

「お前、一回使った魔術は二度使わないんだよな」

スカルの声でハッとする

（そうか!!つまり一度攻撃を放った地点には同じ方向から同じ攻撃がやってくることはありえない!!そこから答えを導いて…!!）

刹那オリアナの腹部に衝撃が疾る

スカルの蹴りがオリアナを捉えたのだ

今まで持っていた看板は崩れ落ち上条の手元にある

吹っ飛んだオリアナはゴロゴロと地面を転がった

「…やったのか？」

当麻の言葉を式は否定する

「いや。あいつ、喰らう直前身を引いて威力を軽減させやがった」

「ふ…」

倒れていたオリアナはむくり、と起き上がり蹴られた衝撃で開きそうになる胸元を今まで看板を抱えていた右手で隠しながら

三人は身構える

しかし

「ここは退こう。オリアナさん」

タイガが前に出る

「ええ、そうね。お姉さんもちよっと着替えたいし」

あっさりだ

刺突抗剣はここに^{スタッフソード}あるのに

「ミスタースカル。それは一度貴方に預けておく。だがこれで終わ
りと思わないでくれ」

>フリーズベント<

再びタイガとオリアナの周りに氷の壁が出現し砕けた時には二人の
姿はいなかった

「おい！土御門にかかっている術式は　　！」

>術式の効果は二十分、後は自動的に切れるわよく

その声は風が運んできたものか

辺りを見回したが、どこにも何も存在しなかった

.....

隣では上条当麻がスタイル、という魔術師と連絡を取っている

三人で話し合った結果アラタと式が刺突抗剣を破壊することになった^{スタッフソード}

無論連絡が終わったら当麻も破壊に加わるが

看板に巻かれた布地は意外に固かった

梱包の真似なんかしやがって、とアラタは思ったが式には関係ないらしくナイフを躊躇なく突き立てるとゾリゾリと布地を引き裂いた

「スタッフソード 刺突抗剣でどんな形なんだ？」

「知るか。実際に見れるだろ」

式が強引に布地を引き裂いた先にスタッフソード刺突抗剣は

「なかった」

『…は？』

式とアラタは同時に呟いた

白い布から出てきたのは至って普通の看板

学生が作ったような薄い鉄板にペンキを塗ったシンプルな看板

「スタッフソード …なあ。刺突抗剣は看板に偽装してるって話だよな」

「スタッフソード ああ、刺突抗剣はそのままじゃ目立つからって…トウコが…」

ならば今ある看板はなんなのか

オリアナは塗装業者に扮しスタッフソード刺突抗剣も看板に偽装して怪しまれないようにしてたのではなかったのか

「スタッフソード …なあ、本当に刺突抗剣の取引なんて行われるのか？」

アラタに式は問いかける

しかしアラタも目の前で起きている事態についていけず

「…どうなってんだ…？」

ただ呟くだけだった

一難去ってまた一難

まだこの学園都市での戦いは

終わらない

7 使徒十字（クローチェデイピエトロ）（前書き）

今回アラタと燈子しか出てないです

そして短いです

7 使徒十字（クローチェディピエトロ）

「ペテロの十字架？」

蒼崎燈子からそんな連絡が来た時そんな疑問をぶつけた

実際燈子も息を切らしながらアラタに報告を続ける

> ああ。… 全くしてやられた…。 まずペテロというのは、一二使徒の一人、ピエトロの事だ。お前、聖^{サン}ピエトロ大聖堂という名前は聞いた事があるだろう。そしてペテロの十字架 使徒十字はローマ、バチカン全域の歴史に深く関わる十字教全体でも十指に入る最大クラスの霊装だ… <

燈子は一旦言葉を区切って大きく息を吸って

> その霊装の破壊力は、^{スタッフソード}刺突抗剣など非でもない<

そう言われてもアラタはあんまりピンと来ない

魔術の世界に足を入れたのはつい最近だしそれほど深く関わっていないのだ

> まずペテロというのは、教皇領バチカンの所有者だ。厳密にはペテロの遺産である広大な土地の上に教皇領バチカンを作った、て所か<

「バチカンというと… 世界で一番小さい国か？」

>面倒な説明は省くが、ここで問題になるのが如何にしてローマ教皇領を作ったか。ペテロの遺産である広大な土地に、ローマ正教はまず最初に何をやったか<

アラタは燈子の言葉を待つ

耳に入ってきた言葉は

>墓を建てたのさ。ペテロの遺体を埋め、十字架を立ててなく

アラタはギョツとした

ペテロの十字架、つまりはペテロの墓に立てられた十字架、という意味だったのだ

そんなアラタに構わず電話の向こうの燈子は続ける

>この地にはペテロさんが眠ってるから、教会は眠りを妨げないよう遺産の管理ともども頑張ります、というのがローマ正教の意見だ。元々はペテロの眠ってる真上にコンスタンティヌス帝が聖堂を贈呈、建設したのが始まりらしいが、ルネッサンスの際に愉快なインフレが起き大改築された。それがミケランジェロが設計した今の聖ピエトロ大聖堂…、名実共に、世界最大の教会にして、死者の上に立つ聖域、という訳さ<

アラタは考える

ペテロが死んだのが確か一世紀。

聖ピエトロ大聖堂が完成したのが四世紀、ローマ教皇領をフランク

から贈呈されたのが八世紀

かなり差はあるがきっかけはペテロの死と墓を作った時なのだ

「クローチェデイビエトロ 燈子、使徒十字の効果はどういったものだ？」

ふー、と煙を吐く息が聞こえる

タバコを吸いながら電話をしてるのだ

…いつもの通りだが

> クローチェデイビエトロ んー。使徒十字を立てたエリアは、漏れなくローマ正教の支配下だ。学園都市でも例外はないく

「な…！？」

> スタッフソード 元々刺突抗剣には「竜をも貫き縫い止める剣」、といういわくがあった訳だが、翼を持つ巨大な存在であり、眠れる財産の守護から私欲の虐殺まで行つ「竜」とは、神に仕える「天使」と、身を墮とした「悪魔」の隠語。「竜を地面に繋ぐ」、というのは、「この大地を天使に守護してもらえような聖地に作り変える」という意味合いも込められてるのだろっさく

つまり

何をやってもローマ正教の都合の良いようにねじ曲げられる、という事か

「つまり幸せのすり替え、て訳か？」

> ああ。一つ愉快的話をしてやろう。聖マーティンという人物がいてな、彼が十字教布教の為に、異教徒の古代神殿の破壊して、神木を引き抜こうとした時だ。十字教徒になるたくない異教徒の農民たちは、最後の抵抗として「貴方が本当に神に守られてるなら、今から神木を切り倒すから受け止めてみる、本当に神に守られてるなら死なない筈だ」、となく

こつという時の燈子は面白いくらい饒舌になる

> これを受けた聖マーティンは倒れかかる神木に対し十字を切る。するとどうだろう。神木は反対側に倒れていき、あわや異教徒達を押し潰すところだった。主の奇跡は本当にあつたのだ、と農民達は感動し十字教に改宗した、という話<

その話を聞いたアラタはどこか違和感を感じた

そもそも不思議な力を使用して異教徒達の方に神木を向けたのは他でもない聖マーティン本人だ

その力を使えばもっと安全な場所に倒せていた筈だし、そもそも神木というのはそんな簡単に切り倒していいものなのか

しかもどうして感謝されているのだろうか

思った疑問を燈子に問いただすと燈子は愉快に軽く笑った後

> 流石はアラタ、よく気づいたな。反対側に倒れた神木は異教徒を殺さなかった。これこそが、主の慈悲であり、「改宗のチャンスを残された農民は皆幸福である」という事だ。善きにしろ悪しきにする異教徒の歴史や伝統、精神文化などは根こそぎ潰されたのは間違

いないなく

その話を聞いてアラタは顔を青くする

それはつまり

何が起きても幸せ、という事なのか？

「クローチェディピエトロ使徒十字を取引して、奴らは何をしようとしてんだ？」

>世界は二つに二分されてる。科学サイド、魔術サイド、といった感じにな。現在はバランス良く半分半分になってる訳なんだが<

燈子は一度区切ると

>その内科学サイドの長が、学園都市。さて、この学園都市が全面的にローマ正教に庇護されてしまったら、世界のバランスはどうなると思う？<

アラタの目が見開いた

只でさえ世界の半分を占めている科学サイドが魔術サイドの「どこかの組織」についてしまったら

「科学という世界の半分＋魔術にある自分達の組織力」で確実に世界の半分を手中に収められてしまう

後は多数決みたいな単純な理屈で世界を動かせる

ましてやそれが十字教最大宗派のローマ正教ならば

> 科学と魔術の両サイドから攻められれば「どちらか片方の世界」に属しているだけの組織や機関では太刀打ち出来ない。腹と背を同時に攻撃されてるようなものだ。世界のパワーバランスはローマ正教に完璧に傾いてしまっからなく

ローマ正教は具体的にどう学園都市を手中にするかは考えなくていい

クロウチエディエトロ
使徒十字を学園都市に突き刺せば後は「全てローマ正教の都合の良
いように」学園都市が動いてくれる

何が起きるかはわからない

だがどんな形であってもローマ正教に最も「都合の良い」展開になるのは確実だしそしてその結果に学園都市は全く疑問は浮かばず納得する

どんな理不尽な要求が来ても

どんな不条理を背負わされても

「誰しもが幸福しか感じられない世界」が出来上がる

「…じゃあ…オリアナ達が言ってる取引ってのは…」

スタッフソード クロウチエディエトロ
> 刺突抗剣や使徒十字の霊装単品の取引ではない。「ローマ正教の都合の良いように支配された」 学園都市と、世界の支配権そのもの<

その言葉を聞いてアラタの脳に電撃が疾った

> 運び屋オリアナ、送り手リドヴィア…。彼女達の他に片方の受け取り先がわからないのは当然だよ。この取引には他の誰も関わっていない。ローマ正教が自分で自分に送るだけなんだからなく

燈子は一度言葉を切る

タイミングを見計らってアラタは燈子に告げる

「燈子。絶対に止めるぞ…そんなくだらない取引…」

決意を新たにアラタは拳を握り締める

血が滲むのではないかと思うくらい強く

> 当たり前だ。これが成功してしまえば、世界の崩壊よりも厳しい現実に直面してしまうからなく

電話越しに聞こえてくる燈子の言葉にアラタは頷く

こちらの面子は自分、燈子に式、何時くるかわからない青子

そして当麻、土御門、ステイルの三人

七人

たった七人で何が出来るかなんてわからない

オリアナや背後にいるリドヴィアに勝てる保証はない

だけど

だけれども

彼女達が学園都市の人間に都合の良いように全て押し付ければ自分達ローマ正教が世界の支配権を握れるなんてユメを抱いているならば

必ず犯さなければならぬ

かつて美琴は言っていた

自分達が自分達でいられる最高の居場所、と

そんな居場所を

あいつらの勝手な都合で潰されるなんて耐えられない

アラタは携帯を閉じてゆっくりと歩を進める

彼女が愛した居場所を守らんとする為に

8 約束　くヤクソクく

お昼の時間

鏡祢アラタは宛無く歩いていると後ろから聞き慣れた声が聞こえた

「アラター」

振り向くと手を振っている美琴とその隣に立っている　姉、だろ
うか　女性が微笑ましく美琴を見ている

アラタは美琴の方に近づいて声をかける

「よう。競技ご苦労様、悪いな、応援出来なくて」

「大丈夫よ。アンタの事だから、またなんかに首突っ込んでんでしよう？本当なら私も手伝いたいけど、大覇星祭も大事だしね」

そう言って美琴は微笑む

その言葉を聞いたアラタは多少救われた気持ちになる

何としても守りきろう

改めてアラタはそう心に誓った

「ふふ…貴方が美琴ちゃんが好きになった男の子？白い服に白い帽子なんて、結構センスあるわねえ」

隣に立っていた美琴の姉らしき人物がアラタに声をかける

「あ。どうも初めまして。俺は鏡祢アラタって言って…」

「全部美琴ちゃんから聞いてるわ。偶に電話するんだけど八割が君の話題なんだから、ねー美琴ちゃん？」

その言葉を聞いた美琴はボツ！ と頬を赤くし

「何言ってるのよアンタ！ さ、サラッとそんな事言って！」

「えー？ 違うのー？ アラタくんが気になって夜も眠れないのー、とか言ってたじゃない」

「そんな事一言も言っていないわよ！ 何勝手に改竄してるのよ！」

ヒートアップしてる二人を見てアラタは苦笑を浮かべるしかなかった

「そだアラタくん。お昼まだなら一緒に食べない？ 小さい喫茶店なんだけど、お弁当の持ち込みも大丈夫らしいよ？」

「へ？ いいんですか？」

「いいわよむしろ好都合よね美琴ちゃん」

言われた美琴は顔を真っ赤にし両手の人差し指をもじもじさせていた

……

「んー。大学に一週間分の休学届け受理してもらって来た価値があ

るわね、大覇星祭。今年はもつと良いわねッ」

美琴の姉がぐいー、と背伸びをしている

大学、という事はやっぱり女子大生なのだろう

「そついや名前教えてなかったね、私は御坂美鈴。美琴の母よ、よろしくね」

「あ、お母さんでありましたか…、ん？」

……………母？

オカアサン？

「ええええええええええ！？」

アラタ絶叫

つい数分前に大学に休学届け、という話題を耳にしたばかりなのだ

「だ、だってついさっき大学だなんだって…！？」

「ええ。だから近頃になつてもつかい学び直してるのよ。この歳になつて色々わからない事に遭遇出来るって結構刺激的なのよねー」

そう言われると何となく辻褄があっているような気がする

…謎だ

そんな疑問にうんうん悩んでいるとその喫茶店についてしまった

席に座ると美琴はメニューを手にとって

「母さんは何を頼む訳？」

「何も頼まないわよー。私だってちゃんと弁当持参してきたんだぞ。どよ美琴、これって母親っぽくない？」

「…ちゃんと母親してくれないと困るんだけど。で、そっちのバッグには何入ってるの？」

「ふっふっふ。見て驚くんじゃないわよー」

そう言っただサガサとバッグを漁る

取り出したのはクリスマスケーキ位の大きさのチーズ、そして白ワインに銀色の寸胴鍋に小型ガスコンロをテーブルに並べ

「じゃーん！！ 今日のメニューはチーズフォンデュ」

「学園都市に危険物持プロパンガスてくんなんっ！！」

スパンっ！！ と美琴が美鈴の頭を叩く

美鈴は演技でわざとらしく瞳をうるうるさせると

「わー、娘にぶたれたあー。けどアレよ、女の子ならご飯を鍋で用意するくらいの大飯喰らいの方が立派に育つのよ。エクササイズとかも大事だけど小さい弁当ちまちま食べてるだけじゃ大きくならな

いって。それだと逆に育つて欲しいとこに栄養が行き届かないわよ、もー、私が高年でこんなに大量のチーズ持ち込んだと思ってんのよ。娘の為でしょー？」

「ちょ…育つとか大きくなるとか、いきなり何の話よ」

「あらー？ 何の話かしらーん？ 私は骨の健康を考えてカルシウム取りましようって言ったんだけどー？ もしかして美琴ちゃんては他にもどこか具体的に大きくなりたいところがあるのかなーん？ そもそも、なんで大きくなりたいなんて考え始めたのかしらー？ やっぱり、目の前にいる彼の為かしら？」

「だ、黙れバカ母！！」

急に話を振られたアラタはむせかえってごぼごぼさせていた
そして突っかかる美琴とニヤニヤ笑いながらからかう美鈴を見てアラタは心から思う

（平和だなあ…）

.....

風間大介はバーバラにてお昼を取っていた

バーバラ「KAZAMA」は床屋だから閉店の張り紙を出してしまえば比較的楽にお昼の場所とはれるのだ

「ヒロ。あまり食べ過ぎるなよ、次の競技に響くからな」

「わかってるって大介。腹八分目に抑えとくわよ」

言いながら向かい合って座っているヒロが答える

「…ここにアラタがいたら、大介の学校の士気もかなり高くなっていたのね」

不意にヒロが呟いた

「…生きてるさ、必ず。どこかで」

決まって大介はそう答える

「あんな程度でくたばる俺の親友じゃないさ」

二人はアラタが生きているという事実をまだ知らない

ゆえにまだアラタが帰ってきていないのだ、二人の中では

だが仮に帰ってきていなくとも大介は信じていただろう

鏡祢アラタが生きている事を

.....

矢車ソウと影山シユンは警備員^{アンチスキル}として学園都市全体を見て回っている

「第九学区、異常はなかったです。矢車さん」

「ご苦労、影山。受け取れ」

矢車はコンビニで購入したおにぎりと缶コーヒーを投げ渡す

影山はわたわたしながらもおにぎりと缶コーヒーを受け取って

「ありがとうございます」

礼を述べると影山は矢車の隣に座る

「今日も異常無し、ですね」

「大覇星祭は一週間続くからな。気を抜いた時がミスをする。気を抜くな影山」

注意され影山はシャキ！！と背筋を伸ばす

「わかってますよ矢車さん。…アラタの為にも、ね」

「アラタ、か…」

矢車は思い出す

2ヶ月ほど前に皆を守るために犠牲となってしまった人物の名前

矢車は空を仰ぎ見る

「想いを継ぐぞ。影山」

「はい。矢車さん」

彼が使用していたガタツクゼクターは今も警備員の特殊倉庫で眠っ

ている

しかしかなり損傷が激しい為今も眠ったままなのだ

いつか帰って来た時にアラタに返すべきと考えている

(…帰ってこい、アラタ…!!)

矢車は心の中で呟く

…実際もう帰って来てるのだが

………

時間は午後二時を回った

昼休み終了の時間だ

御坂美鈴は次の競技の場所取りをする為いそいそと用意すると「じゃ、美琴ちゃんは任せるわん」とアラタに言い残すと足早に場所取りに向かっていった

今駅前通りを歩いてるのはアラタと美琴の二人きり

二人きりと言っても周囲にはまばらに人はたくさんいるし次の競技の場所取りに向かっていている親子などが雑踏を踏んでいる

「美琴は次の競技まで大丈夫か？」

「ええ、まだ時間あるし。問題ないわ」

言って美琴は軽くストレッチをする

恐らく喫茶店のエアコンが美琴の体を中途半端に冷やしたのだろう

「…ねえ、アラタ」

ストレッチしながら美琴が声だけで聞いてくる

「…ん？」

もし「何をしてたの」と聞かれたらなんて答えよう

今まで散々彼女を泣かして何をしていたのか

なんて聞かれてもアラタは腹を割って答える覚悟だがいざ言つとなると緊張する

「…今日大覇星祭が終わったら、ナイトパレードがあるって、知ってるでしょ？」

耳に入ってきたのは予想外の言葉だった

「あ、ああ。毎年やってたしな？」

今年は諸事情により観客側だが

「…その、一緒に見て回って欲しいの。二人で」

「ふ、二人で？」

聞き返すと美琴はストレッチを終えてほんのりと頬を朱に染めながら

「…うん。ほら、前に春上さんたちと花火大会見にいった時、さ…。私、アンタに伝え忘れた事があつたじゃない」

「あ…」とアラタは思い出す

そう言えばそんな事もあつたな、と

アラタは少し間を開けて

「ああ。わかった、約束する。…俺も、伝えてない事があるからな」

正直この約束を果たせるかわからない

今この学園都市では使徒十字を自分自身に受け渡そうとローマ正教
クローチエディビエトロ
が蠢いている

それを潰さない限り美琴との約束は果たせない

だが

「…本当？　またあの時みたいに、いなくなったりしないよね？」

言葉が刺さる

だがアラタは笑顔で

「ああ。必ず約束は果たす。…だから、待っていてくれ」

アラタはポム、と美琴の頭に手を乗せる

「…アラタに撫でてもらうの、久しぶりだね…」

「…だな。…変わってないな、美琴」

「当たり前でしょ。…アラタも、服装以外は変わってない」

あはは、とアラタは苦笑を浮かべしばらく美琴の頭をなでくり回す

今まで離れ離れだった時間を少しでも埋めるように

9 誰が為の魔術（チカラ）

撫で終えて競技に向かう美琴を送り出しアラタは再び学園都市を練り歩く

燈子から聞いた話によるとどうも「使徒十字」クローチエティビエトロには何らかの使用条件があるらしい

ならその条件を潰せばオリアナ達の目的を阻止出来るのだ

「黒桐にでも頼めば何かあつかな…」

アラタの友人、黒桐幹也はこういうことのエキスパートだ

「探す」だけならば彼の右に出るものはない

だがあまり関わって欲しくないのが本心だ

「…けど、最終的には頼っちまうかもしれないな」

言いながら帽子を取りクルクルと弄ぶ

「…カ・ガーミン？」

横合いから声がした

とても懐かしい声色だ

「やはり、カ・ガーミンだな…!!」

振り向くと体操服姿の神代ツルギが立っていた

隣には体操服姿の黒髪ロングの女生徒が立ってる

「ツルギ…久しぶりじゃん」

アラタはとりあえず柔和な笑顔で返す

もう殆どの人にバレてはいる為隠す必要はないと考えたのだ

「久しぶりだな我が親友よ!!」

ツルギが肩を叩いてくる

「お前も。元気そうで何より」

お互いの肩を叩き合っていると

「神代くん。彼は。友達？」

黒髪ロングの女の子はおずおずと言った感じで聞いてきた

「む。そう言えばヒメガーマミンには紹介してなかったな。彼は、俺の親友、カ・ガーマミンだ」

ツルギは女生徒の隣に立ち

「カ・ガーマミン、紹介しよう。俺たちのクラスの新たな仲間、ヒメガーマミンだ」

「姫神秋沙。よろしく」

ヒメガーミン、もとい姫神はぺこりとお辞儀をした

礼儀正しい女の子だな、と思った

「そうだカ・ガーミン。ちょっとお前にも手伝ってもらいたいのだ」

ツルギは言つと公園のベンチの方に目を向ける

そこにはぱつと見小学生のような、しかし着てるのはチアコスチュームな月詠小萌と赤い髪でやけに背が高い神父がいた

小萌先生は神父からタバコを取り上げようと奮戦しているがいかんせん身長差がありすぎる為全く歯が立たない

その光景を少し遠目から眺める一人のツンツン頭の少年　上条当麻だ

彼はやれやれ、と言いたげな表情で赤い神父と小萌先生のやり取りを眺めている

そう言えばしっかり挨拶してなかったな、とアラタは思い当麻に歩み寄った

「当麻」

「ん、あー!! アラタ…。すげー心配したんだぞ、吹寄が倒れた時現れたあのライダーと対峙してる時!」

一気にまくし立ててくる当麻

「悪かったって」

「それに…、今まで何やってたんだよ…」

当麻が声のトーンを下げながらアラタに呟く

「…悪かったよ」

ただそれだけしか言えないアラタ

その言葉に当麻は明るい声色で

「気にすんなよ。何やってたかは聞かないぜ」

当麻はそう言って拳を突き出す

アラタはその拳にカツン、と自分の拳をぶつけ合う

「上条ちゃん！！ そんなところでのんびりしてないで先生のお手伝いをしてくださいー！！」

小萌先生が叫びが耳に入ってきた

「じゃあ当麻、後は任せるぜ」

言ってアラタは小走りにこの場を去る

「あ、おいつ!!」

「いつかバレんだ、今はまだその時じゃないからなー!!」

.....

走って去っていくアラタを見送る

(やれやれ...いつも突然なんだからよ)

去っていく友達を見送りながら当麻は思う

あいつなら、一緒に戦ってくれる

今の自分の境遇 記憶喪失の事もすんなり受け入れてくれるだろう

と言っても彼に言うつもりはないが

ツルギは直感で上条当麻の記憶喪失に気づいたが

アラタはわからない

だが気付くだろう、「その程度」の違和感なら

.....

結局幹也を頼る事にしてしまった

自分の不甲斐なさに舌を打ちながら彼の連絡を待つ

しかしアラタも黙って待ってるほどバカではない

上条達も別の方式でオリアナを追っているだろう

それに合わせアラタも簡易的な探索魔術を用いてオリアナを追っている

その術式は相手の微細な魔力を感知し場所を特定する、というもの
しかし微細な為とても不安定なのだ

ついた、と思ったらそこは相手が数時間前にいた場所だ、なんて事もあるのだ

だから正直この術式は当てにならない
そんな時ピリリと自分の携帯が鳴った

.....

オリアナは地下鉄の列車内部にいた

この路線は第五から第七学区入口辺りまで進む地下鉄

(…、)

オリアナは頭の中で考える

先ほどオリアナは自分を追っていた和服少女と交戦したのだ

リヨウギシキ、と言った少女だ

彼女の身のこなしはハンパなくこちらの魔術もナイフ一本で煙のよ
うに打ち消されてしまう

油断ならない女性だ、とオリアナはシキを要注意人物とみなし別の
思考を巡らせる

トウジョウサトルはどうしているだろうか

オリアナを送ってから別行動をしてみると言っただけだ

まあ彼もいずれオリアナと同じ考えに至るだろう

クローチェデインヒエトロ
（「使徒十字」の準備はまだ先だし、私はどうしようかなあ。リヨ
ウギシキ用の術式を考案つても面白そうねえ…）

思考していたオリアナは小さなことを見過ごした

ただでさえ小さい小道にさらに脇道があった事

そしてその脇道からいきなり誰かが飛び出してきた事

「神代ちゃん姫神ちゃん、近道しないと次の競技が間に合わないの
で きゃー!!」

ぶつかった

小学生くらいの小柄の女の子はオリアナのお腹の辺りにぶつかって
跳ね返るとその後ろにいた黒髪の体操服姿の女の子に後頭部から突

っ込んだ

その衝撃で黒髪の女の子は持ってたフルーツジュースが入ったカップを離してしまいばしゃ、と盛大に頭から体操服を濡らしてしまった

その後ろにいた同じく体操服姿の男性はその被害に遭う事はなかった

「先生、やってくれたな」

「ご、ごめんなさいですよ！！ てゆか神代ちゃんは濡れてないじゃないですか！！」

むがー、と叫ぶ小柄な少女を余所に神代、と呼ばれた男性は

「貴女は大丈夫か」

紳士的に問いかけてきた

オリアナは追っ手の魔術師ではないと判断しいつでも出せる笑みを浮かべる

「ええ。お姉さんは平気。それよりお嬢ちゃん二人の方が心配かな？ そのまま表を歩くには、ちょっぴり刺激的な格好になってるんじゃないかしら」

「確かに。これでは競技など出来ないな」

言われた小柄な少女と黒髪の少女は今一度自分の体を見直した

そこでふとオリアナは気づいた

黒髪の少女の胸元

フルーツジュースを浴び透けて見えてしまう下着とは別に

首からネックレスのような

鎖の下端に取り付けられている場違いなほど大きな

イギリス清教のアレンジが加わったケルト十字

本来このケルト十字は姫神の力を抑制するためにある

しかしオリアナはそのケルト十字がそういう力がある事を知らない

ただ彼女が分かるのは

（英国側の魔術師！？）
ネセサリウス

この学園都市にだって十字架をデザインしたアクセサリーくらいあるだろう

しかし日本には協会すらまとめに存在しないイギリス清教式の十字架なら話は別

わざわざそんなものを英国から輸入してる時点で普通とは言えない
しまして一種の結界として機能する霊装など一般人が持っているはずがない

極めつけにその結界の名前は

（イギリス清教の、「歩く協会」！？ 「あの」禁書目録の防護に使われているものと同じ方式の霊装を携えてるなんて…、「この怪物」 ！？）

………

神代ツルギはオリアナが急に怖い顔したのが気になった

何だろう、と考えながらふと姫神に向き直る

そこで気付く

彼女が首から下げているネックレス 彼女の力を封じているケルト十字が体操服の上から見えていた事に

（！！ マズい、なら、こいつが ！！）

ツルギはサソードヤイバーを取り変身しようと思い 躊躇った

ここには月詠小萌がいた事に

だからツルギは体を動かした

姫神を突き飛ばし

オリアナであろう女性が放ってくる魔術を体で受け止めて

ドッ！！ という鈍い音が響き渡った

.....

「幹也か？ 早いなあい」

電話の相手は黒桐幹也だった

頼んで三十分と間もないのにもう使徒十字クロウチエディエトリの情報を掴んだのだろうか

>うん。流石に探すのは苦労したよ、いろんな国のデータバンクにハッキングとか、燈子さんの書物漁ったりとか。んで、燈子さんの書物にそれっぽいものを見つけたんだ<

流石幹也、とアラタは思った

その時変な匂いが鼻に入ってきた

>...？ どうしたの？<

そんな様子を察したのか幹也が聞いてくる

「いや、ちよつと待っててくれ幹也」

>？ わかった、こっちもその間にもっと深く調べてみる<

ピ、と電話を切りその匂いの方向に歩いていく

すると人だかりが出来ていた

その中で「神代ちゃん!! 神代ちゃん!!」と叫ぶ声が聞こえてきた

(小萌先生? 神代ちゃんって…、なんか遭ったのかな)

「どけ」

人だかりを強引に掻き分けてその人だかりの一番前に踊り出て

「!?!」

驚愕した

抜けた狭い路地で一人、横たわっている人物

神代ツルギ

しかし血まみれの傷だらけで

ツルギはひゅうひゅうと息をしている

「ッ
」

横には血だまりの地面にペタンと座り顔を両手で覆い泣いている姫神という女の子がいた

「ツルギiiiiiiiiiiii!!」

アラタは飛び出しツルギの近くまで駆け寄った

白い服がジワリと赤く染みてくるが気にはしない

気になんかしてられない

「ツルギ！！ どうした、何があった！！」

「わ、わからないんです…！！」

答えたのは小萌と姫神

「さ、さつき。ここで女の人とぶつかって…！！ 謝ったのだけ
ど。笑って許してもらえたと思ったのだけれど…。急に怖い顔し
たと思ったら。神代くんが。私を。庇って…！！」

オリアナ「トムソン

頭の中でその言葉が弾き出された

だが彼女がツルギを狙う理由がない

しかしツルギは姫神を庇って、と言っていた

「カ・ガーミン…」

その時アラタの耳にツルギの声が入ってきた

「ツルギ！！」

「姫、神の…胸元に、下げて、ある十字架…。それで、分かるだろ
う…」

十字架？

そんな言葉を聞いたアラタは姫神の胸元に下げられた十字架に目をやった

（これは…）

たしか「歩く協会」と言った霊装だったか

（…そうか。「歩く協会」を見たオリアナが姫神さんを魔術師と勘違いしたんだ…）

しかし今気付いた所で事態は好転しない

「…ヒドい有様だな」

慣れた声が耳に届く

「かつ！！ 神代！？」

その後ろから更に聞き慣れた声

最初の声は蒼崎燈子、次は当麻だ

その後ろに赤い髪の子が歩いてきた

「恐らく。その子に使われてる術式をオリアナが勘違いし、彼女を庇ってツルギが瀕死の重傷を負った…違うか、アラタ」

燈子の言葉にアラタは違わない、というように首を横に振った

[illegible]

上条当麻は思わず手近な壁を殴っていた

ビクツとそれに小萌先生が肩を震わせた

「…先に駆け。上条当麻。ステイルⅡマグヌス。彼の手当ては私がしておく」

「君が？」

ステイル、と呼ばれた神父が燈子に聞き返す

「ああ。少なくともお前がやるよりは確実だよ。あそこで箱庭の真似事をしてる女の子よりはね」

とステイルは燈子が指を指した方を見る

そして見た

月詠小萌が姫神の隣にちょこん、と座り小石や空き缶とかを並べていた

まるで積み木のように並べられたその品々は裏路地のビルや倒れている神代、その横で泣いている姫神などを幼稚に表現したミニチュアのように見える

「…君は、何をしている？」

「あの時は…」

小萌先生は涙で真っ赤になった目でステイルを見返し

「シスターちゃんの時はこれでなんとかだったのですよ…。だから…今回だって、どうにかなるに決まっています…」

「ま、さか…！？」

ステイルの声色が変わる

「まさか「貴女」が…？」

驚きと敬意のこもった声色だ

アラタは小萌先生が言うあの時なんてわからない

「…今彼女が組んでいるのは一定の空間と魔術師が作り上げた箱庭をリンクさせるタイプの魔術だ。この方式ならミニチュア内の人形の傷を「直」せば、リンクされた人体を「治」せる」

燈子は小萌を見ながらそんな説明をする

「…だが無理な話だ。前に何があったかは知らないが、科学サイドにいる彼女には魔術は使えない。誰かのサポートがあればできるかもしれないが、な」

言って燈子は小萌先生の方に歩いていく

(…恐らく)

小萌先生は考えられる限りの全ての方法を講じても全く効果が無くて最後の最後で自分自身も全く理解出来ていない「魔術」絶ってしまつたのだらう

自分がどれだけ見当外れな事をしているのかも分からずに自分がどれほど幼稚な術式に全てを賭けているかも知らず

「…違う。そうじゃない」

その声色は燈子のモノではない

「え…？」と小萌は顔を上げる

燈子の隣に立ったステイルは懷からルーンのカードを取り出すと

「海の水をバケツですくうように。まずは「箱庭」で区切る領域を設定するんだ」

「言っても理解出来ないだらう。さつさと用意しろ。私がサポートしてやる」

神代に向かい合うようにかがみ込んだ

「アラタ、上条。サッサといけ」

燈子はそう言った

「本来治癒系統の魔術は苦手だが、やれる限りはやってやる。完全治癒は不可能だと思うが、この女の子には禁書目録の一部の知識がある。それを借りて理論を補強してやれば、多少は大丈夫のはずだ」

「…わかった。行こう、当麻」

「ああ、それで全部上手くいくなら、頼む。ステイル」

「僕だって慣れてないんだ。こんな世界で、攻撃以外で魔術を使いたいなんて事はさ」

その言葉を聞いてアラタと当麻は走り出した

これ以上誰も傷つけない為に

10 上条当麻

「くそっ…！」

鏡祢アラタは誰にともなく舌を打つ

オリアナが逃げたルートは幾つもある可能性はある

だが信憑性がない

オリアナがどの便を利用したか以前に本当にこの場所を利用したのかさえも

「当麻、オリアナがどの路線を使ってるか、分かるか？」

アラタは横で息を切らしている上条当麻に問いかける

「…このバス停は、第七学区の外周をぐるりと回るルートを取るらしいけど、ヤツがどのバス停で降りるかは分からない。…これだけ時間があれば、停留所四つくらいは進めると思う。それに、まだバスに乗ってる可能性もある」

当麻からある程度言葉を聞くとアラタは「むう…」と考え込んで

「多分オリアナはできるだけ遠くに行こうとしてるはず。だから今もバスに乗ってるっていうのが一番怪しいか…」

「けどアラタ。二番目のバス停の近くには地下鉄の駅があるし、四番目は別のバス路線が集まるターミナルだし、もしかしたらどこか

で乗り換えてるかもしれないだろ」

「…、」

アラタは黙り込んだ

周りには自由時間だからアイスや菓子を食べながら歩いてる生徒達、次の競技場に急ぐ観戦客など様々な人達が歩いている

ガヤガヤとしたたくさんの雑踏に満たされてるはずなのに

アラタには果てしない静寂に耳を塞がれる

八方塞がり

その言葉が頭の中で繰り返される

オリアナの動きが読めない

バスに乗ったか、乗ってないのか

どこで降りるか、何の路線を使用して乗り換えるのか

そもそもどこを目指しているのか

「…なあ、当麻」

ふとアラタは呟いた

「ん？ なんだアラタ」

「なんでオリアナは街を歩いているんだ？」

「え、なんでって…あ」

言いかけて当麻も気づいた

考えてみるとこの追撃戦が始まったのは午前中に吹寄と当麻が歩いていてオリアナとぶつかった所にアラタが来訪し彼女の何らかの魔術を蓄積したからだ

ならあそこを歩いていたオリアナの目的は何だろう

「オリアナ達は「使徒十字」クローチエデイベイトロを取引するつもりではなかった。おまけにその霊装をオリアナは所持しておらずなおかつ動いていた、ということは何か理由が必要だ」

「…？ 何だよ、理由って」

当麻の問いかけにアラタは

「流石にそこまでは。けど「使徒十字」クローチエデイベイトロはまだ発動してないし、そつちの理由と絡むのかも。オリアナは「使徒十字」クローチエデイベイトロの条件でも探してるのかもな…」

条件、といえば

「アラタ、そつちやスタイルが説明すんのが面倒だつて言って、オルソラからの報告メールをそのままこつちの携帯に送ってきたんだ」

「報告メール？　つかオルソラってだれよ」

アラタは「法の書」に関わっていない為オルソラ＝アキナスを知らない

「ちよつとした知り合いだよ…。けど、そのメールなんか外国語で書かれてて全然読めなくて…これがそのメールなんだけど」

当麻は携帯を操作しながらそのメールを見せてくる

「ふむ。どれどれ…」

アラタはそのメールを見ながら

「あと、保管庫の扉が塞がれてて、ドアも二重になってることとか」
当麻の言葉を聞く

「二重？」

アラタはメールに目を落としたまま聞き返す

「なんでも光が入るのを避ける為らしいんだけど」

光、か…

クローチエディヒエトロ
確かに「使徒十字」は強大な霊装、不用意な発動を防いでいるのか
もしれない

幹也からのメールによると使用条件に何か光が関わっているらしい

が…

一通り見たアラタは携帯を当麻に返し

「イタリア語だ。特に暗号化も行っていない普通な」

「アラタ読めたのか!？」

「伽藍の堂にいた頃に燈子に叩き込まれた。一応ある程度は読める…。んで、内容だが」

「あ、ああ。どうだった？」

「英国図書館にあつた雑記帳の記録を纏めたようなものだ。なんでも「クロウチエデインビエトロ使徒十字」の保管庫には、年に二度、大掃除が行われるらしい。その大掃除にはいくつかルールがあるらしくてな」

まず一つ目は

決められた日付に行わないといけない、という事

二つ目は

決められた日付の昼の間に済ませないといけない、という事

「昼？ 変だな、二重ロックとかしてるのに、昼の方が明るいじゃんか」

当麻の言葉は最もだ

「それだけじゃない」

アラタはその報告メールの続きにはこんな事が書いてあったらしい
この決まりは結構曖昧みたいで、監査官の文章によると昼の間に掃除を忘れた保管員が夜も作業せず「明日の昼にでもやりますから」と言っただけで帰ってしまったのだ

「おまけに保管員の態度も悪くてさ、何でも勤務時間なのにホロスコープ使って星占いやってるヤツも多かったってさ」

アラタは一度呼吸し息を整える

ここからアラタは考えを纏める

「クローチェディビエトロ使徒十字」の発動に関わるのは昼じゃなく、夜に現れるものなんだな。保管員の言動には、ルーラーの「決められた日付」の間に仕事するのを放棄してでもルーラー二の「夜ではなく昼の間に」終わらせることを優先させたんだろ」

二つのルーラーの内片方を潰してでも片方を優先させたとすると、何かしら優先するべき理由があるはずだ

「だな」と当麻は腕を組んで

「だけど夜にある光って何だよ？ 月明かり…じゃないよな…」

月明かりでアウトなら大掃除の日付を厳密に決める必要がない

日付を定める、という事はそこに必ず宗教的な意味があり「クローチェディビエトロ使徒十字」の使用、暴発条件などが関連しているはずだ

「夜にある光…」

アラタと当麻は深く思考する

「オリアナ達はクローチエデイベイトロ「使徒十字」を使わないじゃなくて、使えなかった…」

「使うには何らかの光が必要で…」

「それは昼にはなく、夜にあるもの…」

言って当麻はビルの壁を見る

そこにはたくさんのライトで作られた電光掲示板が張り付いていた

「いや、違う。はるか昔からあるんだから、電球や発光ダイオードとは無縁だ」

アラタの言葉に当麻は再び壁から目を逸らす

「…自然の中にある光」

「なおかつ、カレンダーと動きが連動しているような光って言うところ…」

報告メールによると

クローチエデイベイトロ「使徒十字」の保管員は不真面目で

勤務中にホロスコープを使用して星占いをやっている者が多かった

…だけど実はその「星占い」を行う事が絶対に必要な仕事だとしたら？

アラタと当麻はハッと顔を上げ

『星座』

同時に呟いた

「なるほど、星座を利用した霊装魔術は珍しくない。占星術なんぞ基本の基本、…じゃあ保管員は仕事に必要な情報を集めてたって事か…」

アラタは腕を組んで当麻に告げる

クローチエデヴィエトロ

「『使徒十字』の発動メカニズムはこうだ。夜空の光を地上で集める必要があるから、あの十字架はパラボナアンテナ、夜空の星の光を受け止めて、術式発動の為のリンクを作る。多分ヤツが今も街中を歩き回ってるのはアンテナを立てる場所を探している最中なのかもな…」

当麻は内心すげーと思いながらアラタを見ていた

しばらく会ってないのにアラタは何時の間にかとてつもなく魔術に詳しくなっていたことに驚愕していた

「だが、いくつか解せない点がある」

「？ 何だよ、その解せない点って」

「いいか当麻。使徒十字クローチェデイビエトロと言うのは、十二使徒の一人で、「神の子」の死後初の原始教会を創設したペテロの死に深く関わるもの。一番始めにきっかけを生んだのは、「ペテロが死んだ時」か、その少し後：」

アラタは続ける

まずペテロが処されたのが一世紀中頃、コンスタンティヌスが十字架教を公認したり、聖ピエトロ大聖堂が完成したのが四世紀前半、そしてフランクが実際に領地を進呈したのは八世紀、とかなり時間に差があるようだ

それでも最初に「ペテロの為の十字架」が立てられ「この地はペテロの遺産である」という意志を表明し、二十億を超える使徒を抱える一大宗派の中心核であるローマ教皇領創設への長い道のりが始まったのは処刑直後、という話だった

「まあもともとはお墓の十字架だったってんだからな、ナントカ大聖堂の完成よりも、実際死んだ時にできたって方が自然だけど…それがどうかしたのか？」

「使徒十字クローチェデイビエトロを使うには星座が重要だって意見には賛成だ。…だがペテロが亡くなったのは六月二十九日、今とは季節が違うから、星空の様子だって変わってくる。夏の星座や冬の星座とか。それくらいは聞いた事あるだろ」

つまりは今の季節では使徒十字クローチェデイビエトロは使えない、という事か？

「…じゃあもし季節の星座を無視して使うと、どうなるんだよ」

「当麻、直流で動く電気ヒゲソリに交流流したらどうなると思う？」

当麻は黙り込む

「そこまで壊れるかはわからないけど、じゃないと「使用条件」なんて大層な項目に入れておく意味がないからな」

「じゃあ、オリアナ達は何で使えない霊装をわざわざ持ち込んできたんだ？」

「わからない。これをクリアする条件があるかもしれないが…考える時間がない」

時間

言われて当麻は制限時間を意識する

「オリアナ達は使徒十字クローチエデヴィエトロを使う為に星座が出てくるのを待ってるって仮定するなら、やっぱりタイムリミットは日没か…」

この会話が長引いてるせいかもう午後の四時に差し掛かろうとしている

今は九月下旬の日没はおそらく午後七時前

一番星とかは日没前に輝くから場合によっては午後六時でも危険かもしれない

つまり後二時間から三時間の間にオリアナを発見しないといけない

クローチエディビエトロ
しかし使徒十字がオリアナが持つてるとは限らない

その時はリドヴィアの居場所を吐かせてそちらを捕まえるしかない
時間がない

オリアナだけでも捕まえられる保証はないのにその上リドヴィアまで見つけないといけないなら余計に

「当麻、俺はお前とは別ルートでリドヴィアとオリアナを探してみる、お前は土御門、ステイルらと協力して探してくれ」

「ああ」と当麻が頷く前に後ろから別の声が聞こえた

「とうま、こんな所で何してるの？」

.....

オリアナは自律バスから降りた

重量オーバーの為緊急停止した自律バスを頼るより別の交通機関を探した方が早いのだ

停留所が見えなくなっからふう、と息を吐いた

刹那後ろから声がした

「オリアナさん」

東條サトル

「言いたいことはわかります」

サトルは紙を見ながらオリアナに宣告した

「貴女が攻撃したのは、ただの一般人です」

断定

ガン！ とオリアナは地面を蹴飛ばした

（一度ならず、二度も誤射するなんて…！）

「彼は神代ツルギ、ライダー、という報告がありますけど、それだけです」

「…最低ね」

>まさしく最低です。我々は本件とは一切関係ない一般人を牙にか
けました。それも二度く

オリアナとサトルの頭に声が響く

その声はリドヴィア

>一度目は競技の途中で敵対魔術師が介入したのも一因だと思われ
ますが、今回は純粹にこちらの責任ですく

きつぱりとした声で

>我々は守るべき者に手をあげました<

無知なる者に教えを広めるような修道女のような声色で

>我々が手を差し伸べるべきは全てに満たされた聖人君子ではなく、
迷い誤り救いを求める罪人こそである。「神の子」が嫌われ者の微
税者マタイと共に食卓についた時の言葉です。我々はそれに反しま
した、何を意味しているかわかりますか<

リドヴィアの言葉は疑問符すらなく最初から最後まで決まりきった
聖書の言葉を言い放つような、介入を辞さない声色で

そして何より

>我々はもう誤ってはなりません。傷をつけられた彼のためにも、
最新の注意と共に「使徒十字クローチエディエトロ」を使用し、学園都市を支配しなくては
ならないのです<

彼女には迷いがなかった

どんなマイナスを抱えてもそのマイナスを全てプラスに変換する感
覚でリドヴィアは話を続けてしまう

「…本当に、何もかも上手く行くんでしょうね。学園都市を手中に
収めることで、皆が抱えている問題の全てが」

オリアナは背筋にゾクリ、とするものを感じながら聞き返した

.....

「とうま、こんな所で何してるの？」

ギクリとした

振り返るとそこにはチア衣装に身を包んだインデックスがいたからだ

「？ あー！！ あらたなんだよっ」

おまけに一発でバレた

額に汗をかく当麻にアラタは

「やあ、久しぶりだね。可愛い衣装着てるね」

エッヘン、とインデックスは胸を張り

「こもえが着せてくれたんだよっ！ これでとうまをいっぱい応援するんだからっ」

そうやって本当に純真な笑顔を向けた

「…そうか、けど、あと少しで時間じゃないかな」

「あ、ほんとだっ。…ねえとうま、次は「くみたいそう」だって言うってたよ。ちゃんと来れる？」

当麻は一拍置いて答えた

「行くよ、出来るだけ早くちゃんと行く。だから、待っていてくれる

か、インデックス」

叶えられない約束を告げた

「うん」

彼女は迷わず頷いた

「わかった。とうまも早く来てね。とうまをしつかり応援するために振り付けちゃんと覚えたんだよ。見たら絶対ビックリするんだから」

笑顔で告げてインデックスは背を向ける

そのまま真っ直ぐ次の競技場に向かっていった

寄り道せず、食べ物屋台の横を通っても見ずに全てを信じたまま

「当麻…、ごめんな」

アラタは呟いた

本来は当麻は大覇星祭を楽しむ側なんだ

アラタがあの時遭遇していなければ彼は今頃大覇星祭を満喫していたはずなのだから

「いや」

当麻は言い切った

「何も知らずに笑ってるのも、それはそれで辛いんだよ。俺やインデックスが笑ってる影で、お前らが苦しんでる状況なんて考えたくないからな」

「…当麻」

「だから同時に思うんだ。自分が嫌だっと思ってることをインデックスに押し付けちまってるのは何なんだろうなって。…バカみたらだよな、これでアイツを巻き込みたくないって平気で考えて喜んでんだぜ、俺ってヤツは」

アラタは何も言わない

否、言えない

そうした小さなものを超えた所で、アラタの優しさが沈黙という形で現れていた

だから当麻は語る

結論を出す権利を譲ってもらう形で

「こんな手伝い、早く終わらせようぜ。それでインデックスの所に戻ろう。皆で馬鹿みたいに物食って、馬鹿みたいに写真撮って…馬鹿みたいに思い出に浸りてえよな。アラタだって、今回は客なんだからさ」

アラタは笑みを浮かべる

自分も約束したのだから

だから早く終わらせよう

こんな

下らない戦いは

11 決戦へと

時刻は既に午後四時三十分を回っていた

鏡祢アラタは当麻と別れオリアナが通ったルートを逆に戻って何か彼女が残した痕跡を探している

おそらくオリアナは自律バスに乗って逃げているはず

しかし彼女が予想を裏切る形で敢えてバスに乗らなかった可能性も捨てられない

だが使徒十字の使用条件が未だわからない為ただイレギュラーな可能性を潰すしかない

（本命は当麻と土御門……。二人だからな。頑張ってもらわないと）

考えながら時計を見る

「例の仮説が正しいなら、後二時間弱……」

午後四時三十分の空は刺すような眩しさが少しずつ褪せている

まだ赤色ではないが深い青が薄くなってきていた

あと一時間程度で夕空のあかね色に変わっていくだろう

そう思考していると突然携帯が鳴った

服の内ポケットから取り出しディスプレイを確認すると見知った文

字が目に入る

燈子からだ

携帯の通話を押して耳に当てる

> 男性の手当てが終わった。なんとなく

呼吸が一瞬止まる

「ツルギは！？ 無事なのか！？」

> 実質魔術を使用したのはあの赤髪だ。いや危なかったぞ、素人の聞きかじりの知識を参考に私のサポート、なおかつこつちであやふやな言葉に含まれる魔術的意味を探り出し、治療術式を組み立てる。……久しぶりにヒヤヒヤしたく

そう言う燈子の口調はどこか面白そうだ

> まあ破れた血管を補強し失った血液を増やして痛覚を和らげた。あの男は精神力がかなり高いからショック症状にはなっていないかったようだ。あとは、「あの医者」に引き渡したく

あの医者、とは冥土歸し（ヘブンキャンセラー）の事だ

「……あんたには世話になってばかりだな。燈子」

> 気にするな。今更に限って事じゃないく

時折ふうーっ、と息を吐く音が聞こえてきている

おそらくタバコを吸っているのだろう

>とりあえずお前も動け。私もある程度調べてお前にまた連絡する<

.....

蒼崎燈子は最初に当麻やアラタ、吹寄がオリアナと遭遇した場所にいた

あたりは特に変わった様子はない

「オリアナが街中をリスク冒して走り回ってた理由はこれか」

言って彼女は空を見上げる

見ているのは星だ

街路樹の深い緑色の枝葉に隠れているが関係ない

現在の日付と座標を確認すればこの空のどこにどんな星があるのか
だいたいわかる

「これが禁書目録だと、話を聞いただけで答えを引き当てるのだから」

最も彼女と知識で戦う事さえ間違いないのだが

燈子は息を吐き思考する

アラタとの電話で使徒十字の情報などは聞いていた

クローチエディエトロ

「ふむ。あながち星座を利用するという考えは当たりかな。おそらく秋の星座をベースにしているな……」

アラタに教えられたオリアナの移動ルートを逆に辿りわかったのはそういうことだ

どの場所から眺めても同じように見える

一見当たり前な理論だが魔術的、と絡むと事情が絡む

星座とは地球上から見た仮の姿

星が並んで見えるのは単なる遠近法の錯覚、極端に言ってしまうと地球から眺めている星座を真横から見れば全く違う形に移るはずなのだ

一歩でもズレてしまえばそれだけで星座は僅かに形を変える

肉眼では決してわからないが、故に読み間違えて暴走に巻き込まれる新米魔術師も少なくない

ほんの少しズレただけで魔術的意味が変わってしまう天文台

だと言うのに今燈子が巡った三つ四つの天文台から全く同じ意味が浮上した

つまりは

「偶然、な訳がない。だとしたら確定、だな…。奴らは秋の星座を
クローチエディビエトロ
「使徒十字」に組み込んで発動させる気か…」

燈子は息を吐いてタバコを口にし

「ならあの矛盾はどうなる…?」

.....

アラタはまた連絡があつた燈子から話を聞いた

彼女が告げたのは二点

オリアナ達は秋の星座を利用して使徒十字クローチエディビエトロを使おうとしている事

各ポイントの天文台は全てその星座を中心に設定されているという事

だが燈子はまだ解せない点があるらしく

>だがこれじゃあペトロの十字架として発動できるかどうかは怪しいな。何せ「使徒十字」クローチエディビエトロが歴史の中で使われたのは、夏の星座が主流の時。どう考えても今現在の九月末にある秋の星座でそれが代用が出来るとは思えない。…我々でも解いていないギミックがまだあるんだく

燈子はあくまで冷静に告げる

「つまり、そのギミックの内容によつては、燈子が調べた場所以外も、天文台として使用出来る…。そういう事か?」

> ああ…。おまけに時間が時間だ。我々が予想した天文台に意気揚々と云って誰もいなく、反対側で術式を発動させられたら、アウトだく

指摘されてアラタは時計を確認する

午後五時前

つまり確証がないのだ

いわゆる決定打という奴が

> アラタ。私は念の為風漬^{しづみ}しに天文台を回る。何かわかったら、また連絡するく

そう告げて燈子は一方的に電話を切った

瞬間また電話がなった

あまりに突然だった為ビクウ！ としながらディスプレイを見ると

「…幹也？」

見知った名前だった為携帯を操作し耳に当てる

> 良かった、繋がって…。
クローチエディピエトロ 今使徒十字の使用条件に関する続報を調べられたんだく

「何？」とアラタは食いついた

まさしくそれはアラタ達が欲している情報だ

> 簡単な使用条件は、星座の力を借りて使用される大規模霊装ってことは話したよね<

「ああ。クローチエディビエトロ使徒十字は一種のパラボナアンテナみたいって話？」

> じゃあ、クローチエディビエトロ使徒十字は四季の星座や季節の星に関係なく、八十八星座全て使って世界全土で自在に発動できるって事は？<

「…何？ 星座全てで使えるって…」

アラタが聞くと電話の向こうの幹也は

> ペテロさんが亡くなったのは、六月の二十九日ってなってるんだ。そうになると、自然とその後にはバチカンでクローチエディビエトロ使徒十字が使われたと思うんだ<

さらに幹也はその四世紀始めにコンスタンティヌスが十字教の存在を公認したのも、イタリアに攻めたフランクが教皇にこの地を進呈したのも

そうしたバチカンにおける十字教徒にとってあまりに都合良い歴史上の事例は全て「クローチエディビエトロ使徒十字」によるものじゃないか、と幹也は推測しているらしい

> クローチエディビエトロ歴史上使徒十字が使われたのはそれっきりなんだけど、周知の通り彼の十字架は、バチカン以外の地方でも使用出来るように作られていたみたいなんだ。ここで問題なんだけど <

幹也は一度言葉を切って先を言う

> 六月二十九日に使えるのはバチカン地方だけ。他の場所で使うにはそれぞれに対応した日付でないといけないんだ<

つまりね、と幹也は続ける

クローチエディビエトロ

> 使徒十字を使う為には、使用者はそのエリアの特徴、特色、特性を詳しく把握する必要があるんだ、さらにそのエリアに対し最も効果的な星座を八十八の中から選択する事で、初めて条件が揃うんだ。この方法なら、事実上世界全土のどこからでも、ローマ正教による支配化が可能になる<

「…つまり、リトヴィアは使用ポイントを探る為に、前から学園都市に侵入してた、て事か？」

アラタが聞くと幹也は>うーん<と考えた後

>それはわからないけど…。ほら、例えば地上から見た北極星の角度とかから経緯や緯度を図って地図作る時は、地球上全ての座標でその作業する必要はないでしょ？ 主要なポイントを押さえて、後は机上の計算で済ませれる部分もあるから、学園都市に入らなくても良かったのかも<

そんなものか、とアラタは幹也の言葉を噛み砕いた後疑問を感じた

「待て幹也。これはそもそもペテロが死んだ事で作られた十字架じゃないのか？ なら、ペテロが死んだ時や、場所以外でも使えるのはどうしてだ？」

>そこなんだけど…<

幹也は少し考えて

>何でも、霊装自体はペテロさんが生きてる頃から用意してあったみたいで…<

「…どういっつた？」

>実は、ペテロさんは当初自分がどこで殉教しようかすごく悩んでたらしくて。今日、ペテロさんが眠る地が、ローマ正教全体の中心地になってる事からもわかるように、自分の殉教した場所がその後の歴史に関わると知ってたから…ていうのもあったはずだけれど…。すなわち、自分がバチカン以外の場所…、ローマ正教にとって最も相応しい場所があるなら、そこを選ぶように「使徒十字」クローチエデイベイトロの使用条件に幅を持たせた可能性が高いんだ<ゴクリ、とアラタの喉が鳴る

「けど、日付は変えられないだろう。いくらなんでも、その日キツチリ決まった予定で使うのは…」

>うん。実際ペテロさんは六月二十九日に処刑されてるんだ。丁度バチカンで「使徒十字」クローチエデイベイトロが使える日付だね<

「…つまり、わざわざ覚悟決めて捕まったのか、殺されるのを見越して」

有り得ない話ではなかった

>おまけにペテロさんは当時ローマ帝国と仲悪く、帝国の賓客であ

るシモンⅡマグスと敵対関係にあった。そして最後には殺害してしまふ…。たださえ十字教迫害の時代に、そんな事をすれば、自分の末路はわかってたはずなのに<

さらにはこんな逸話もあるらしい

ペテロは捕まった際に弟子から助けられ、街の外に逃げるよう懇願され一度はローマの出口まで辿り着いたらしいが結局は引き返し自ら捕まっている

何でも、神の子の幻影を見て、自分の殉教を悟ったらしい

>ペテロさんは処刑当日、十字架に掛けられる時にも注文を出していて：「主と同じ方法では申し訳ないから逆さまにしてくれ」、つて。もちろんこれらの言動は、敬虔な十字教徒としてのものだと思うけど…<

「それ以外に何か細工をした…、って意味合いもある訳か…」

十二使徒ペテロはどんな行動をとっても自分がいずれ処刑される事はわかってたのだろう

だからこそ自分の死を最大限に利用出来る瞬間を狙っていた可能性も高い

自分が死んだ後の百年先も考えて

単なる受け身とは格が違う

自分が死ぬ場所、時間、それらによって与えられる効果、結果、成

果…

それら全てを熟考した上で自らの末路を自分の手で作っていく

究極の冷徹、慈悲が合わさって生み出された究極としか表現出来ない魔術

「…幹也。今日、九月二十九日に、日本で『使徒十字』クローチエディビエトロを使う為のポイントって…、わかってるの？」

アラタの問いに答えはすぐ返ってきた

>もちろん<

……………

第二十三学区

それは一学区全てを丸ごと宇宙、航空開発の為に占有されてる特殊な学区

幹也にそれを教えてもらい燈子に連絡すると丁度反対側にいるらしく行くのは無理だ、と言われた

式には幹也になんであんな危ないこと調べさせた、と怒られた

故に式は今幹也の護衛についているだろう

そう考えてると列車が滑り込んで来る

その入り口の所に三人の人影が見えた

上条当麻と土御門元春、そしてステイル「マグヌスだ

アラタは早足でその三人に合流する

足音に気づいた土御門は最初に振り向く

「カガミン…。お前も最終的にここに来たか」

「ああ。かなり時間はかかったけどな」

「にゃー…。本当なら再会を喜ぶべきなんだが、そんな状況じゃねえからな、感動の再会は後に取っておくぜえい」

「是非そうしてくれ、こんな状況で再会なんて、俺も望んでなかったからな…」

アラタは帽子を深く被り同意した

タイミングを見計らって赤髪の神父、ステイルが言葉を告げる

「午後六時から七時の間。これは僕達にとってリミットであると同時に、オリアナやリトヴィアにとっても足枷になるだろうね。今からオリアナ達が他のポイントへ変更しても辿り着く前にリミットが来る。彼女達にしても、第二十三学区で意地でも「使徒十字」クロウチエディビエトロを使いたい所だろう」

その言葉をただ聞いて

「追いかけてこはお終いつてトコか」

当麻は呟く

「オリアナ達も今頃同じ事を考えてるだろう、僕としても依存はない。後は、全力で焼き尽くすだけだ」

ステイルは言いながら煙を吐く

次第に列車の扉が開き中の人達をホームへ吐き出していく

「この列車に乗ったら、もう後戻りは出来ない。待ってるのはオリアナやリトヴィアとの殺し合いだけだろう。覚悟は決まったか」

その言葉は上条当麻と鏡祢アラタに向けられた物だ

二人は僅かに沈黙した

今日いろんな事があった

血の匂いを嗅ぎ、砂の味を噛み締め、街中を駆け巡り、魔術師と殴り合い、ライダーと死闘を演じ、騙し合いに引っかけ、誰かが倒れる場面を目の当たりにし、怪我人を前に無力な自分を自覚して、歯を食いしばり、拳を握ってやってきた

「ああ」

「問題ない」

それら全てを飲み込んで二人は頷いた

開かれたドアに向かって足を踏み込む

「覚悟は決めた。ここで全部終わりにするんだ」

「あとな、赤髪神父」

「？　なんだ？」

怪訝な声を出すステイルにアラタは振り向かず告げた

「俺たちは、殺し合いで終わらせるつもりはないよ」

「それだけは、覚えておけ」

二人の言葉にステイルと土御門は黙り込んだ

それから土御門は子供のように、ステイルは皮肉げに、それぞれ感情を込めた笑みを浮かべた

四人は列車に乗り込んだ

自動ドアが閉まりゆつくりと動いた列車は地下のトンネルを進んでいく

先にある、最後の戦いへ招待するように

EX 来訪者（前書き）

今回はブラックインさんの作品、「仮面ライダーディエンド 世界を巡る大怪盗」より三人が来訪してくれました

だけど短いこの回は

だけで終わりませんよ

次回も暗躍？

EX 来訪者

二人の少年が決意を露わにしている中

この学園都市に来訪者が現れる

突如として現れた灰色のオーロラ

そこから一人の青年と二人の少女が現れる

青年の右側にいる少女は青色の髪にカジュアルな服、左側に少女はオレンジの髪を髪留めで結わいてる

その中央の青年は両手をポケットに入れたまま呟く

「新しい世界は、ここかな」

「みたいね。…けどなんか空気が違うわね」

オレンジ色の髪の少女は空気に触れ何も無い拳を握りそんな事を呟く

「大樹さんっ、ここでは何を盗るんですか？」

青色の髪の少女がワクワクした様子で聞いてきた

「正直今回は決めてないんだよ。寄り道に近いしね、ここは」

「決めてないって…、じゃあ何しに来たのよ」

オレンジ色の少女に聞かれ大樹と呼ばれる青年は「んー」と考えて

「…観光？」

そんな一言を放った

「あ、アンタってねえ…」

そんな言葉を聞いたオレンジ色の少女　名をティアナという
は頭を抱え

「楽しそうですね！　大樹さんっ！」

ティアナとは対照的にこれから何が起こるか楽しみだ、と言わない
ばかりに青色の少女　名をスバルという　は目を輝かせて大樹
を見る

「けど、欲しい物を見つけたら、遠慮なく頂こうかな」

大樹は歩き出す

その後ろについて行くスバルとティアナ

「さ、ここにはどんなお宝が眠ってるのかな」

青年　海東大樹は指で何かを射抜く素振りを見せ、クルリ、とデ
イエンドライバーを回した

12 仮面ライダーであること（前書き）

毎度のごとく微妙な出来です

それでも楽しく読んで下さる方々がいるならば感無量です

ではございませ...

12 仮面ライダーであること

第二十三学区というのは普通の生徒には馴染みないものだ

(…、)

ステイル、土御門、当麻と一緒に出たアラタは内心呆気に取られていた

まるで地平線

だがこの地平線はアスファルトとコンクリートで作られたものだ

管制塔なども大きく、学校の体育館の何倍もある建物ばかり

にもかかわらず辺りの滑走路のサイズが違いすぎてポツンと置かれてるようなイメージしか湧かない

根本的に縮尺が違うのだ

「この警備の基本は空。見張りを立たせるだけじゃ、警備範囲が広すぎるからにゃー」

土御門の言葉に

「まあ確かに、地平線の先まで見て回るのは大変だしな…」

それに全体的に滑走路だらけで隠れる為の物陰が少ない

空から逃れる術はないだろう

「でも、それじゃ鉄身ナントカ空港まで行くのは無理なんじゃねーのか？」

「だが、現にオリアナのヤツはどうにかしている筈だ」

上条の言葉にステイルは重なるように答えた

「土御門、方法があるなら早く答えてくれ、僕達は時間が惜しい」

「にゃー。アレを使うんだよ」

言って土御門は頭上を指差した

ゴウー！　と空気を叩くような音が真上から響いて来た

それはエンジンを四つ積んだ巨大な旅客機

「空中激突を避ける為に他の飛行機がやってきた時は、監視用の機体の巡回ルートが変わる仕組みだにゃー。そして」

土御門が言葉を切ったと同時に次々とやって来た旅客機や実験用小型飛行機など空を引き裂く

「　　この空はだいぶ混雑してるってこった。旅客機の様子をうまく眺めて走れば、上空監視の死角を潜りながら進める。問題の鉄身航空技術研究所付属実験空港はここから近いし、徒歩でもなんとかなるだろうにゃー」

.....

土御門の先導に従って無数の飛行機が飛び交う真下を走ってく

いかに監視機体の視線を逃れているとはいえ地平線の先まで遮蔽物が
ない場所を駆けるのはなかなかスリルがあつた

遮蔽物がない場所で、しかしまだオリアナの姿はない

おそらくもうポイントについているのだろう

アラタは走りながら腕時計を見る

(リミットは…約二十分から八十分…)

クロッチェディビエトロ

「使徒十字」発動までの残り時間

使われた瞬間に学園都市は物理的に支配されどんな理不尽な要求で
も違和感なく受け入れてしまう不条理な世界が出来上がる

だが焦った所で時間の流れが変わる訳はない

そう思考しながら走っているとこの広大な敷地を区切るフェンスが
見えてきた

その向こうにはおそらくオリアナが待つ「鉄身航空技術研究所付属
実験空港」の敷地だ

フェンスまで一気に詰め寄って土御門はフェンスに手足を引っ掛けた

そのまま一気に飛び越えようとした時

キラリ、と視界の端で何かが光った

金属の針金と針金の間に挟まれた

僅かに唾液に濡れた単語帳のページ

それに気づいた当麻が

「土御門！！」

と叫ぶが既に遅く

ゴウ！！ と横一列に並んだフェンス全体が高熱によりオレンジ色に変色した

両手足をフェンスにつけていた土御門の体が跳ねる

フェンスからすぐに手を離し距離を取る

ショックで彼が手放した大覇星祭のパンフレットが黒い煙を吐いた
と思うと一気に炎に包まれた

「がああ！！」しゅっ、という雑な音が土御門の手足から聞こえる

彼はグラサンの奥の瞳を固く閉じ歯を食いしばった

手足を責めているのは言うまでもなく火傷

格闘戦をメインで戦う彼にとっては武器を根元から叩き折られたようなものだ

「土御門!!」

アラタが近くまで走り屈む

「行け、カガミン…カミヤン…」

ボロボロの手で片方の手を押さえながら土御門は言った

「ここで時間を食っても仕方ない、そのページを破壊して、三人で行け!!」

「けどお前はとうすんだ!? そうだ、ステイル! お前の魔術で治せないのか!？」

当麻の言葉にステイルは

「確かに、火傷の治癒だけなら可能だが」

地面の土御門からフェンスの向こうに視線を移して

「あちらがそれを待つものか! 構えろ二人共!!」

『!?!』

アラタと当麻が振り返る

フェンスの先

距離は推定500メートルほど

小さな滑走路を挟んだ向かいの建物の壁に金髪の女が寄りかかっている

その付近には高校生ほどの男性が金髪の女の隣に佇んでいる

オリアナ「トムソンと東條サトル

オリアナは金属リングで束ねた単語帳を静かに口に持って行くと同時にステイルが叫ぶ

「上条当麻!!」

「わかってる!!」

当麻がフェンスに挟んであるページを殴り飛ばす前にアラタは動いていた

フェンスを一回の跳躍で飛び越えたのだ

「アラタ!？」

当麻がページを殴り飛ばしフェンスが元の温度に戻り二人が手足をかけて上ってくる間

（ここでオリアナに先手を取られたら手足をやられた土御門はよけ

られない…、ならこつちから攻めるしかない…！！ 犠牲はもう増やさない…！！）

「先行くぞ当麻、スタイル！！」

アラタは二人なそう言っで一気に駆ける

同時にオリアナは単語帳のページを噛み千切る

術式が発動し彼女の全身が青白く輝きその場でクルリと回った

まるで購入したての服を自慢するみたいに

直後にドッ！！ という音が500メートル離れたオリアナから響いた

彼女を中心とし円を描くように周りの空気が攪拌かくはんされた

目に見えない巨大なハンマーがその遠距離を無視して襲いかかってくる

右回りに迂回する圧力の大槌は彼女が寄りかかっている建物を薙ぎ倒しアスファルトをめくりながらアラタへと襲いかかる

アラタは右腕に仕込んである隠しナイフを取り出し「直死魔眼イーヴルアイズ」を発動させそのハンマーを犯すころ

500メートル先で苛立ちを露わにオリアナは単語帳を構え直す

まためくれあがるアスファルトの津波がアラタに押し寄せてくる

しかしアラタは動じず石の津波を今度は「虚像幻想殺し（イマジンブレイカーもどき）」で津波を破壊し右手に蓄積する

破壊と同時にアラタの真横にステイルと当麻がやってきた

今、激突が始まる

現在、時刻午後五時五十分

タイムリミットはおよそ十分から七十分の間

.....

互いの距離はおよそ300

「んふ」

そんな状況の中オリアナは小さく笑んだ

「女同士で楽しむのも面白いと思ってたのに、あの子は来ないのかしら？」

手の中の単語帳を口に持つてく

「追加の警備員や増援の魔術師もやって来ない。アンチスキルくす、ギャラリ
ーが多くてそれはそれで楽しかったのに」

ニヤニヤ、ニタニタと彼女は笑う

薄く、薄く、薄く

「あはは！！ となるとやはりそちらの面子は四人だけって事かしら！ しかもその内一人はリタイア決定！！」

愉快にそう叫び彼女は単語帳のカードを噛み破る

「彼は一番頭がキレると思っていたんだけど。…それともアレかしら、お仲間さんが罠にかからないよう自分が一番危険な位置を陣取っていたとかいう話かしらねえ！！ あっはは！！」

パキン！！ とガラスが割れるような音がオリアナを中心に四方八方へと飛び散った

瞬間全ての音がフツ、と消えた

まるでテレビの電源を落としたように

ステイルがルーンのカードを取り出しながら

「結界か！ 物理・魔術問わず、あらゆる通信を切断するタイプのものだな！！」

「！？」

当麻は周囲を見渡そうと考えたが

「当麻、敵は目の前だ」

アラタに注意され前を向く

ステイルは炎剣を生み出しオリアナに攻撃を仕掛ける

それに対しオリアナは単語帳のページを一枚噛み千切る

彼女の右手にバスケットボール程の水球が生まれステイルの炎剣を受け止めた

爆発は、起きない

オリアナの水球がグニヤリと形を歪め炎剣に巻きついたのだ

「！！！」

水のツタはステイルが驚く前に炎剣を伝って彼の手首を戒めた

更に腕へと巻きついて肩から一気に全身を包んでいく

水の膜に覆われたステイルは地面に倒れ炎剣を持っていたのとは別の手で喉を押さえつけた

「ステイル！！！」

当麻がオリアナから方向を変え手を伸ばそうとしたが

「あら？ 片手間で満足させられるほど、お姉さんは感じやすくはないわよ」

体を回すような左の蹴りが当麻の脇腹へと突き刺さる

「当麻!!」

アラタが当麻の方に向く直前

「貴方の相手は僕です」

突き刺すような飛び蹴りがアラタに襲い掛かった

「ぐ!?!」

アラタは両手で飛び蹴りを防御したが衝撃が強く後ろに戻された

直後にゴン、という轟音が響いた

ステイルが抵抗なく地面に沈んだ

恐らくオリアナの攻撃を喰らいノックアウトしたのだろう

だが意識は完全には消えていない

「相変わらず腰が砕けるのが早いわねえ、それでお姉さんと渡り合おうっていうのは、子供の背伸びもいい所じゃない?」

当麻が立ち上がり左右の拳を握る

「うる、さい...!!」

「お前は、ここで止める!! 使徒十字クローチェデイエトロも使わせない!! お前が学園都市をメチャクチャにして大覇星祭を台無しにするなら、それは必ずここで止めてやる!!」

「メチャクチャ、というのは心外です」

サトルがオリアナの隣に立ち言葉を紡ぐ

クローチエディビエトロ

「使徒十字は別に悪さをするものじゃない。あらゆる宗教が望むは人と世の幸せ。宗教にとつて「最も都合が良いように」全てを組み替える「使徒十字」は、魔術、科学の壁を取り、世界の人たちを幸せに導くかもしれないんです」

サトルの言葉にアラタは微かに笑みを浮かべ

「ああ、なんか良い言葉だね、それ。…けどな」

アラタはそこで区切り倒れたステイルを見て、当麻を見た

それからロストドライバーを巻き付けた

自身にあるたった一つの武器を

「俺は科学だ魔術だ世界のバランスなんてのはどうだっていい。今一番困るのは、アンタが今、ここで使徒十字を使用する事だ。クローチエディビエトロそれが何を意味しているか、理解してるか」

「んふふ、もちろん。お姉さんが何のために今の今まで頑張ってた

クローチエディビエトロ

思ってるの？」「使徒十字」によって学園都市を制圧する為よ。けど困る必要はないわ、…そうね、制圧って言葉がいけないのかしらね。誰もが幸せになり、誰もが幸せになっただけに疑問を抱かない。そんな素敵に位都合良い世界が待って」

「そこじゃない！」

アラタが怒りを込めて叫ぶ

「話の軸はそこじゃない！ 困るのは今、大覇星祭が潰れてしまう事だ！！ わかってるのか！！ 科学だ魔術だ 魔術師やローマ正教とかつまらない飾りで誤魔化すな！！ 正論で人を殴っていけないのと同じだ！」

アラタは叫ぶ

目の前にいる敵を見据えて

「確かに、俺の考える事は、アンタが抱いてる虚言に比べれば小さいさ！！ だが、吐き出す意地の一つ二つくらいある！！」

「大覇星祭つてのは沢山の人が準備に追われてきた！ 今日という一日を記念に残す為に！ この大覇星祭に沢山の人がやってきた、今日という日を楽しむために！ 今日という一日に、精一杯力を振るう為に！ なのに何で全てアンタらの為に無に帰されなきゃいけない！！」

アラタはオリアナに問いかける

「どんな立派な宗教で身を固めても、今の言にアンタが勝てるハズはない！ 所詮アンタらが抱えるモノ価値なんてその程度なんだ！ そんなアンタに、誰かが本当に大切にしているものを奪う権利なんてあるはずがない！！」

「…小さな小さな意見をありがとう」

オリアナの瞳から笑みが消える

残ったのは皮肉の笑みか

「けどその程度の感情論でお姉さん達が揺らぐと思う?」

「それ以前に、それくらいで傷がつくようなら、僕達は最初から動いてません」

「だからお姉さんはここでは止まらない。…そもそも坊やは何でこの場にいるのかしら。イギリス清教でもないし、禁書目録に関わった様子もない。何が坊やをそこまで奮い立たせるのかしら?」

オリアナの問いにアラタは迷いなく答える

「仮面ライダーだからだよ」

そう言い切った

「…それだけ? 聞いた所だとカメンライダーというのは、誰かの平和や幸せの為に戦うものじゃない? なら何で私たちに敵対するのかしら」

「は、確かにそうかもな。だが、アンタらがやろうとしてるのは、世界を不条理極まりない世界にしちまうよ。…それにな」

アラタは言葉を区切り内ポケットからガイアメモリを取り出す

「俺は世界の幸せより、身近な人たちの幸せを願うんだよ。たとえばどんなに小さくても、俺にとってメリットがなくても」

そのままメモリを構えて

「覚えておきな。いつでも、仮面ライダーは正義の味方ってな」

>SKULL<

「変身」

ドライバーにメモリをセットし開く

>SKULL<

ヒュオオ！！ と風が吹き渡りアラタの姿を変える

当麻も拳を握りながらスカルの隣に並ぶ

「お前がまだこの都市まちで何かをやるなら
」

スカルは言う

その言葉に揺るぎない信念を宿しながら

「仮面ライダーとして、見過ごす訳にはいかないな」

13 その拳に乗せて（前書き）

あんまりアラタが目立ってない気がする…

だけど後悔はしていない

ではどうぞ

13 その拳に乗せて

東條サトルもスカルに抵抗しカードデッキを右手に持ちその手を突き出す

途端にVバックルが腰に現れる

ば、ばつと腕を交差させて

「変身！」

バックルにデッキを挿入する

鏡が割れるような音と共に姿をタイガへと変える

「…決着をつけましょう、僕と貴方で」

デストバイザーをスカルに突きつけゆつくりと距離を詰める

スカルは隣の当麻に

「…負けんなよ。当麻」

「お前こそ」

二人は互いに激励しながら当麻はオリアナへ、スカルはタイガへと向かっていった

紅く染まった空の下

今の時刻は午後六時

これより一時間以内、どこかで使徒十字クローチェデイレトロが発動する

それは五分後かもしれないし、ちょうど一時間後かもしれない

色彩を変えてゆく空にはポツリと一番星が輝いている

だが、あくまでも星は一つ、複数の光点が織りなす星座を確認はできない

そんな、世界がいつ終わるかわからない世界の上で

両者の激突が始まった

.....

>フリーズベント<

白招斧デストバイザーからそんな電子音声がり響きスカルとタイガの二人を氷の壁が包み込んだ

「...氷の壁？」

まるでそれは鏡のように透き通っていたが内部から外の様子は確認できない

「ここにいるのは、完全に僕と貴方だけ。...そして宣言しておきます」

タイガはスカルを指差して

「貴方は僕には勝てない」

真っ向から宣告した

「…は、言ってくれるじゃないか」

スカルはベルト背にあるスカルエッジを抜き構えた

「さあ贖^{あがな}いの時間だ。…自分の罪は数えたか」

「僕に罪はない。…貴方を倒して、僕は英雄になる」

二人の仮面ライダーは正面から激突した

………

スカルは一気に距離を詰めスカルエッジを突き出す

タイガはその突きをデストバイザーの刃でいなし体を回転させながら左から払うように尻払う

その尻払いを体を少しバックステップで回避しエッジを持っていない左手で鉄拳を叩き込む

その鉄拳をすんでの所で首を左に倒して回避し蹴りで距離を離す

「痛っ！！　ち…、確かにやるな…、だけど　　！？」

スカルは辺りを見回した

タイガの姿がどこにも見えないのだ

「クリアーベントか！？ いや、だけどそんなの使う素振りとは……」

スカルは周囲を警戒しながら全方位を見回す

すると背後に痛みが疾った

「ぐあ！！ …ぐ、後ろか…！？」

スカルマグナムを抜き放ち背後に向かって発砲する

だがそこには誰もおらず弾丸は壁に当たり氷が砕かれた

「誰もいない…！？」

一人驚愕する中声が響いた

「ミラーワールド、という世界をご存知ですか」

声はするが、姿が認識できない

「…なんだ、ミラーワールドってのは」

「簡単に言えば、読んで字のごとく、鏡の中の世界…、全てが逆に描かれたもう一つの世界とでも言うでしょうか。…僕らデッキを用いたライダーは、そのミラーワールドに自由に行き来出来る力を持つ。こんな風に」

突如目の前の氷の壁からデストバイザーを構えたタイガがジャンプしながら振り下ろしを放ってくる

「のわぁ!!」

あまりに突然だったのでびっくりし攻撃を回避すると同時に軽く転んでしまった

「ち…、厄介だな、ミラーワールド…」

「ええ。だから貴方は、僕には勝てない」

タイガはバックルにセットされたカードデッキから一枚のカードを取り出すとデストバイザーにそのカードを挿入した

>アドベント<

するとどこからともなく虎のようなモンスターが現れる

タイガの契約モンスター、デストワイルダーだ

「…上等だ…。何が何でもめえを倒して、オリアナ達の目的を潰す…!」

「…出来るものなら…!」

タイガはデストバイザーを構えデストワイルダーと共にスカルに向かっていった

「ふう…、っし、行くか…!!」

スカルは気合を入れ直し同じようにタイガに真っ向から挑んでいった

.....

魔術師、ステイル「マグヌスの意識は明滅していた

横倒しの視界、にじむような顎の痛み

自分が倒されたと気づくまで実に三秒の時間を要した

彼は接近戦に使うような体力に恵まれてる訳じゃない

それは彼が体を鍛えてないのではなくさらに根本的な所に要因がある

ステイルがルーンのカードを用意したり暗号化した呪文等を使うのはその魔術に莫大な魔力を用いるからだ

元来魔力というものは体の内側で様々な術的な作業をこなした上で生まれるものだ

普通の魔術師ならさほど辛くない作業でも、彼の「魔女狩りの王」
みたいな教皇レベルとなれば話は変わってくる

簡単な作業も数をこなせば疲れるのと同じく魔力精製「作業」はステイルの体を圧迫している為、スタミナ消耗も早いのだ

簡単に言えば彼は体の内側、外側の両側で運動しているようなもの

ステイルは神裂火織のように選ばれた聖人ではない

土御門元春のように一つの道を極めた天才魔術師でもない

それでも戦う理由が彼にはあった

だからルーン文字を修得し十字教文化へと組み込み「魔女狩りの王」イノケンティウスという教皇レベルの術式を手中に収めた

その代償に近接戦の可能性を全て捨て、ルーンカードが無ければ炎一つ起こせない状態になっても

(く、っそ…)

意識が揺れた

その状況の中、拳を振るう音と魔術が交差する響き、そしてその付近に構築された氷の結界からは刃を交える音が聞こえてきた

あの上条当麻マギナはまだ戦っている

どんなに攻撃を受け、叩き込まれて、ねじ入れられても

倒れず、諦めずに歯を食いしばって、ただただ拳を握り締めて

またその結界の中でもカメンライダーが戦っている

外からでは様子はわからないが時折あの男 アラタと言っていたか の声が聞こえてきているので恐らくは劣勢なのだろう

だがそれでも地上を踏みしめる音がはつきりと耳に聞こえる

彼も諦めてなどいない

オリアナと戦う上条当麻と同じように諦めてなどいない

自分はもう「あの子」の隣にはいられない

どれだけ月日経ってもあの立ち位置には二度と戻れない

だが

「世界を構築する五大元素の一つ。偉大なる始まりの炎よ……！」

たった一人の女の子を守る為に掴んだ様々な技術

彼女の笑顔を踏みにじらんとする者と戦う為に、ただそれを目的に血反吐を吐くような痛みと共に手に入れた数々の炎の魔術

自分の背中を押す淡い感情もわからないままがむしやりに手を伸ばした結果

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

彼は

ステイルは知っている

この術式にもう何の意味も、価値もない事を

あの少女の隣を歩いてくれる人物が存在し、そのためにこの術式はすでに用済みである事も

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を罰する凍える不幸なり」

それでも

この術式はきつとあの子以外の誰かを守る

例えば大きな瞳に涙を溜め、返り血で両手を朱に染めて

全く意味ない拙い魔術に全て願ったあの小さな女性

例えば魔術師でも何でもないので胸元に掲げた十字架一つで勘違いされた少女を庇って、血の海に沈んでしまった一人の少年

「その名は炎、その役は剣……！」

その行為はスタイルにとって何の慰めにもならない

例えるなら、大切な人の為に心を込めて作ったケーキを全くの赤の他人が「美味しい」と食べてしまうようなものだ

たとえどんなに褒められても、心の隙間は埋まらない

絶対に

「権限せよ……」

それでも彼女達を助ける事が結果として一人の少女の笑顔を守る事になるならば

この学園都市を守る事が一つの幸せに繋がる事になるのなら

ステイル「マグヌスは受領する

全身全霊を振るい

全くの別人を助けるが為に

「我が身を喰らいて力と為せ」

今もまだ残る感情の下

「
魔女狩りの王！」
イノケンティウス

ここにいる敵を倒す事を

ドオ、と彼の修道服の内側からまるで紙吹雪のように膨大なルーンのカードが舞い散った

彼を中心に渦巻き、周囲の砕けたアスファルトに張り付いて

刹那、炎が吹き荒れる

紅蓮の輝きを放つ炎は、外から内へと一気に集束し、その中心に黒い重油みたいな人型の芯を据えて

ステイルの隣に立つは摂氏三千度の炎の巨神

「行くぞ…、魔女狩りの王」
イノケンティウス

告げながらゆつくりと地面から立ち上がる

手について、足をつき、ふらふらとした動き

だが決して、体の芯と心の軸は折れず

彼は天に向かって自身の魔法名を叫ぶ

「Fortis931…!!」

ステイル自身が己が魂に焼印し、必死で組み上げた「魔女狩りの王」
イノケンティウス
に望むものは

「我が名が最強である理由を、ここに証明しろっ!!」

……

オリアナは覆い始めた薄闇全てを薙ぎ払うような炎の閃光を見た

「ステイルっ!!」

異変に気づいた当麻は凄絶な笑みを浮かべ、振り返らずに魔術師の名前を叫ぶ

そしてまるでそれに呼応するように業火の光量が増した

「お姉さんに、蠟燭責めの趣味はないのよっ!!」

オリアナは当麻の攻撃を横に避け、動きを利用し当麻の右側へと体を移動させる

上条当麻を反対側から襲い来る炎巨神の盾として

「…、」

多少離れた場所に立っていたステイルは微妙に眉をひそめて

「一緒に死ね」

「うおおお！？」

当麻が身を屈めた瞬間魔女狩りの王の右腕が横殴りに振るわれた

イノケンティウス

その長い腕は当麻の髪の毛の端をわずかに焼いて、オリアナの上半身目掛けて勢いよく迫ってくる

この火力が爆発すれば確実に当麻をも巻き込む位置なのに

「な…！？」

驚いたオリアナが後ろへ下がろうとした直前に

「危ねえだろ馬鹿！！」

当麻のアップアが頭上を通る巨神の右腕を殴りあげる

業火の腕は消滅こそしないもののいきなり軌道を不自然にねじ曲げた

摂氏三千度

掠っただけでも肉が溶ける獄炎

（くっ…！！）

オリアナは腕を咄嗟にクロスしたガードの上に全体重を込めた当麻の右拳の一撃が突き刺さる

ゴン！！ という激突音が響く

衝撃を逃がす隙がない

ビリビリと両腕に痛みと振動が伝わってくる

（！！ 硬直するのはマズいわね…）

常に距離を取り魔術と物理的カウンターを狙うオリアナは単純な殴り合いなんてものは望んでいない

そんな思考をしていると

「吸血殺しの紅十字！！」

新たな炎が吹き荒れる

当麻の後ろから両手に炎剣を宿らせたスティルが勢いよく走ってきた

（まずっ…！！）

オリアナは舌を打つ

炎剣の脅威はやはり爆発力

爆炎、爆風をともに喰らったら恐らく骨も残らない

（先に叩くのは、魔術師の方…！！）

彼女の意識がステイルへとシフトしたが

突如駆けていたステイルがアスファルトの破片に引っかかってすっ転んだ

「帰れヘタレ魔術師！！」

当麻が叫びながら顔面に拳を放つ

ハッとしたオリアナが注意を戻して顔の前にガードを敷く

「黙れド素人！！」

当麻の後ろですっ転んだステイルが両手の炎剣を地面に叩きつけた

ゴン！！ という壮絶な爆発と共に壁のような爆風が前方に襲いかかる

背中を押されつんのめった当麻のバランスが崩れて拳の目測が外れた
オリアナのガードの隙間をくぐるように

顔からわずか下

胸の中心部

ドン、という床板を強く踏むような音が響き渡った

「が、あああつ！！」

攻撃が直撃した

理由は単純明快、当麻とステイルの動きが読めないから

「邪魔だ馬鹿！！」

「君がどけ！！」

チームワークはゼロ

そのメチャクチャな動きの矛先はオリアナに向いていて

（読めない…！？）

互いが協力するならまだしも完璧に互いが互いの足を引っ張りあっている

だがだからこそ

読みづらい

「ちい…!!」

単語帳を噛み千切ったオリアナは魔術を発動させ氷の剣を振るう

狙いはステイルの腰

だが本命ではない

避けられても粒子を操り剣そのものを組み替えて追撃する準備は万全だ

（とにかく、必ずブチ当てる…。お姉さんの手管で、腰を抜かしてあげるわよッ！）

しかし

ステイルの背中から正面に回り込んだ当麻が氷の剣を受け止めた

瞬間的に砕け散るオリアナの武器

（普段はいがみ合ってるのに…、こういう時は助け合うの!?!）

オリアナが驚く前にすでに二人はもう次の行動に移っている

当麻が身を屈め右手を構え

ステイルがそのすぐ後ろで拳を握り

二人同時に攻撃を繰り出す

当麻とステイルの拳が同時に飛ぶ

オリアナはどちらを防ぐかは考えたが間に合わず

ゴン！！ という音と共に

顔と腹に打撃を受けた彼女の体が勢いよく後方へ吹き飛ばされた

……

氷の壁に包まれたスカルは苦戦していた

繰り出す攻撃はデストワイルダーに阻まれその直後にタイガの一撃がスカルを捉える

またミラーワールドに入り込まれたらこちらからは一切攻撃が出来ず一方的に喰らい続けるしかなかった

だが

それでも

何度体が地べたに叩きつけられてもスカルは立ち上がった

「…わからない。…何で貴方はそこまで立ち上がる事が出来る…！
？ 本来ならもう立ち上がる事さえ難しい傷を与えたのに！！」

何度痛めつけても必ず立ち上がり自身を見据えてくるスカルにタイガは半ば恐怖を感じ始めた

「さあ…、何でだろうな」

すでにボロボロのスカルは震える体を奮い立たせる

「お前にや、一生わからないよ」

仮面越しに睨み付けてくるアラタに

ゾクリ、と背筋が凍るような感覚に襲われた

「ぐ…、これでトドメを…!!」

震える手でデッキからカードを取り出し白招斧デストバイザーに装填する

>ファイナルベント<

直後にデストワイルダーが叫びスカルを背後からそのまま顔面から倒れさせた

「がはっ!!」

そのままジャリリリ!! と地面を滑らせタイガの方向に走っていく

タイガは両手に装着されたデストクローを身を屈めゆっくりと深く構える

スカルはその一瞬を待っていた

次第に距離が近づきタイガがデストクローを突き立てる直前

イーウルアイズ
スカルは「直死魔眼」を発動させてスカルエッジを振るいデストクローを根元から叩き折った

「な…!？」

しかしそれでも腹部にダメージは通る

だが、勝機を掴んだ

「捕まえたあ…!!」

「ひ…!？」

がし、とスカルは左手でタイガをしつかりと掴み、ロストドライブからメモリを引き抜き右側のマキシマムスロットにメモリをセットし、ポン、と軽く叩いた

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

「ここまで密着されりゃ、ミラーワールドにはいけないよなあ!!」

そしてスカルは大きく右手を握り締めて

「でやあああああ!!」

「!!」

タイガの顔面に思い切り右拳を叩きつけた

スカルライダーパンチ

名付けるならそうだろう

その直撃を喰らったタイガは大きく後ろに吹き飛び氷の壁に叩きつけられた

ガツシャーン！！ とけたたましい音が響くと同時、フリーズベントによって作られた氷の壁が全て瓦解する

また瓦解したちょうど同じ時、当麻とステイルの一撃がオリアナを捉え、オリアナを吹き飛ばしていた

14 人間として

勢いよく地面に叩きつけられた

のたうち回る自分が踊らされていると自覚する

おまけに自分の隣では東條サトルが倒れている

気を失っているようだ

明滅する意識の中彼女は見た

前方から真っ直ぐ彼らがやってくる

敵の前で構えを解けば何が待っているかなど考える必要はない

だがわかっててもダメージの残るオリアナは起き上がれない

（負け、る…？）

金属のリングで束ねた単語帳が目の前に落ちている

自分の力の象徴である単語帳が

（もう、負け、る…？）

些細な現実がより一層彼女手から力を抜けさせていく

ボロついた意識は後にやってくる脱力感に身を任そうとしたが

（基準点は、どうするの…）

何かが引つかかった

何度繰り返したかも分からない質問

その問いの苦味を、もう一度だけ確認した

（お姉さん、は…絶対の基準点が、欲しくて…）

彼女の一つの同じ行いに対し皆が感じる事は様々で

感謝してくれる人もいれば、恨みながら去っていった人もいた

どうすれば良いんだろう、と悩んだ所で答えなんて出てきてくれない

人の数だけ思惑があるなら、人の数だけ自分の行いの意味が変わって
てくなら、オリアナの中にどれだけ確固としたルールがあつた所で

それを受け止める人によって結果などいくらでも変わってしまう

この世に正しい事など何もない

一人一人が異なる思想を持って動く限り

絶対に

（皇帝でも…教皇でも、大統領でも総理大臣でも。誰であろうと構
わない。私は誰のためにだって戦ってあげる…）

答えを知りたい、ではなく

答えなどどこにもないから

答えをこの手で作りたいと思ったはず

誰も首を傾げないような

全てにおいて満足出来るような

だから今日まで頑張ってきた

だというのに今ここでオリアナは何をしているのか

（だから、明確なルールを作ってください。皆を幸せにして、もう誰も価値観の齟齬が生み出す悲劇になんて巻き込まれないような…！！ そんな、そんな最高の世界を！！）

その願いを口の中で告げた瞬間、カッ！！ とオリアナの目が見開かれた

頭に血が向かう

その反動で心臓が大きく、ドクン！！ と脈を打つ

（勝つのよ…！！）

震える手を地面に手を伸ばす

足はまだ自分を支えられる程回復していない

だから一番簡単で、なお効率の良い行動に移す

（勝って答えを作ってみせる！！ 私は…、私の名は…！！）

彼女は地面にある単語帳を掴み取り

そして叫ぶ

「B a s i s 1 0 4 ! !」

その意味は

礎を担いし者

それがオリアナ「トムソンの魔法名だ

………

叫び声を聞いた

スカルはハッとした様子で当麻達を援護しようと走り出す

「伏せる素人！！」

その叫びの意味を感じいたステイルが当麻の背中を蹴飛ばす

そして彼は待機していた魔女狩りの王イノケンティウスを呼ぶ

炎の巨神が盾のように立ちふさがろうとしたその時

ぶち、とオリアナが倒れたまま単語帳のページを噛み切った

ドツッ！　と音と一緒に鮮血が散った

彼女が放ったのはサッカーボール程の氷の球体

それはオリアナの手をふわりと離れ中心から外側から勢い良く爆破し、大量の鋭い雨の破片を、扇状に撒き散らした

その刃は蹴られ地面に倒れた当麻の頭上スレスレを突き抜けて

その後ろにいたステイルの体を貫いた

鋭利な刃が肉に突き刺さる音は堅く、鈍く

ステイルは両膝を折って真下に崩れ落ち、横倒しに地面に倒れた

その体からじわじわと血が広がっていく

魔女狩りの王が苦しそうに身をくねらせてそのまま四散し消滅した

言葉はなく

呻き声も、なかった

「す、ステイルうー！ー！！」

当麻は起き上がりステイルの元に駆け寄る

スカルも変身を解き同じように彼の元に駆け寄ろうとした時

「どこへいくの」駆け寄ろうとした二人を止める声が聞こえた

振り返るその七メートル先に彼女は立っていた

その手にある単語帳を強く握り締めながら

「坊や達の相手は、こちらでしょう…?」

「お、前…!!」

意図していないのにアラタの口から言葉が漏れた

当麻も口には出さないものの拳を強く握り締めている

その手から血が滲み出るのではないか、と言わないばかりに

空は深い青色に変わりつつある

もう星座が浮かぶまで時間がない

日没まではあと五分あるかどうか

クローチェデインエトロ
「使徒十字」が使われるかもしれない

一番気にするべき所はそこなのに

「いい加減にしろよテメエ！！ 一体何人傷つけりや気が済むんだ！！」

当麻が最初に叫んだセリフ

倒れたステイルを放っておけない

だがオリアナは応急処置の時間さえ与えてはくれない

ならば彼女を排除するしかない

対しオリアナは笑う

「お姉さんだって、傷つけたくて傷つけてるんじゃないわ」

吹っ切れたような、邪魔な何かを削り取った、そんな表情

「それが嫌だから戦ってるの。そっちから見れば馬鹿馬鹿しいでしょうけれど、それでも、こんな私にだって目的があるの。…さあ来なさい坊や達。貴方達が学園都市を守る最後の手駒。坊や達を潰せば、お姉さんの役目は終わり、後はローマ正教の「使徒十字」クローチエディビエトロが、お姉さんの望んでいる景色を作ってくれる…」

今度はアラタが叫んだ

「他人任せで未来を決めてもらっているくせに、目的もクソもあるか！ 結局アンタはローマ正教の言いなりなだけじゃないか！ そんな浅はかさで、人の幸せを壊すな！！」

「…お姉さんはね…」

オリアナは慎重に間合いを測りながら静かに告げた

それは力を温存する為に

「誰でもいいのよ。ローマ正教だろうが何だろうが。誰に従うかなんて重要じゃない。政治家を選ぶのと同じ。この政治家が好きだから選ぶじゃなくて、お姉さん達を幸せにしてくれるなら、別にどこの誰が総理大臣になったって構わないでしょう？」

血を吐くように浅い呼吸を繰り返して告げる

「…お前は、自分の目的を果たす為なら、誰の元にも従うってのか」

オリアナは「ええ」と頷いて

「正直な話、お姉さんは別に学園都市の味方をしたっていいの。だけどお姉さんは魔術サイドに縁があったから、たまたまそちらに付いてただけ。…「使徒十字」は、とりあえずお姉さんの目的を果たしてくれそうだからね」

「目的？ 世界の支配件手に入れて、バカみてえな皇帝にでもなるのか？」

アラタの隣にいた当麻が言いながら一歩踏み込む

彼女は薄く笑い

「それはお姉さんの上の事情。お姉さんは別に、誰の下に従っても

不満はないの。お姉さんの日常さえ守ってくれば、誰が支配してくれても。…ねえ、一体この惑星には、どれだけの主義主張、信仰思想、善悪好悪があると思う？」

オリアナが聞いてくる

「答えはいっぱいよ。本当にいっぱい、数えるのが馬鹿馬鹿しくなるほど」

オリアナは単語帳を握り潰す程の力で掴む

「考えられる？ 例えば、おばあさんに譲ってあげた二階建てバスの座席の下にテロ用の呪符が仕掛けられていたり、迷子を保護して教会に預けたと思ったら実はその子はイギリス清教から逃げていた魔術師で、髪を掴まれて処刑塔に引きずられたって後から教えられて」

放たれる言葉に合わせてオリアナは踏み込む

「そんな落とし穴の存在を全てが終わった後で思い知らされた人間の思いが。逆に行動しなければやはり目の前の人々が傷ついていくという事を再認識させられた時の気持ちだ。動いてもダメ、動かなくてもダメ。じゃあお姉さんは一体、何をどうすれば良いのかしらね」

聞きながら当麻も踏み込もうとする

が、アラタに制された

「（アラタ…？）」

アラタは大丈夫、と口頭で伝えオリアナを見る

「おかしいと思わない？ 隣人を愛する人々が、その実、隣に立つ人すら守れないなんて。だからお姉さんは求めるの。お姉さんの上に立つ誰かに。顔も名前も分からない、この惑星をどこかで支配している何者かに」

オリアナは僅かに奥歯を噛む

「誰でもいいから、この世界に散らばる主義主張を支配し（たばね）てくださいって

「…それが、アンタの目的か」

偶然なんて言葉で自分の親切心全て裏切られた彼女が二度と裏切られないようにする為に

そしてその裏切りが彼女の隣に立つ人々を傷つけないようにする為に

だがその目的は大きすぎて彼女一人では叶えられない

だから彼女はより高く、強く、優れた人間に託そうとした

絶対の基準点

偶然が生むすれ違いや、誤解などの悲劇を生まないようにする為に

「お姉さんは守る」

オリアナはそこで立ち止まった

踏み込むべき要素を使い切ったとも言つように

「その為に、クローチエデイトロ「使徒十字」を使い学園都市を支配する。そうすれば、今まで散らばっていた想いの形は、きっと上手くまとまってくれるはずだから」

これ以上は踏み込めるはずがない、と彼女は言外に語る

その行動で多くの人々が救われるのだから止める為の反論材料はどこにもない

無言のまま言い放ち彼女は壁みたいに立ちはだかる

しかし

「アンタの目的は、それだけか」

アラタは動じず言い放つ

「ならやはりアンタは安い奴だ。正義というにはあまりに安い。その程度の目的が為に、学園都市を差し出せなどの要求は、絶対に受け入れられない」

「…なんですって…!?!」

オリアナの眉が崩れるように動いた

「坊やは見た事がないからそういう口が利けるのよ!! 怨嗟でも悲鳴でも怒号でも、救いを求める声ですらなく、ただ「悔しい」っ

て一言を！！ 子供が希望も持てず、老人が絶望も持てず、ただその身に降りかかる事態に対して、呆然と立ち尽くすしかないっていうあの表情を、見た事がないから 「！！」

「だとしても」

今度は当麻が遮るように言い放つ

「それが学園都市を好きに攻撃して良いなんて理由にはならない。誰かの為に、別の誰かを踏み台にして良い理由にはすり替えられない。絶対にだ」

想いや、宗派、国境という大雑把なもので区切られている訳じゃない

確かに価値観や主義主張というのはトラブルを招くかもしれない

だが逆に言えばそれぐらい大切なものだ

譲れないものの一つや二つ、誰だって持って良いんだ

だから、二人は告げる

それが傷ついて自ら導いた自分の価値観であり、主義主張であるから

「アンタが抱える問題は皆が感じている事だ。無論解決策だって人それぞれで変わる。デカイ目的一つ掲げた程度で、その行動全てが許されるハズはない」

アラタの言葉に今度は当麻が続く

「俺は主義主張だの価値観の齟齬だのなんて知らない。小難しい事はわかんねーしな。けどアラタやステイル、土御門が傷つけられるのは嫌だし、インデックスや姫神、ツルギとナイトパレードを見に行きたいし、青髪や小萌先生と競技でギャーギャー騒ぎたい。それが一個の想いとして、ひとまとめにされるなら、俺はそいつを全力で守ってやる」

そしてアラタが踏み込む

「俺だっていつでも都合良くいくなんて思っていない。だがそこで立ち止まっても仕方ないだろ！ 失敗しても、転んでも！ 立って歩け、前を向け！ どれだけ無様でも、自分の想いが全て裏目に出てしまっても！！ それならその裏目から皆を引きずり出すために立ち上がるのが筋だろう！！ なのに、他人の人生を、アンタが途中で投げ出すな！！」

そして二人は最後に告げた

「アンタはどっちを選ぶ。一度失敗したからって、全部を他人に任せしておくか！！」

「たとえ失敗しても、その失敗した人達にもう一度手を差し伸べてみせるのか！！」

は、とオリアナは笑った

これまでと違い吹っ切れたような、しかし危うさのないごくごく普通な笑みを

.....

「当麻」

アラタは当麻にロストドライバーを投げ渡した

「おわっ…、アラタ、これって…」

突如投げ渡されたロストドライバーを受け取りながら当麻はアラタに聞く

「アイツには、仮面ライダーとして戦っちゃダメだ、…魔術師オリアナと戦うには、人間鏡祢アラタとして戦わないと」

彼は宣言した

二度目のオリアナ戦は生身で戦うと

「け、けど大丈夫かよ!? お前は、確かに強いけど、魔術師と生身でって…」

「お前だって生身で戦ってんじゃない。だから、信じる」

アラタは帽子を取り、上着を脱いだ

白いスーツの下からYシャツにセーターを来たアラタが出てくる

そのまま右側の袖を肩から破り捨て

「お前は休んでな。まだ癒えてないんだからよ」

「お前だつて傷だらけだろ！！」

「見た目ほど、あんま痛くないのさ……！！」

アラタは拳を握り駆けた

その接近に合わせてオリアナは単語帳を一気に噛み破る

しかし噛み破ったのは一枚ではない

紙を束ねているリングの方を外したのだ

「これで決着をつける……！！」

紙吹雪が舞う

「我が身に宿る全ての才能に告げる」

呼応し紙吹雪は白い爆発を起こした

その閃光全てがオリアナの右手に吸い込まれる

その右手を一度後ろに回し

「その全霊を解放し、目の前の敵を討て！！」

遠投のようなモーションで、勢いよく純白の爆発がアラタに向かって放たれた

……

轟！！ という音が聞こえた

飴みたいに伸ばされた白い光が横殴りに振るわれる

光が重力か、どちらかが歪んでいるらしく景色もグニヤリと形を変えていく

それは「吸引力」だ

空気が削り取られた事で真空の穴を埋めるように周囲の気体が荒れ回り、光や重力さえ歪めて取り込む必殺の獲物

（さあ、これで終わりよ……！！）

……

アラタはその横殴りの一撃に対し右手を振るう

だがアラタはわかっていた

おそらく相手はこの右手に打ち消され蓄積される事を読んでいる

なら、その予想を裏切るまで

右手を白い光に振るった瞬間

ブチリ、と形容し難い音と共に右腕が千切れ、白い光に掻き消えた

当麻が目を見開き

オリアナが驚愕の表情を隠さない

（嘘…！！ 自分さえ傷つけて…！？）

右腕の付け根から赤い血がポタポタと滴り落ちる

そもそも右腕は義手なのだ

だから後で燈子に直してもらおうと考えて敢えて捨てたのだがここまで痛いとは思っていなかった

今後二度とやるまいとアラタは心に誓った

とてつもない激痛がアラタを襲い体力を奪う

だが倒れる訳にはいかない

アラタは約束したのだ

御坂美琴と一緒にナイトパレードを見る、と

今まで寂しい想いをさせた分、ずっと隣にいてあげようと心に決めた大切な人

その約束を果たす為に

こんな所で倒れる訳にはいかない…！！

アラタは左の拳を握り締め

驚愕するオリアナのその一瞬の隙について

「はあああああ!!」

彼の放った回し蹴りが確実にオリアナの顔の側面を捉えた

白い光は消滅し派手に転がって地面に打ちつけられたオリアナは倒れて気を失った

アラタは血が滴る右腕の付け根を押さえながら呟いた

「…アンタの想い、分からなくもないよ」

15 大覇星祭の主役（前書き）

なんか微妙な感じになってしまいました…

いつもの事ですが

15 大覇星祭の主役

オリアナは倒れた

ピクリとも動かない

それを機に彼女が張っていた結界が消滅した事を知った

辺りの空を飛ぶ旅客機の轟音が思い出したように耳に聞こえてきたからだ

アラタは右腕の付け根を押さえながら当麻の所に歩いてくる

顔に苦悶の色を浮かべながら

「アラタ!!」

当麻は血相変えてアラタの元に駆け寄る

「俺はいい、早くステイルを…」

「け、けど!!」

渋る当麻にアラタは一喝する

「俺よりステイルの方が重傷だろうが!! 早く!!」

言われて当麻は頷いてステイルの元に駆け寄った

さて、とアラタは考える

気を失っているとはいえ「使徒十字」クローチエディビエトロの居場所を知っているのはオリアナだけだ

気は乗らないが起こして聞きだそうか、と思い行動したその時

《心配する必要はないかと。もうすぐ全てが終わりますので》

声が聞こえた

女性、年齢はオリアナよりも上

アラタは周囲を見渡す

だが他に人影はない

ならこれは通信術式か、とアラタは考えそして同時に相手について考えた

リドヴィア＝ロレンツェッティ

オリアナと共に学園都市で使徒十字発動させる計画に加担して科学サイドをまとめて支配しようと考えている人物

《まもなくこの「使徒十字」クローチエディビエトロは効果を発動し学園都市は我々、ローマ正教の都合の良いように改変されるかと。あなた達がどれほどの傷を負っていても関係ないので。どの道、その傷も含めた学園都市全てがねじ曲がる為に》

それはつまり使徒十字はリドヴィアの手にあるという事で

クローチエデイベイエトロ

同時に

「俺たちみたいな邪魔者は、皆ここで排除するってのか!？」

ステイルの近くにいた当麻が叫んだ

対しリドヴィアは

《何か勘違いなさっているのでは。我々は傷をも慈しみ、治してみせるとだけで。もちろんそれがローマ正教にとって有益だと判断出来ればですが》

何？ とアラタは眉をひそめる

だがまともに取り合ってはいけない、と考え

「当麻、この近くに必ずリドヴィアクローチエデイベイエトロと使徒十字があるハズだ、多分、滑走路の近辺に」

《誤解なきよう伝えておきますが》

アラタの言葉を封じるようにリドヴィアは告げる

クローチエデイベイエトロ

《使徒十字は現在、学園都市にはありませんので》

「な、…に?」

アラタが思わず呟きながら倒れているオリアナとサトルを見た

《そちらは学園都市内部の「天文台」を調べていたようですが、それらは我々が全て陽動した結果に過ぎないので。どうやら学園都市の外にある「天文台」にまでは手が回っていなかったようですが》

外

クローチェデイビエトロ
《使徒十字によって作られたローマ教皇領は最盛期には四万七千方キロメートルの領土を所有していましたので。およそ二百キロ四方といった所かと。当然ながら学園都市の外から放ったとして、余裕で街の全域をカバー出来ると計算され》

くそ、とステイルは言葉を吐いた

彼が言葉を紡ぐより先にアラタが叫んだ

「オリアナは、囷だつてのか!！」

《そう》

リドヴィアの声が続く

クローチェデイビエトロ
《使徒十字の使用には時間がかかりますし、ポイントとなる「天文台」も固定されていますので。一番懸念すべき点は、やはり全ての「天文台」を事前にそちらの迎撃要員に押さえられてしまう事で》

リドヴィアは淡々と事実だけ告げていく

《我々としてはいかにこれを防ぐかに焦点を当ててきましたので。そこで、オリアナが学園都市内部で意図的に動きを見せることによ

り、貴方達迎撃要員の目を全て街の内部に向けさせるという作戦を考えましたから。「使徒十字」クローチエディビエトロを持っているのは私であり、私は時間が来るまで学園都市の外のホテルに待機していましたし、実際に十字架を突き立てたのも街の外でしたが、勘付かれるような事はなかったですね」

アラタは歯噛みする、しかし具体的な対抗策が浮かぶ訳もなく

「オリアナには「人払い」や「気配断ち」を可能な限り使わない方向で動いてもらいました。最も、一番最初の術式が破られたのは、流石に焦りましたが。彼女が早く捕らえられても、こちらの作戦が果たせませんので」

その作戦を話すのはもうチェックだからか

「結果として彼女が撃破されてしまったのは残念ですが、「それすらも使徒十字が都合良い方向に改変してくれる」かと。結論をいえば彼女の敗北はいくらでも取り返す事が出来る些事に過ぎませんので。学園都市の外から、クローチエディビエトロ「使徒十字」によって「学園都市を丸ごと支配」すればそれで形勢逆転、計画通りという事です。念の為言っておきますが、今から私の位置を特定した所で、貴方達のいる場所からあまりに遠く。外に応援がいても、彼らが到着する前に事を終わらせる自信はありますので」

「くそ……！ どうすりゃいいんだよ……！」

当麻が叫ぶ

だがその程度で決定的な打開策は浮かばない

《貴方達は、この学園都市の改変をどのように受け止めているの？》

その声にアラタが答える

「ローマ正教にとって気に入らない場所を、活動不可に追い込んで、神の威光を示す…」

《それこそが間違いなので》

答えはすぐ返ってきた

《こちらにとって重要なのは、はびこる科学が宗教に屈するという事で》

「今の科学の傲慢さは、昔のローマ異教徒そのもの。奴らの信じるものを否定し、自分達の力を示す事で、主はその権威を取り戻す、か」

横合いから別の声が聞こえてきた

当麻とアラタが振り向くと、そこにはタバコを吸いながら片手をポケットに突っ込んだ蒼崎燈子が歩いてきていた

「お前からいわせれば、科学というのは未知のテクノロジー、それが「科学的」、と言われると、無条件で信じてしまうからな」

《ええ。それがどれほど馬鹿馬鹿しくても、自分の目で確かめようとせず》

つまりリドヴィアにとって「科学的に正しい」、は「先生が言っていたから正しい」、と同レベル

《人の手で主の威光を汚された以上、その光を同じ人の手で清め直すのは当然でしょう》

アラタと当麻はリドヴィアの話を無視した

もういくら話しても無駄だ

「当麻、時間はどれくらいある」

当麻は携帯を取り二人は時間を確かめた

空の色は深い紫色、瞬く星はそこら中に散らばっている

最悪の状況、準備は万全だ

（何か、打開策は……！！）

諦めてはいけない、という言葉が二人の頭の中でループする

しかしそれ以前にアラタは右腕があつた所が痛み、時折苦悶の表情をするが

（なにか、切り札は……！！）

クローチエデヴィエトロ

「使徒十字」

ローマ正教最大霊装、使用すると四万七千平方キロメートル範囲内

を完成支配、星座を用いた魔術の一つ

最も効果的な星座を八十八の中から選び、「降り注ぐ星の光を地上で集めて使うという事」は

「学園都市の外にあつて、学園都市を巻き込める使用ポイントは

」

「五ヶ所だ。一番遠いのが、距離だけだと千七百メートル…」

アラタの呟きに燈子が答えた

アラタは残ってる左腕でパンフレットを取り出した

(…いけるか)

アラタはパンフレットを当麻に渡し、捲りはじめる

沈黙の中当麻がパンフレットを捲る音が聞こえる

どんどん時間が減っていく

そしてようやくたどり着いたページを見て当麻はパンフレットを落としてしまった

パサリ、と

《もうおしまいです、と最後に言わせてもらい。私は貴方方を含めて、世界をより良い居場所へと作り変えますから》

ハ、と当麻が笑った

残り二十秒

「確かに…お終いだよな」

残り五秒

当麻は地面に落ちたパンフレットを見ながら言葉を放つ

「いくらテメエの幻想をぶち殺せてもよ」

は？ とリドヴィアが疑問を浮かべる前に

強烈な光が地上から放たれ、夜の闇が拭い去られた

「今の時間は六時半丁度」

アラタは左手で携帯を取り出して画面を見る

「「ナイトパレードの始まる時間だ。知らなかったか？」」

《な…！？》

その近くで燈子はこらえていた笑いを吐き出し

「ははははは！！ 残念だったなリドヴィア。千七百メートル先の天文台も、この学園都市中をライトアップさせるこの光量の前には無駄」

ふう、と煙を吐き出し

「一番遠い場所も塗り潰された。君がどこにいても、他のポイントも潰せるなあ、リドヴィア」

《 》

「…リドヴィアさんよ。あんたはまず最初に、誰が「大覇星祭の主役」かを調べるべきだったな」

アラタは告げた

主役

大覇星祭を成功させようと努力していた吹寄制理

偶然という形で巻き込まれた姫神を守り血の海に沈んだ神代ツルギ

その血にまみれ泣きながら生徒を助けようとした月詠小萌

そうした人々が集まったからこの大覇星祭を守り抜いた

皆で楽しい思い出を作ろうというその「心」こそが

「どうする。これぐらいじゃ大覇星祭は揺らがないみたいだけど。お前がその霊装壊して逃げて、もうちょっかい出さないならそれで

もいいと思うけど?。」

《本気で言っているのか?》

当麻の問いかけにリドヴィアは答えた

その声に低い緊張を含ませて

《私は敬虔なるローマ正教徒の一人であり、また学園都市に対する行いに負い目を持っている訳ではないので。その申し出を受ける意味合いは低いものと思うのですが》

「そうかい」

当麻はチラッと視線を移す

フェンスを登って土御門が登ってきていた

「…あとはイギリス清教がなんとかするだろう」

アラタの言葉にああ、と当麻は頷いた

そして二人は笑って告げた

「だったら後は運動会らしく」

「追いかけてこでもするんだな」

リドヴィアに向けてそう言った

16 決着

蒼崎青子はあるビルの上にいた

クローチェデヴィエトロ

どうにか使徒十字の使用条件を調べ上げ、万が一に備えて阻止する
為青子は魔術を準備していた

正確には魔法だが

「だけど、私の出番はいらなかったかな」

彼女は呟いた

ナイトパレードが始まったら、完全に学園都市が光で覆われている
のだから

.....

日も完全に落ちナイトパレードが華やかに行われてる中

(ん？ ナイトパレード？)

燈子が即席の義手を右腕につける作業の中アラタはふと思い出す

アンチスキル

警備員がガヤガヤと走ってくる音が耳に聞こえる中アラタは考える

その様子を訝しんだ当麻は声をかけてみる事にした

ちなみにステイルは燈子により最低限の応急処置が施された

最初ステイルは断ろうとしていたが「黙れ怪我人」と燈子に一蹴された

「アラタ？ どうしたんだ」

「いや…、今、ナイトパレードだよな。行われてるの」

うん、と当麻は頷く

（…ナイトパレード、ナイトパレード…ナイト、パレード…。っは！？）

思い出した

自分は約束してたじゃないか

数話前のモノローグ辺りにこの事を組み込んでいたじゃないか

「燈子、悪い！！」

「あ、待て！！」

燈子の制止を振り切ってアラタは走る

右腕がまだ完全につけられていない為実質彼は右腕がない状態で走っていた

途中、警備員アンチスキルの何人かに絡まれたが躊躇なく左腕でぶっ飛ばして歩を進めていった

「…やれやれ。あれほど壊すと言ったのに、一日で破壊するとはな」

アラタを見送りながら燈子は呟いた

「…君が、上条当麻だよな」

アラタを見送っていた燈子が当麻に向き直って言葉を紡いだ

「は、はい」

彼も半ばボロボロだがアラタほどではなかった

とりあえず当麻はそんな言葉を返しておく

「ふふ。アラタの言っていた通り。想像通りの男だよ」

「へ？ アラタ、なんか言ってたんですか？」

ちよつと興味が湧いた当麻

「ああ。面白い友人がいる、と言ってな」

燈子は語る

「そいつは毎日が不幸ばかりで、いつも災難な目に遭って、だけど誰かの為になら身体を張ってでも相手をぶん殴れるすごいヤツだつてな」

「いやいやいや！、俺なんかよりアラタの方が…」

「ならそれでいいさ。私は君も、評価しているつもりだからな」

次第にやってきた警備員により、当麻達は病院へと送られた

.....

ナイトパレードが華やかに行われている中

皆が楽しくナイトパレードを見ている中

御坂美琴は楽しめないでいた

せっかく約束したのに、待ち合わせした天文台にアラタはまだ来ていなかった

その場所は光輝くネオンやら何やらが良く見える絶好の場所

この場所を知るのは黒子や、初春、佐天、アラタしか知らない秘密のスポット

そこはいつか花火を見た場所だ

「...うそ...つき」

不意にそんな言葉を呟いてしまった

「アラタの...うそつき...」

約束したのに

来てくれるって約束したのに

瞳から涙が流れる

同時に嫌な考えが頭をよぎる

またアラタがいなくなってしまうのではないか

またあんな想いをしてしまうのではないか

「アラタの…、うそっ
」

そう叫ぼうとした瞬間

背後から足音が耳に入ってきた

後ろを振り向くと、ボロボロなアラタが息を切らしてそこにいた

ああ、またコイツは私の知らない所で戦っていたのか

いや、それ以前に

「アラタ、アンタ…右腕どうしたの!？」

鏡祢アラタの右腕がなかったのだ

「はあ…はあ、あ？ あ、ああ、言ってなかったな…。その、色々あつてさ」

あはは、とアラタは軽く笑っているが

「あははじゃないわよ！！　すぐに、病院行かないと……」

そう言つて美琴はアラタの左手を握る

その左手も擦り傷だらけで所々から血が滲み出ていた

「……はあ」

「む、なんだよその溜め息。俺は、お前とナイトパレードを」

「……いいの」

「へ……？」

左手を握つたまま美琴は呟いた

「……私は、ナイトパレードより、アンタの方が大事なんだから」

振り向きアラタの顔を見て笑みを浮かべてはつきり言つてやった

「……美琴」

アラタが名前を呟く

美琴はアラタの顔に手を添えて

「……お帰り。アラタ」

「…ああ。ただいま、美琴」

美琴に笑みを返しアラタは呟き返す

たった今

鏡祢アラタが戻ってきたのだ

.....

上条当麻が病院の中でインデックスにがじがじかじられてたり

病院内部でアラタが美琴を始めとしたいわゆる超電磁砲メンバーらに看病を受けていたり

その光景を当麻が見て「理不尽だああ！」と叫んでいたり

さらにその光景を見て蒼崎燈子が笑っている中

リドヴィアはフランス上空、高度八千メートルの場所にいた

自家用ジェットの中だ

出口のハッチ側の座席にポツン、とリドヴィアが一人座っている

そのすぐ隣に白い布で巻いた大きな十字架が立てかけてあった

彼女は宗教としての科学は嫌ってるが、技術として科学は受け入れるしかない、と考えていた

要は使い方の問題だ

「命無き形だけの偶像かがくを信仰するのでは、まさに悪しきローマ時代の異教そのもの」

ふと視線を横に移す

そこにはコクピットへ繋がるドアがある

今そのドアは開かれ、落ち着いた動作で計機をいじるパイロットの背中が見える

彼はどちらを信じているのだろう

この自家用ジェットはオリアナの個人的所有物でローマ正教の息はかかってない

おそらく彼はローマ正教徒だろう

浅いレベルでの

（科学の道具を一切否定するのではなく。それに頼り切るあまり、主の威光を忘れてはならないという事なので）

思ってからそつと彼女は息を吐く

事実上リドヴィアが行っているのは敗走

貴重な戦力、「罪人」オリアナとサトルも捕らえられ、天文台の位置も特定された

「…ふふ」

しかしそれでもなお笑う

「可哀想。あなんて可哀想なオリアナ」トムソンと東條サトル。
ふ、ふふ…救わなければ、あそこに捕らわれている迷える「罪人」
をこの手で救わなければ…」

彼女は自分に降りかかる不幸、逆境をねじ曲げ、前へ進む原動力へと変換する

学園都市に踏み込むには

安全に二人を救うには

傷一つなく全て終えるには

思い浮かんだのは到底無謀とも言える願いのみ

だが、目の前の状況が困難であればあるほど

最終的に目指す場所が高ければ高いほど

「ふふ…あつははは！！ 私は進みますので！！ 幸運だろうが不幸だろうが、順風満帆だろうがなんだろうがその全てを呑み込んで！！ 大喰らいの祭り（マルデイグラ）の名に相応しく、あらゆる現実を噛み砕いて糧にして差し上げますから！！」

飴を与えても鞭を与えても同じ反応しかない者

つまりどんな人間にも彼女を止められないという事だ

妨害という行為自体がリドヴィアの足を進ませる以上妨害という事が自殺行為になってしまう

「まずはローマ正教での内部事務処理、次に二人を回収の為の作戦立案！！最後に学園都市に攻撃を再開！！壁は高く、なんて甘美なのでしょう！！」

不気味な独り言にパイロットはビクリ、とそんな気配を向ける

しかしその態度さえリドヴィアは闘争心へと変えてしまう

と、そんな時

「アテンションプリーズ」

男性の声が響いた

この自家用ジェットにフライトアテンダントなんていない

コクピットから慌てたような物音が聞こえるあたりパイロットも何も知らないようだ

「イギリス清教最大主教ローリスチュアートが側近、クロス・アラストル。名前を聞いた事はないと言わせないぜ？」

試すような声

アイクビショップ
最大主教の側近

アラストル
「復讐者」の名を冠す男

アークビショップ
唯一最大主教と対等に話す事が出来る化け物

リドヴィアは息を呑む

恐怖と歓喜、二つの意味で

「何故、この自家用ジェットが？」

「名義を変えて、わざわざフランスで離着陸したみたいだがそんなもんで誤魔化せると？ 羽田に止まった時、コッソリ侵入させてもらったよ」

状況は絶望的

おそらく何らかの霊装も貼られていると考えて、こちらの機体の位置は英国側に漏れている

にも関わらず

「ふ」

「…気持ち悪いな相変わらず。ヤバければヤバいほどケラケラ笑うその性格、どうにかなんないのかよ」

「遠泳や潜水と同じなので。遠ければ遠いほど苦しみは増しますが、それだけ達成した時の喜びも大きくなるものですから」

「このマゾヒスト。その甘い感覚引きずってまた学園都市を襲うつもりか」

「」

クロスの声にリドヴィアは僅かに黙る

「学園都市には借りがありますので」

「右叩かれたら左を差し出せつてのは誰の言葉だ。そもそもオリアナとサトルの身柄はロンドンに移送する手筈だが？」

「いえ。学園都市を制圧する事でオリアナ達を返還してもらおうという行いこそ意味がありますから」

彼女は笑みを浮かべる

獣みたいな闘争心に満ちたシスターらしからぬ表情

「私は許しませんので。学園都市があんなにも抵抗しなければ、今は皆が幸せになっていたハズですから！！あの魔術師どもと彼らに協力した一般人の少年二人、彼らがいなければ、私はオリアナと共にこの飛行機に乗っていたハズなのですから！！」

熱を帯びた声は次第に大きく膨らんでいく

「だから私は決して彼らを許しません、同時に嬉しいのですよ、新たな壁と出会えた事が！！その壁が大きければ大きいほど、それを乗り越えた時の喜びは増していくのです！！乗り越える、という事は踏みにじる、という事ですので！！」

「…は」

明らかな異常な声にクロスは

軽い笑みを漏らした

「…何か？ 私にとって笑むべき事実であっても、貴方がそれを漏らす理由がわからないのですが」

「何。…なるほど。壁が高ければ高いほど、困難ならば困難なほど、踏みにじった瞬間の喜びがでかくなる、ね」

クロス・アラストルは一枚のルーンカードを取り出して

「確かに一理あるよな。この断崖絶壁野郎」

指をパチ、と鳴らした

瞬間ハッチの縁がキッチリ四角く切り抜かれてる

灼熱で金属が溶かされたのだ

リドヴィアが夜空にぶっ飛ばされるのを見ながら

「ローラ、後は任すぜ」

>えー、もう私の出番につき？ もっと引っ張りしかと思ったのに<

「お前は俺を殺す気か。さっさと脱出するから、後ヨロシク」

ひゅ、とリドヴィアが飛んでった方へ通信術式を投げた

そして彼は携帯を取り出し何かを操作する

彼の携帯は他の携帯とは一味違う

彼も切り抜かれたハッチから飛びおりる

下は海だがはつきり言って海でも痛い、下手すれば死ぬだろう

「…遅いなー」

と考える中

右の方から空を裂く音が聞こえた

オートバジン

「もつと早く来い」

カッン、と頭の部分を叩く

>それでも急いだ方だが？ 全く、注文が多いなお前はく

答えたのはオートバジン

本来オートバジンに会話機構は付いていない

だがなんか一味、というローラにより会話機構がプラスされたのだ

「やれやれ。面倒な相棒を持ったな」
>お互い様です。マスクドファイズ<

何はともあれ

こうして使徒十字を巡る一つの騒動は幕を閉じた
クローチエディビエトロ

EX 暗躍する者達

学園都市には窓もドアもないビルがある

単純な核爆発の高熱や衝撃波程度なら吸収拡散させる素材で作られた学園都市でも最強クラスに位置する要塞

通路や階段、エレベーター、通風化すら存在しない為、内外には空間移動能力者の協力が必須となる建物に、一人の「人間」が佇んでいる

学園都市統括理事長

アレキスター・クロウリー

「…ふむ」

彼は薄暗い一室にいた

その部屋は広くどこか肌寒さを感じさせる

真ん中には巨大なガラスの円筒器が鎮座しており、その中には赤い液体が満たされている

その円筒器には大小無数のケーブルやチューブなどが接続されていてそれらは床を覆い尽くしさらに四方の壁を埋め尽くし計器類に繋がっていた

アレキスターはその円筒器の中に逆さまで浮かんでいる

クローチェデビエトロ

「使徒十字による、学園都市支配化と、世界の利権の獲得か」

ポツリと呟く

「個人の目的がなんであれ、あれだけの事を成し遂げるには、ローマ正教本体の協力なしでは不可能」

別の声が聞こえた

コツリ、コツリ、と床を鳴らし腕を組んだ状態で黄金のライダーが歩いてくる

「君か？ オーデイン」

「何か不都合があつたかな」

全く動じる気配なく彼は歩みを止めない

「オリアナとリドヴィアの背後にいるもの。君が気づかない訳がない」

それはローマ正教

「…随分と。大きく揺らいでしまったものだな」

アレクスターはオーデインから視線を外し呆れるように呟いた

アレクスターはかつて魔術を捨てたものとして、かつ対極である科学サイドを万全の体制で集中管理しているとして、侮蔑の思いでそれらの情勢を眺めていたが

「しかし、だ」

つまらなそうにアレイスターは呟く

醜くしがみつく者達だから、そのしがみつき方はなりふり構ってられないだろう

使徒十字の一件は、とある少年二人が事を収めたものの、あまり上手いとは思えない

今後も同じ手が通用する確証はない

「計画を早める必要があるかもしれないな。元来、こんな些事のために使うような安い計画ではないが」

オーデインの呟きと同時に何もない空間に四角くい画面が表示された

そこには世界地図と、九千九百六十九ヶ所の赤い点

「鍵となる幻想殺しの成長は未だ不安定。どうするアレイスター」

「元々これほど早く実用を迫られるとは思っていない計画だ。まあ、無理はないかもしれないが」

声と同時に、先ほどの画面に重なる形で新たな画面が現れた

四角くい画面に映ってるのはガラスで出来た四角くいケース

その中にはねじくれた銀の杖と黄金の錫杖が浮かんでいた

「我々が打って出る可能性も、考えなければならぬかもしれないな。オーデイン」

「ふ…そうか…ふ、ふははは…」

「ふ…ふふふ」

何も無い部屋の中に二人の薄い笑い声が響いた

17 大覇星祭編 エピソード（前書き）

エピソードとか書いてますがまだ終わらないです

17 大覇星祭編 エピローグ

朝方、神代ツルギの病室で姫神秋沙は目が覚めた

床にペタリ、と膝をつけて上半身だけをベッドに押し付けて眠ってしまったようだ

すぐ、と立ち上がってベッドの上にいるツルギを見る

彼の傷は治り今ツルギはスヤスヤと寝息を立てている

するとガラリ、と扉を開けて真っ白い人影が入ってきた

「あ、あいさ」

てくてく、と現れたのは純白な修道服に身を包んだシスター、インデックスが現れた

「つるぎは大丈夫なの？ うちの魔術師が、見よう見まねの危ない治療術式を使っただけで報告があっただけど」

彼女は犬吠を聞いたつるぎを心配してこの部屋を訪ねてきたという

「うん。カエルのお医者さんが言うには。検査の結果は良好だってちゃんと元通りになってるって」

言っただけを見る

（骨まで見えるような傷だったのに）

あの赤い神父と女性が行ったのは、あくまで応急処置なものだ

普通なら助からないような傷をあっさりと修復した「魔術」

「今日か明日には退院出来るって。流石に。競技に参加するのは無理かもけど」

「？ あいさ、なんか寂しそうに見えるけど…なんで？」

姫神はそれに首を横に振り沈黙する

敵が攻めてきたから

昨日アラタ、という少年からだいたいのあらましを聞いていた

結局彼が私を庇ってくれたのはその一点だったのではないのだろうか

（誰でも。良かったんじゃ）

おそらく彼はその場にいた人なら誰であろうと救ったのではないか

（私。は）

姫神は服の裾を握り考える

自分はインデックスみたいに何かしらの力があるわけではなく、誰とでも分け隔てなく接し近くにいるだけで心を安らかすような心ももっていない

（私は。本当は）

自分があの少年達と一緒にいていい理由が思い浮かばない

きつとツルギは秋沙が困った時にはいつでも助けに来てくれる

つまり秋沙のために彼が行動する度にツルギは意味ない代償を払う
だろう

主に、傷という形で

（本当は。助けてもらうべきじゃなかったんじゃ）

自分の言葉にゾツとする

だが自分に宿る力は誰かを傷つけるしかないし、その忌まわしい力が
自分の個性を形作るものでしかなかった

「…私は。皆の迷惑にしか。なっていないのかもしれないね」

冷めた言葉と思った放ったのに、自分で聞いて胸の奥に響いた

対してインデックスはポカンとしたが次第に彼女は笑みを作り

「そんな訳ないじゃん。つるぎやとうまはあいさと一緒にいると楽し
そうだもん」

え？ と姫神は聞き返す前にインデックスは言葉を紡ぐ

「つるぎは普段ちよっぴり偉そうだけど、友達のためなら啖呵切つてまで駆けつける人だもん。とうまと違うかなーって所は、ケンカの時大勢が相手でも一步も退かずにぶっ飛ばしちゃうんだもん」

姫神はただ聞いていた

ただ、黙って

「とうまやつるぎは色んな人を守るからわかりにくいけど、それであいさを守る気持ちが薄らぐって事は絶対じゃない。その程度ならあんなに二人の周りに人が集まってくるはずないもん」

姫神秋沙は何かを喋ろうとするが、声が出ない

その口元がわずかに震えていたからだ

その震えがどこから来るか考えた所で

「吹寄、いきなり人の病室訪ねてきて最初にビンタ浴びせるなんてどういう事なんだっつの！！ しかもピンポイントに俺にだけ！！」

「だ、黙りなさい上条当麻！！ いきなり男の裸なんか見たら誰だっって驚くわよ！！」

「いや吹寄よ。当麻が着替えてる時にお前がいきなり入ってきたのは」

「鏡祢アラタ！！ まだ寝ぼけてるのね、ならテアニンね紅茶にいっぱい含まれてるからググーっといきなさいっ！！」

「熱ちやあ！！ てめこのデカパイ女！！ 紅茶を人の喉奥に流すんじゃねえやい！！」

「で、デカパ…！？ 鏡祢アラタっ！！ 今日という今日こそ覚悟なさい！！ 貴様の口にブルーベリーツツコンであげるから！！」

バタバタ、と朝の病院に似つかわしくない音が廊下から聞こえてきた

「で、神代ツルギの病室はこっちで良かったのかしら？…いきなり行っても迷惑に思われないでしょうね」

「ん？ つか、あのツルギが突然の訪問で迷惑そうにするヤツじゃねえよ。世話好きな吹寄なら気づいてると思つてたけどな」

「あ、確かにな。意外に吹寄が世話好きだったとはねえー」

当麻とアラタがうんうん頷く中吹寄が聞く

「世話好き？ …誰が」

吹寄の言葉にアラタが笑いを堪えながら

「くくつ。そりゃあ、ツルギの病室の場所がわからないで俺達所に相談しに來たり、院内の売店で果物が花かを悩み続けた健気な吹寄制理に決まつてんじゃねえか熱づあ！！ だから紅茶流すんじゃねえよこのおっぱい女王！！」

「お、おっぱ！？ もう頭にきた！ 鏡祢アラタそこに直りなさい！ 今すぐその頭に直接紅茶流してやるから！！」

そうギャーギャー騒ぐ声を聞きながらふとツルギのベッドを見る

その騒ぎのせいかどうやらツルギは起きていたようで「んー」と背伸びをしていた

「神代くん。いつ。起きてたの？」

「何。起きたのはほんの数分前だ。聞き慣れた喧騒が聞こえたから
もしや、と思ったたら、案の定だ」

ツルギはその喧騒を見ながら

「フキヨセーの言葉にも覇気が戻っている。やはりフキヨセーは、
ああでなければな」

微笑むツルギはどこか楽しそうで

「…ヒメガーミン。なぜ、カーミンジョンやカ・ガーミン、そして
俺がこうなつてまで戦うか、わかるか？」

姫神はその問い掛けに首を横に振る

「きつととうまやつるぎは、それで幸せなんだね。細かい事情はな
しに、友達が傷ついたら躊躇なく助けるだろうからね」

インデックスが姫神の代わりにツルギに言う

「確かにな。…ヒメガーミン、お前は決して一人な訳ではない。カ
ーミンジョンやフキヨセーだって、お前の友達だし、カ・ガーミン
だってきつと仲良くしてくれる」

言いながらゆつくりとベッドから降りて姫神の前に立つ

そして真面目な様子で言い放つ

「姫神よ。お前が望んだ世界は、今ここにあるんだぞ」

笑みを浮かべて手を差し伸べた

「あ…」

姫神は一瞬躊躇った

横のインデックスを見ると彼女も微笑んで姫神を見つめていた

そしてギャーギャー騒ぐアラタと吹寄、それを宥めようと必死な当麻

「私。は…」

もう一度

この世界に手を差し伸べてみようかな

そして姫神はツルギの手を取って

きゅ、と握り返した

18 正体不明編 プロローグ（前書き）

今回本来大覇星祭編以前に終了している正体不明編を敢えてもって
きました

ゆえに、当麻達は氷華と知り合ってはいません

正体不明編は当麻がピアジオと死闘を繰り広げる中、一方学園都市ではこんなことが、みたいな感じです

要するに

氷華達と最初に友達になるのがインデックスではなく、美琴ら超電磁砲メンバーな正体不明編です

18 正体不明編 プロローグ

大覇星祭が終わった

ゴタゴタした初日にはどうなるかとヒヤヒヤしたが、以降の大覇星祭は純粹に楽しんだ

一般客も参加出来る競技は積極的にアラタは参加し、美琴や神那賀と共に勝利を掴んだ

インデックスや姫神とも売店の屋台を巡ったりと楽しい一時を過ごせた

そんな中

なんか当麻がイタリアペア旅行を当てたらしいじゃないか

「…、」

大覇星祭も終わり、一段落した鏡祢アラタが学生寮に戻ってきたというのに

「なんで不幸な当麻がイタリアペア旅行なんて引き当てた…」

隣人が現在イタリアペア旅行に出発していますため

「暇だ…」

呟く

ようは当麻が戻ってくる間とてつもなく暇になってしまったのだ

美琴らと遊ぶのもいいかなー、と思ったがいかんせん美琴たちにも都合がある

しかしアラタも学園都市に戻ってくるのは久しぶりなので

「歩き回ろうか」

すく、と立ち上がってささ、と白いスーツに着替えソフト帽を被る

「…し、いくか」

………

一人の女性が宛無く街を歩いていた

紺色の制服に長い髪

名前は風斬氷華

路頭をさまよう中ドン、と誰かにぶつかった

だが氷華は思う

誰も気づいてなぐれない

どうせ気にせず立ち去っていくだろう

だが

「大丈夫？」

彼は違った

「…え？」

笑みを作って彼は氷華に手を差し伸べる

「あ、ありがとう…」

氷華は躊躇いがちに彼の手を取った

「ごめんね、怪我とかあるか？」

「あ、大丈夫です…、お気遣い感謝します…」

氷華は少し自嘲気味に笑みを作った

「良かった」

そう言って笑顔を作る彼

これが、紅刃ワタルと風斬氷華の出会い

後に氷華が大好きになる人との出会いだった

19 侵入者（前書き）

短いです

19 侵入者

鏡祢アラタは一人街を歩いていた

「んー、変わってねーなー」

歩きながらそんな事を呟いた

「…けど、もうすぐ二学期、か…」

実質、二学期はもう始まっている

おまけに時期は九月、衣替えの季節だ

アラタとしても学校に戻るのを心待ちにしていたのだが

「…めんどいなー」

すっかり本心をぶちまけてしまった

だがそんな事を言っただけならいい

また学校に通いこの緩んだ気持ちを締め直さないと、とアラタが気を引き締めていると不意にとある人物が目に入った

一人の女性と仲良さげに歩く紅刃ワタルが

「…、」

アラタはその光景から一旦逸らし少し目をこすった後またひゅばっ
！！とその光景を見た

見えるのは女性と仲良さげに話す紅刃ワタル

うん、冗談ではなかったようだ

.....

「ワタルっ」

とりあえずアラタは声をかける事にした

その言葉を聞いてワタルと女の子は振り向いた

女の子は髪 of 左側をアクセサリーで結わいている

制服は紺色のブレザーでスカートもそれなりに長い

そして何より目を引くのはブレザーの上からでもわかるくらい大きい
い

がす、とワタルの手刀がアラタの頭を直撃した

「痛ー！　ワタル、何すんのっ！」

「今風斬の胸見て、いやらしい事考えてたでしょうっ」

言われてちよっとびく、とアラタが反応する

またそれにあわせて風斬も恥ずかしそうに両手で胸を隠した

「はぁ…。風斬、こいつは鏡祢アラタ。俺の友達」

「なんだよその溜め息は。…こほん、鏡祢アラタだ。よろしく」

自分の名前を言ってアラタは手を出す

「か…、風斬氷華です」

風斬は戸惑いながらもその手を握り返した

……………

「そう言えば、俺と風斬は今から遊びに行こうと思ってるんだけどさ、アラタはどうする？」

ワタルはそんな事を投げかけてきた

遊び、と言われてアラタは黙考する

（遊び、か…）

こんな時ワイワイ盛り上げてくれる「アイツら」が頭に浮かび上がった

「なあ、もう少し誘っていいか？」

アラタはワタルにそう言って自分の携帯を取り出した

かけるのはもちろんアイツらだ

.....

アラタとワタル、風斬の三人はわかりやすい場所で待ち合was事にした

普段から美琴達と団欒しているあのレストランの入り口

程なくして見慣れた四人が歩いてきた

「アラタさーんっ」

手を振って存在をアピールしてくるのは初春飾利

その後ろに佐天、黒子、美琴、とついてきている

「あれ、神那賀はどうした」

黒子に聞くとやれやれ、と言った様子で

「風紀委員の仕事ですわ、何とも間の悪い事ですの…」

「あらま、タイミング悪いなホントに。黒子は？」

「わたくし今日は非番ですわ。初春もです、本当なら神那賀さんも非番なんですけど、さっきも言った通り急なお仕事が入ってしまったので」

急なお仕事、と聞いてアラタは眉を潜める

「なんだよ、仕事って」

そう黒子に聞くと初春が

「なんだか学園都市に侵入者が入り込んだんですって。何でも、学園都市の「門」に真つ向から攻撃したらしく…。幸いにも「特別警戒態勢」が発令されなかっただけでもマシなんですけど…」

初春とそんな事でうーん、と唸っていると

「あーもう、こんな時に仕事の話はなしなーしっ！！」

耐えきれない、と言わないばかりに佐天が叫んだ

「せっかく遊びに来たんだから楽しまないと！　ね、御坂さんっ！」

話を振られた美琴は

「そうね」

と言った後風斬の前に歩み出て

「貴女が風斬氷華さん？　私は、御坂美琴。よろしく」

そう言つて屈託のない笑顔を風斬に向けた

「わたくしは白井黒子。お姉様共々宜しく願いしますわ」

黒子も名乗り風斬に対し笑顔を見せた

「私は佐天涙子、よろしくねっ、風斬さん」

「初春飾利です。困った事があつたら、何でも言ってくださいね」

佐天も初春もそれぞれ自己紹介し笑顔を風斬に向けた

「よ…よろしく、ね？」

風斬はちよつと困った様子で、しかしどこか嬉しそうな表情でそう答えた

その後美琴達と楽しそうに話す風斬を見てワタルと二人笑みを浮かべた

楽しい一日になる、と思っていた

この時まで

.....

駅前の大通りは大勢の雑踏で溢れていた

その雑踏の中神那賀雫は歩を進める

（…見つけた）

神那賀は目的の人物を見つけると携帯を取り出しディスプレイに移った画像と人物とを確認する

（服装からして…ん、間違いないわ）

神那賀が探しているという人物は学園都市に不法侵入した人物を探していた

ディスプレイに移った画像は、その人物が門を攻撃した際に監視カメラが撮ったものを拡大したものだ

（さつて…、と）

神那賀はポケットの中に仕込んである拳銃のようなデバイスを取り出しそれを上空に向ける

（これ使つと始末書書かされんのよね…、けど、仕方ないか）

そう思いながら一気にガッ！ と引き金を引いた

ポン、という音と一緒に小さな金属円筒が上空に撃ち上げられる

直後ドカツ！ と金属円筒を中心に眩い光が撒き散らされた

その後周りの取った行動は迅速だった

悲鳴や怒号をあげ近くの建物に逃げていく

車を運転している大学生や教員もその場で車を乗り捨ててビルに逃げ込んでいく

この都市の住人なら誰でも知っているサイン

今から戦闘を行うから流れ弾を喰らわないように注意しろ、という
合図なのだ

ものの三十秒であれだけ多かった人だかりが静まりその場にいるの
は神那賀とその不法侵入者だけになった

神那賀はバースドライバーを巻きつけてセルメダルを挿入する

「変身」

咄くと共にハンドルレバーを回す

カポン、と小気味良い音を立てバースドライバー中心のトランサー
シールドが開く

そして神那賀零の体を仮面ライダーバースに変えた

一方その不法侵入者はくると振り向く

侵入者は男性で赤いコートに赤い帽子を被り特徴的だった

どことなくとあるチヨコレート工場の工場長を彷彿とさせてるよう
な外見だ

「…やれやれ。面倒だな」

赤い男が溜め息をつきながらバースを見る

「風紀委員、神那賀零。大人しくお縄についてくれるかしら？」

バースが身構えながらギリギリと距離を詰める

「…、」

小さい声で何言か呟き手から炎を繰り出してきた

バースは体を回転させその炎の玉を避けながら手に持ったセルメダルを銭形よろしく投げつける

投げられたセルメダルを赤い男は手で弾き男の視線が一瞬セルメダルに移った所でバースは一気に距離を詰めてホールドする

「…ち」

そのままギリギリ、と締め付ける

「はい、下手に抵抗すると、首へし折るわよ？」

「…っ」

男はニヤリと笑うと人差し指を口の前に持っていき

しー…、というようなジェスチャーをした

瞬間バースの意識が消えた

……………

「は…っ!？」

神那賀雫は目を覚ました

自分は何をしていた？

自分の姿を確認する

バースのままだ

自分はバースのまま気を失っていたというのか

よく見ればホールドしていた赤い男もいない

逃げられた

「…嘘」

呟いてバースドライバーを外し変身を解除する

「どんなマジック使ったのよ…」

言いながら神那賀は上を向く

まだ危機は去っていない

危機は始まったばかりだ…

……

「全く……。相変わらず野蛮だな、日本人は」

赤い男は呟きながら首をさする

そして胸ポケットから一枚の紙を取り出してそれを見る

「……さて、と……。標的は……。カザキリヒョウカ？ ……まあいい、それが依頼だ。だけどこんな依頼などどうでもいい」

言って赤い男は憎しみを込めて呟いた

「先生の敵は取らせてもらっぞ。……カガミネ」

20 遭遇 ―その頃の来訪者―（前書き）

今回再びブラッキンさんのキャラが出演しています

20 遭遇 ―その頃の来訪者―

てな訳で地下街にやってきた

実際地下街に来たのは正直アラタも始めてだ

学園都市には地下街が多い

駅を中心に各デパートの地下を繋げ迷路みたいに展開されている

「そう言えばまだお昼食べてなかったっけ？」

「そっぴゃそうね…。風斬さん、なんか希望とかあるかな？」

美琴が風斬にそう聞くと

「ん…、特には…ない、かな」

風斬は一瞬考える素振りを見せてそう答えた

「じゃあ…お、あれなんてどうだ？」

アラタが指差した所の看板にはこう書かれていた

学食レストラン

.....

アラタ達七人はごく普通のファミレスみたいなお店に入っていた

奥のたくさん座れるようなソファタイプの椅子に美琴達とアラタが座り、その向かいの席に隣り合ってワタルと風斬が座っている

「とりあえず今日は俺が奢ってあげるよ。あんま高いのダメだけど」

「あらら？ お兄様にしてはずいぶん太っ腹ですね？」

アラタがそんな事を言った食いついた

「今までずっと行方くらましてからな。…詫びみたいなものだ」

アラタはそう言ってどこか影を落とすような表情を見せた

そして瞬時にその意味を理解した黒子は追求を止めた

「アラタさんアラタさんっ」

くいくい、と初春と佐天が立ち上がりアラタの服を引っ張った

「ん？ どした初春、佐天」

「何でも頼んでいいんですか？」

目をキラキラさせて初春と佐天がアラタを見つめてくる

「あんまし高いのはダメだぞ？」

「わかってますって。私たち、これ食べたいですっ」

佐天がメニューをわかりやすく広げて一枚の写真を指差す

「どらどら」

佐天が指差した写真を見て値段を見る

「常盤台中学給食セット」

その額「四万円」

「…、」

アラタは無言ですくつ、と立ち上がって「そいやっ」と初春と佐天の頭をひっぱたいた

『痛あつ！！』

仲良く声を揃えて痛がった

「アラタさん、いきなり叩くなんてひどいですっ」

「そーですよ！ 奢るって言うてくれたのアラタさんじゃないですかあー！」

「限度があんだよ限度がつ！ 四万なんて払えるかあ！」

ギャーギャー騒ぐ三人を尻目に美琴と黒子はワタルと風斬に視線をやり

「私たちは私たちでなんか頼みましょ」

「そうですね。風斬さん、何か食べたいものとかは…」

黒子は風斬に聞くとおずおずといった感じでメニューの写真を指差す

「これ、が…いいな」

その写真は質素なコッペパンや牛乳などの普通の給食

「えー、風斬さん地味だよ、せつかくアラタが奢ってくれるんだから、もちよつと高いの頼もうよ」

地味、と言われてごーん、と効果音付きで落ち込む風斬に美琴は慌てて

「えー？ あ、いや風斬さんが地味って訳じゃなくて、えと、そのねっ」

美琴は慌てて風斬に謝るが風斬はメニューで自分の顔を隠してしまつた

「あらら、お姉様つたら…」

黒子が美琴を見てやれやれ、と言つた表情を浮かべる

風斬はふと隣にいたワタルと目が合った

ワタルは優しく笑みを浮かべ風斬も釣られて同じように笑顔を返した

.....

食事を終えてアラタ達七人は店の外に出た

「で、これからどこで遊ぶんだ？」

アラタの問に佐天が答える

「地下街といったら、そりゃゲーセンでしょアラタさんっ!!」

「まあ必然的にそーなるわね。ちよつと補充もしたかったし…」

美琴もそんな事を呟く

恐らくゲーセンのメダルが残り少ないのだろう

地下街は騒音対策を兼ねているのかやたらとゲームセンターが多い

一口にゲームセンター、と言っても大きく分けて二つある

それは外部系と内部系だ

「外部系」は学園都市の外からゲームを入荷している店の事を指し、
「内部系」は学園都市の中で開発したゲームを取り扱う店の事を言う

アラタ達が見つけたのは内部系でゲームセンターと言うよりはアミューズメントパークみたいなものだ

「んじゃあ早速入りましょう」

初春に促され七人の大所帯は店内に入る

入った途端に、音の洪水が二倍三倍に膨れ上がった

「風斬さん、あれからやってみましょうっ！」

テンションが上がった初春と佐天に連れられ風斬が奥へと進む

当の風斬は「あわわ…」と言った感じで引っ張られるだけだったが

「お姉様、お兄様、わたくし達も参りましょう」

「だな。ワタル、行こうぜ」

アラタに言われてワタルは頷いて

「ああ。…御坂さんも、アラタと軽いデート気分を満喫したら？」

「なっ…!？」

指摘された美琴の顔がみるみる赤くなっていく

「お姉様…お顔が真っ赤ですわよ？」

黒子に更に言われもつと真っ赤になる美琴

それを気にせずワタルと黒子は笑いながらすたこらさっさとして行ってしまった

「…、」

ピクピク、とこめかみ辺りを痙攣させて佇む美琴に

「…美琴、行くぞ」

ぼむ、と頭に優しく手を乗せて美琴を抜く

「ちょ、待ちなさいよっ」

調子を取り戻した美琴はアラタの後ろをついていく

そして美琴は思う

出来るなら、彼の隣にいたい

そう心から思った

………

風斬氷華は楽しい、と感じた

「友達」とこのような場所に来るのは始めてで

目に映る何もかもが新鮮に思えた

おどおどする自分を佐天が引っ張って

それを見て初春が見て笑っていたり

時折暴走気味になる黒子を御坂とアラタが頭をひっぱっていたり

遊び方が分からず困っている自分に優しく教えてくれたワタル

風斬氷華にとってあらゆるものが始めてだ

そう、全てが

……

とりあえずこれ以上ゲーセンにいと有り得ない速度でお金が減っていく、ということでアラタ達はゲームセンターから出た

何気なく周囲を見ると「風紀委員」の腕章をつけた少女が走り抜けた

その少女は自分たちも知っている少女で

ふとその少女がこちらを向くと

「あ！ アラタ、白井さん、初春さんっ！！」

少女 神那賀雫 が声を上げる

「神那賀さん…お仕事は終わりましたの？」

黒子が軽い笑みを浮かべながら聞いた問に神那賀はちよっぴり怒気をはらませて

「絶賛継続中です！ それより協力してください、不審者がこの地下街に紛れ込んでるんです！」

その言葉を聞いて黒子の表情が変わる

「本当ですよ!？」

声を上げる黒子に神那賀は「し!」と黒子の声を抑える

「侵入者に捕獲を悟られると厄介だから、避難を知らせてるのは音に頼らない」テレパス「念話能力者」がやってきてます、だから出来る限り自然に退避してください。あと白井さんも手伝ってくださいね」

「言われるまでもないですわ!」

黒子はスカートのポケットから「ジャッジメント風紀委員」の腕章を取り出し右腕に装着する

「黒子、俺も」

「ダメです」

アラタも手伝おうと思ったが黒子にバツサリと断られた

「お兄様はまだ」ジャッジメント「風紀委員」に戻られてませんので、しばらくは一般人です。心遣いは大変嬉しいのですが、ここはわたくし達に任せてくださいな」

言って黒子はアラタと美琴を見て笑顔を浮かべた

そして初春を見て

「初春、貴女は支部に戻って、私たちのナビを!」

「はい!」

そして黒子と神那賀は自然を装って奥に消えていき、初春は早足で出口に向かって行った

「アラタ、佐天さん、風斬さん、ワタルさん、私たちも逃げましょう」

美琴に促されアラタは頷く

「あ、あくまで自然な感じ……ですよね」

佐天が呟く

そう、あくまで自然に、なのだ

「だな。行くよ、風斬」

「は、はい」

ワタルに手を握られて少し頬を赤く染めながら握り返した

「よし、行くぜ」

アラタの声に頷いて美琴ら四人は地下街から退避しよう、と動いた瞬間

> 見つけたあ……！<

男の声が聞こえた

何もないハズの壁から

.....

海東大樹とスバル、ティアナ兩名は地下街のレストランに腰を下ろしていた

「スバル、あんま食べちゃダメよ」

「わかってるよー、ティアってば心配性だなあ」

その声にピクリ、と反応し

「あんたが！！ 普段バカみたいに食いまくるからだろおがあ！」

「ぢよ、で、でいあ…、ぐるじい…」

ギリギリ、と首を締め上げるティアナを見て

「こらこら。ここはお店なんだからあんまり騒いじゃダメだよ」

海東に指摘されてティアナはスバルの首から手を離す

「はにゅ…」と腑抜けた声を出しながらスバルはくわんくわんと頭を回している

「お待たせしましたー」

バイトと思われる青年が料理のトレイを持ってくる

トレイがテーブルに置かれた途端、頭に声が聞こえてきた

その言葉を聞いてビクウ、と体を震わすスバルとティアナ

「な、何？ 頭に声が…」

「脳に、直接語りかけてくるような…」

驚く二人と対照的に海東は

「今のが超能力…、なのかな」

海東がそんな事を考えているとバイトの青年が

「お客様、大変申し訳ないですけど、避難勧告が出されています、
急ぎ避難を」

「避難…？ なんでまた」

海東がそう聞くと

「…何でも、この地下街にテロリストが紛れたらしいんです」

「テロリスト！？」

スバルがその言葉に声を荒げ驚く

「スバル、声デカい」

「…わかった。さっきのテレパシーの指示通り、自然を装って地下
街の外に退避すればいいんだね」

「え！？ …あの、海東さん、この料理は…」

スバルがそんな声を出す

「諦める事ね」

ティアナの追い討ちに「ごーん、と落ち込むスバル

「…まあ仕方ないよ。…あとで何か買ってあげるから」

その一言でスバルは救われた

……………

そのお客様三人を見送ってバイトの青年はそのエプロンを解いてテーブルに置く

「…はあ、面倒だな」

その男性は憎々しげに呟きながら溜め息を吐く

「念の為、動かないとな…。アラタも帰ってきたらしいし、挨拶もしたいしね」

青年の名は南雲遼太郎

上条当麻や鏡祢アラタと同じ高校に通う一人の一生徒

無論、彼も無能力者（レベル0）なのだがそれを悔やんだ事はない

そして彼に「も」もう一つの姿がある

「…敵がいつ来るかはわからない…、なら、ここで」

遼太郎は一度両手を腰の左側に持つていく

そして左腕をそのままに右腕を前に突き出し折り曲げて自分の方に移動させる

その時彼の腰にベルトが巻かれた、否、「現れた」

最後にゆっくりと息を吐きながら右腕を再び前に突き出して叫んだ

「変身！」

その言葉と共にベルトの両側にあるサイドスイッチを同時に押した

刹那、眩い光と共に遼太郎の姿が変わる

そこにいたのは三位一体の戦士

右腕は轟炎のような紅い色

左腕は深海のような蒼い色

真ん中のボディは金色に輝く堂々たるもの

それはアギト＝トリニティ

南雲遼太郎のもう一つの姿だった

「…さあ、目覚めますか」

遼太郎 アギト「T は歩き出す

アラタを手伝う為に

友達を助ける為に

21 友達（前書き）

相変わらずのグダグダです

だけど面白く見てくださるなら恐悦至極です

もし気が向いたら感想をお願いします

21 友達

>おつと…虚数学区の鍵まで一緒か…。殺しがいがあるじゃないか…。カアガアミイネエ…<

壁の方には一枚の札が張られていてその中心にガラスのような輝きを放つ球があった

捉え方によればそれは目に見えなくもない

アラタは先陣切って言う

「お前がテロリストか」

>っは。テロリストっていうのはこういう事するヤツの事かな？<

ぼっ！！ と札は燃え尽き燃え滓が地面に落ちる

瞬間地下街が、否、地下街全体が大きく揺れた

「なっ！？」

その振動に思わずアラタはよろめいた

佐天は地面に尻をついて辺りを見回す

「閉じ込められた！？」

美琴がその現実を叫ぶ

それまでゆつくりとした流れで出口に向かっていた人たちが一気にパニックを引き起こし暴走し出口に人並みが殺到する

アンチスキル
警備員が障壁を下ろしたのだ

恐らく浸水かなにかを防ぐ為だろうか

>さあ……！！　僕は今から君たちを殺す……！！　アオザキの教え子の君もなあ……！！<

アオザキ、という独特なニュアンスにアラタは気付く

「アルバか！　てめえ！」

>正確にはその弟子のようなのだが……、まあいい、分かり易くアルバと名乗ろう……！　足掻きやがれ……！！<

言葉が切れると同時にまた地下街が大きく揺れた

……

アラタたちは念の為他の出口を探したが全て無駄だった

階段やエレベーターは障壁に封鎖されて、ダクトはそもそも通れない

「……迎え撃つしかないか、美琴、ワタル。二人は佐天と風斬と一緒に隠れてな。向こうは俺が狙いだし風斬だって狙ってた。先にこちらから……」

そのアラタを制止するのは他でもない美琴だ

「ばっ…！！ 危険よ、相手の能力がどんなのかわからないのに！
」

「俺が囷になればお前らは逃げ切れる。時間を稼げるだろう」

「前も言ったでしょう！？ 私はアンタの方が…」

言い争っていると奥の角でカツン、と音が響いた

五人の背中に旋律が疾る

そのまま待っていると

「…あら？ お兄様方」

白井黒子だった

「く、黒子…びつくりさせないでよ…」

黒子だった事にホッとするアラタたち

「てか黒子、お前こんな所で何してんだ？ 見回り？」

「それも兼ねてますが、わたくし閉じ込められた人たちを救出して
ますの。わたくしも空間移動能力者なので」

なるほど

黒子の能力ならば安全に閉じ込められた人たちを救出出来る

「なら黒子、頼みがある。お前の力で美琴と佐天を地下街を脱出させてくれ」

その発言に美琴が「なっ…!？」と驚愕を露わにする

「侵入者さん、どうやら狙いは俺だ。俺が囷になれば、皆が被害が少なくなるだろう」

真っ直ぐ黒子の眼を見て言う

そして黒子は知ってる

こういう時のアラタは何を言っても無駄だ、という事を

黒子は黙って

「わかりました」

とだけ呟くと美琴と佐天の背後に空間移動する

「黒子!」

「お姉様!! …お兄様を信じてください。お兄様がいなくなったりはしませんわ」

「…わかって、るけど…」

事態についてけないワタルと風斬はただ立つだけだったが

「アラタを信じる。御坂さん」

ワタルが言う

美琴は次第にゆっくりと頷いて

「行きますわ!!」

ヴオン、という音と共に黒子が美琴と佐天を空間移動させた

アラタは少しその場に留まったまま

「そっぴゃ風斬さんは行かなくて良かったのか？」

「私、は大丈夫…。紅刃さんが、いるから」

仲良いなー、と考えるなかまた地下街が揺れた

(近いな…!)

アラタは内心で呟くと走り出す

「ワタル!! しっぴかり風斬を守ってあげろよ!!」

「当たり前だ!! お前こそ抜かるなよ!!」

互いに自分なりの激励の言葉をぶつけてアラタは走りワタルは佇む

それぞれの使命を果たす為に

……

ゴゴン！！ と揺れる地下街にアギトリニティは少し足を取られた

「くそ…！ 犯人が動いたのか！？」

アギトリニティは内心焦りながら歩を早める

「どこだ…にやるお！！」

……

残されたワタルと風斬の背後でまたカッン、と足音が聞こえた

二人が振り向くと異様に目立つ赤い男が立っていた

「やあ？ カガミネは上手い事囷に引っかかってくれたみたいだね」

囷、という単語にワタルは眉を潜める

「風斬、離れてろ」

ワタルは風斬にそう言っでずい、と前に歩み出る

「キバット！！」

彼の叫びと共に懷からコウモリみたいなロボット（？）が飛び出した

「やっと出番か！ キバって行くぜえ！」

ワタルは彼の周りを飛ぶキバットをつかみ、自分の左手に噛ませる

「ガブッ！」

軽快な音楽と一緒にワタルの腰に赤い止まり木が現れる

「変身」

咄くと同時キバットが止まり木に止まる

するとワタルの体が一瞬透明になり弾け飛ぶ

そこにはワタルの姿はなく、仮面ライダーキバが立っていた

「…ふ！」

ば！ と構えを取るキバに対し赤い男は面倒そうに

「さて…叩き潰そうか」

………

キバは一気に間合いを詰めて素早い拳打を繰り出す

赤い男は首を僅かに傾けてその拳打を回避し手に炎を繰り出し顔面に叩き込む

キバは軽くのけぞり後ろに飛んで距離を取る

「間合いなんて取っていいのか？ 俺の得意な距離だっ！」

赤い男は次々と魔力で生成した炎の塊を次々と弾き出していく

「ぐ…！」

時折自分に飛んでくる炎の塊を手で叩き落とし地道に距離を詰めていく

「…ふ」

赤い男は一瞬口元に薄い笑みを浮かべたあとに

「これならどうかな」

赤い男は一発の炎塊を放った

キバは思わず体を逸らして避けてしまった

避けた瞬間に後悔した

（しまっ …！？）

その炎塊の狙いはキバではなかった

風斬だったのだ

「風斬いいいい…！」

「え？」

叫び虚しく

その炎塊は風斬氷華の顔面に直撃した

何か肌色の物が飛び散って、メガネのフレームが千切れ吹き飛ば

風斬はそのまま人形のように倒れた

「風斬っ！！」

キバは慌てて変身を解除し風斬の元に駆け寄って

ワタルの表情が驚愕に塗りつぶされた

惨状、ではなく、「現状」に

確かに傷はひどかった

頭右半分が吹き飛んだような破壊だからだ

だが圧倒的な問題は別にある

ワタルはもう一度風斬の傷口を見る

頭部の半分を吹き飛ばす傷なのに

・

中身は空洞

肉も、骨、脳髄も

何も、ない

彼女の傷口からは一滴も血が流れていなかった

ハリボテみたいな、ポリゴンで作った3Dモデルみたいな感じだった

空洞の頭部に中心に小さい肌色の三角柱が浮かんでいた

その場に固定されたままぐるぐると回る三角柱の側面には超小型のキーボードが収められていた

「…う」

風斬が呻いた

それに反応して三角柱が回転の速度を上げキーボードが高速で叩かれていく

（なんだ、一体…）

何やら三角柱の動きに合わせて風斬の表情や仕草が作られているような

先ほどの赤い男も攻撃を忘れその光景にギョっとしていた

風斬はゆっくりと顔を上げ、片方しかない瞳でワタルを見る

「あ、れ…めがね…眼鏡は…」

自分が眼鏡をかけていた辺りに指を触れ何かに気付いた

「…え？」

指がゆつくりと空洞の縁をなぞる

「い、や…!？」

風斬の眼が側にある喫茶店のウィンドウを捉えてしまった

そこで自分の顔に気づいたのだ

欠けたその表情からサ…!! と血の気が引いていく

「いや…!! 何これ!? いやぁ…!!」

抑えていた感情が爆発して風斬は髪を振り乱して叫んだ

危うい動作で立ち上がるとガラスに映る自分から逃げるように走り出した

そのまま彼女は通路の奥に逃げるように走っていった

「はっ、なるほどな…」

赤い男はパンパン、と手を叩き笑みを浮かべた

そしてそのまま歩き出す

呆然と立ち尽くすワタル「など」目もくれず

「かざ、きり…」

ワタルは動けなかった

あまりに鮮烈にその光景が脳裏に焼き付いたから

……

鏡祢アラタはふと妙な気配を感じた

「…？」

まるで叫びのようにも聞こえたその音が気にはなったが

「ま、大丈夫だろう」

ワタルを信じてアラタは歩く

かれこれかなりの距離を歩いたのだが一向に敵に遭遇しない

（どういうことだ…。相手の狙いは俺なのだから、すぐ当たるとは思っていたのだけれど…）

だが実際は全くのハズレ

警備員アンチスキルの人たちがせわしなく走り回っているだけだ（気配を断って歩くのは苦勞した）

とりあえず一旦引き返そうと思った所で携帯が震えた

学食レストランに入店した時他のお客の迷惑になる、と思いマナーモードにしていた携帯が震えだしたのだ

取り出して見てみるとフィリップの名前があつた

携帯を開き通話ボタンを押して耳に当てる

「もしもし？」

> やあ、アラタ。久しぶりに声を聞けて僕も嬉しいよ<

アラタ帰還の知らせは多分左の旦那が教えてる

アラタは冷静に返す

「どうしたんだ？ フィリップ」

> 先ほど紅刃ワタルから電話を受けてね。風斬氷華について<

？ とアラタは首を傾げた

風斬氷華について？

「どついう事だ、そりゃ」

> それを説明する。まず彼女を移していた「であろう」カメラの映像を調べたが、彼女はどこにも移って「いなかった」<

「…は？」

つまり楽しく美琴や自分と話していた風斬は一体なんだ？

あまりに突飛していて訳が分からなかった

> AIM拡散力場は知ってるだろう？ 彼女はそれが深く関わって
ると思うんだ<

AIM拡散力場？ とアラタはすつとんきょうな声をあげる

> アラタ。人間は機械で測ったら様々なデータが取れるね<

「え？」

> 熱の生成、放出、吸収。 光の反射、屈折、吸収。 生体電気の発生、
それに伴う磁場の形成… 酸素の消費と二酸化炭素の排出。 まあ上げ
ればキリがないくらいだ。 機械の種類に応じて数千万ものデータが
取れる<

「それがどうかしたのか？」

> これは僕の推測だが…。 逆に、「それら全て人間らしいデータが
揃えば、そこに『人間』がいる事にはならないか？<

アラタの声が詰まった

> 学園都市には様々な能力者がいる。 また彼らは常に無意識に微弱
な力を放出している。 一つ一つが弱くても、それらがいくつも重な

つて、一つの意味を為すとしたら？ アルファベツトを並べると select や start という意味のある単語になる。考えるに、『風斬氷華』という存在は無数のアルファベツトを並べて作ったプログラムコードみたいなものなんだく

つまりは

最初から風斬氷華という人間は存在しないという事なのか？

「…じゃあ、なんだ。風斬は人間じゃあなく、AIM拡散力場が生んだ物理現象とでも…？」

> 早い話はそういう事だねく

なんて、残酷

そこに彼女の意思はない

外部から勝手に作られただけなのだ

> アラタ。もしその話を酷いと思ってるなら間違いだく

え？ とアラタは聞き返す

> いいかい、仮説が正しいなら風斬氷華は人間じゃない。いくら人間に必要な要素を兼ね備えてても彼女は人間とは呼べない。いくら努力を重ねても結局本質に触れてしまえば消える儚い幻想なんだく

だがね、とフィリップは言葉を切つて

>まず人間でなければいけない理由とはなんだい？<

迷わず、はっきり言い切った

>僕は直接彼女との面識はない。けど君は？ 君達と一緒に過ごした彼女はそこにいるだけの幻想に過ぎなかったかい？<

そんな事はない

美琴や黒子と話している風斬は間違いなく楽しそうだった

ゲームセンターの時だって初春や佐天に連れられてる風斬の表情は本当に嬉しそうな顔だった

風斬氷華は簡単に失われてはならない

偽物とか、本物とかそんなくだらない理屈で仲間外れにしていいい訳がない

>答えが出たみたいだね。アラタ<

フィリップに言われてアラタは「ああ」と返す

>ワタルも似たような事言ったからね<

「ワタルは、なんて？」

そう聞くとフィリップは>んー<と考えて

>確か…<

……

「関係ない……！ アイツが人間じゃなくても、世間が人間じゃないと決めつけても、俺がアイツを人間と言い続ける」

……

> だっ たか なく

「……またキザッたらしい事言っ……」

アラタはふう、と溜め息をつく

> 君の友達に僕たちの友達だ。困った事があつたら遠慮なく頼ってくれたまえ

そう言ってフィリップは通話を切った

その直後ぬつ、と横の角から二本角の人影が飛び出してきた

「だわあ！？」

アラタがびっくりして床に尻についてその人影を確認するとそれはアギトで

「あ、アラタ」

アギトトリニティはその場で変身を解除してアラタに歩み寄った

「な、何だ、遼太郎か…。びっくりした…」

アラタがふう、と息を吐くと

「と、こんな事してる場合じゃない！ 遼太郎、手伝え」

「え！？ いやそのつもりだけどいきなりだなあ…。て、ちょ、走るなって！！」

先立って走るアラタを追って遼太郎が走る

二人の行動原理は一つ

「友達」を助ける為だ

22 彼女が初めて会った人（前書き）

今回アラタは名前すら出ていません

おまけに短いです

22 彼女が初めて会った人

風斬氷華は今になって焼けるような痛みについた

半壊した顔の半分がまるで焼けた鉄板に押し付けられた激痛が襲いかかる

常人なら死んでもおかしくない痛覚に耐えながら死への逃避も許されず

一言で現すなら生き地獄だ

しかしそれも長くは続かない

「…あ？」

変化が起こった

ぐじゅ、とゼリーが崩れるような音と一緒に傷口が塞がり始めた

それはビデオの早送りみたいで

本当にあつ、と言う間に傷口が塞がる

先ほどまでの激痛が嘘みたいに引いていく

確実に致命傷なのに

生きてちゃおかしいはずなのに

いや、肌だけではない

吹き飛んだ眼鏡や炎弾が直撃した際に壊れた衣服の節々がじわりじわりと直っていく

「あ、…ああ!？」

それと同時に考える余裕すらなかった思考回路が急速に回り始める

自分の中身が空だった、という事実が

普通と思っていた自分の正体が異質だという現実が

「ああ!？ いや…!! ひう、ごふ、けほっ!！」

とても巨大な重圧が風斬の心を押し潰す

そんな風斬の絶望に引き寄せられてまた別の絶望が現れる

風斬は振り向く

カッン、と軽い足取りで赤い男が

その赤い男は笑っている

人間の方がよほど歪んだ笑みが出来ると言うように

「ひ、くあ…!？」

風斬は反射的に逃げようとした

しかし恐怖と焦りで思うように足が動かない

対し男は無言で炎を繰り出し風斬にぶつける

炎弾は風斬の体を容赦なく貫き風斬を激しい痛みが襲う

直後貫かれた腹部からぐずり、と異音が聞こえた

風斬がお腹に目をやると不気味に波打っていた

貫かれた腹の部品が再生しようとしている

「オイオイ…、なんなんだこれは」

男はくくく、と笑う

まるで目の前で起きてる事象がおかしくてたまらないという風に

「なんだ何だナンダ！！ 虚数学区の鍵がどんなのかと思えば！！
こんなものか、全く、本当に、日本人は野蛮だな」

「ひ、い！？」

風斬は自分の体に恐怖と嫌悪を覚える

男は愉快そうに喋り出す

「しっかし殺すのも面倒だな…ああそうだ。なんならミンチになる

までぶっ潰してみようか？ 元に戻るのかな」

「ど、うして…！？」

「…ん？」

「何で…！？ 何でこんな、ヒドい事…！！」

「はあ、理由なんてないのだが」

あんまり過ぎる言葉に風斬は言葉を失った

「君でないといけない理由なんてない。君でなくてもいい。強いて言うなら、君が一番手っ取り早いから。ほら、簡単だろう？」

言葉が終わると共にそれまで放っていた炎弾とは別の更に大きい炎弾を放つ

腹部に穴を空けられ吹き飛ぶ風斬に追い討ちとして手近な店の壁を炎弾で破壊した

ドオン！！ という衝撃と共にまばらな瓦礫がいくつか風斬に突き刺さる

激痛に頭が真っ白になる

しかしその痛みを地面をのた打ちまわる間にすぐに修復されていく

また死に損なった

だというのに男は表情一つ変えない

自分は死のうが生きようがどうでもいいと言わんばかりに

風斬の瞳から涙が溢れでた

自分の命の軽々しく扱われ、更に悔しいとわかっていても何も出来ない自分にもっと苛立った

赤い男ははあ、とかなり深い溜め息をついて

「何だそのツラ。お前もしかして死にたくないとか考えてるのか？」

赤い男はゆっくりと歩いてきて風斬の頭を鷲掴む

そのままガン、と壁に叩きつけた

何度となく、延々と

「笑わせるな化け物が！！ あんなになってピンピンしてるお前が化け物ってまだ気付かないのかおめでたいガキだな、ああ！？」

幾度となく壁に叩きつけられ風斬の顔の半分は骨董品の壺のように壊れている

しかしやはり異音と共に顔が修復する

「ほら！！ 人間なら有り得ないだろ自己修復なんて！！ おらわかったか化け物！！ てめえに逃げ場なんかねえんだよ、受け入れても貰えないよなあてめえみたいな化け物なんてよお！！」

一通り壁に叩きつけた風斬を男は使い古したオモチャのように投げ捨てる

地面にべしゃー！！と打ちつけられ風斬はゆっくりと体を起きあがらせる

風斬は呆然としている

頭には逃げろ、と指示が下される

肉体的な傷はない

そんなのとうに治っている

精神的な恐怖というものもない

心は逃げろと叫んでいる

けどどこに逃げればいいのかだろう

風斬氷華は思い出す

何もかもが初めてだった今日という一日

そもそも初めてが多過ぎた

初めて。初めて。初めて。

初めて初めて初めて。

一から十まで全部初めて

何から何まで全部初めて

なんで気付けなかったのだろう

なら今まで自分は何をしてきたのだ

自分の体は、霧に浮かんだただの影

風斬氷華に逃げ場はない

化け物を暖かく迎えてくれる世界はないんだ

スカートのポケットには少女達と一緒に移った写真シールが入っている

そこに楽しそうな笑みを浮かべている彼女達は知らない

自分の正体がこんな化け物だなんて知らない

知ったらきつと彼女達は笑ってくれない

無知のまま笑顔を向けてくれた事を忌まわしい過去に思うかもしれない

同じように笑顔を作った風斬氷華はどこにもいない

ここには人の殻を破り脱皮した化け物しかないのだ

風斬氷華は涙を流す

暖かい世界にいたかった

もっと笑っていたかった

そして何より

「…紅刃…さん…」

我が儘言うなら彼の隣にいたかった

隣で笑顔を浮かべていたかった

「泣くな化け物」

男は空で文字を切ると炎を地面に叩きつけた

叩きつけた炎の中からぬるり、と褐色の大男が現れ出る

「バーサーカー凶戦士。化け物を狩るのにぴったりだ…」

「
！！」

バーサーカーが叫ぶ

風斬は涙を浮かべたまま彼らの方を向く

「泣くなって言うてるだろう。…お前がいても気持ち悪いだけなんだから。…やれ」

赤い男の指示に従い凶戦士が剣を振りかざす

風斬は自分に襲い来る激痛に身構えて目を瞑った

・・・

しかし衝撃は来なかった

だが不気味なはずの沈黙は優しく彼女を包んでいた

まるで嵐から暖かい部屋に迎えいられたように

風斬は恐る恐るまぶたを開けてみた

すぐ近くに見知った誰かが立っている気がした

しかし涙が視界を遮ってよく見えない

風斬氷華は十字路の真ん中にいる

そして少年はバーサーカーの剣から風斬を守るように横合いから走ってきたのだろう

少年の顔がおぼろげに見えてくる

少年の手には一本の剣が握られていた

たった一本でバーサーカーの剣を受け止めたのだ

「…お待たせ」

聞き覚えのある声だった

もとより風斬が知る人物はたかが知れている

その声色は力強く

暖かく

頼もしく

何よりも優しかった

彼は告げる

「もう大丈夫。…ほら、涙を吹いて。可愛い顔が台無しだ」

風斬はごしごしと目をこする

涙が晴れる

その先に

紅刃ワタルが立っていた

そして風斬に笑顔を見せた

まるで大切な友達に向けるような

そんな表情で

23 想いと信念と

「っ！！ 遊ぶなバーサーカー！！」

赤い男は絶叫する

その声に呼応して再びバーサーカーが剣を振りかざす

ワタルは一度バーサーカーに目をやると手にした剣 ザンバット
ソード を横一閃に振るった

斬！！ という羽音と共にバーサーカーが後ろに後ずさる

バーサーカーは体制を立て直し再び赤い男の横に陣取る

対し赤い男は

「ははははは！！ 喜べよ化け物、この世にはお前みたいな化け物を助けようとするバカが一人いるのだからなあ！！」

再びバーサーカーが走ってくる

今度は横風ぎ

ワタルでは防ぎきれない そんな風斬の考えはすぐに払拭される

ヒュ！！ と風斬の後ろから飛び出して二人の人影がバーサーカーの顔面に飛び蹴りを叩き込んだ

今度は大きくのけぞって地面に倒れるバーサーカー

その人影とは

「鏡祢、さん…?」

鏡祢アラタと南雲遼太郎の二人だ

「遼太郎、やっぱりあのバーサーカーは劣化コピーだ。十二回殺す必要はなさそうだ」

「十二回殺す羽目になったら流石にしんどいからね」

二人が会話する内容は風斬にはわからない

ワタルは言う

「一人じゃないさ。ここにいるだろう?」

ワタル、アラタ、遼太郎

「な…なんで? …どう、して…?」

その三人を皮きり赤い男がいる通路以外の三方から警備員が走って
くる

その警備員は無傷な者ばかりではなく中には女性まで混じっていた
が彼らの目は語っていた

もう大丈夫と

だけど氷華は問いかける

何故、どうしてと

少なくとも風斬氷華が一般人でない事は知ってる筈だ

顔面が破碎されたところを目撃したのだから

「理由なんていらないじゃんか」

その問にアラタが答えた

「俺は、友達を助けて欲しいって言っただけなんだから」

トモダチ…？

風斬は一瞬その言葉が理解できなかった

だって彼女は人間じゃないんだから

体は空洞で皮膚一枚の下には何にもなくて壊されてもすぐに再生するよつな体なのに

それを「些細」な事だと切り捨ててくれるのか

自分は此処にいてもいいだろうか

彼らは私という存在を笑って認めてくれるのか

呆然とする風斬にアラタが続ける

「涙を拭いて前向いて。胸を張って誇っていい。ここにいる皆が、君に死なれちゃ困るって思ってる」

風斬氷華は顔を上げた

あれだけ闇に包まれたような世界はもうない

「俺は君の事よく知らないけどさ、今から見せてあげる、君が望んだ「セカイ」は、簡単には碎けない」

希望を付け足すように遼太郎が言葉を続ける

確かに赤い男に手によって地下街は闇に閉ざされた

だがワタル達はそれに光を用いて闇に挑む

それは水中で溺れる誰かの手を掴み救い出すような行為に似ている

「大丈夫。君の居場所は、俺が守ってあげるから!!」

最後にワタルが叫ぶ

この暗闇で震える女の子を助ける為に

.....

「ワタル。お前は赤い男頼むぜ。あのデカいのは俺と遼太郎が相手してやる」

「相手って…、大丈夫なのか!？」

心配して声を大きくさせるワタルを余所に

「大丈夫だって。僕も遼太郎も、そんなに弱くないしさ」

遼太郎は変身の構えを取る

それと同時にアラタも腰にドライバーを巻きつける

「…気をつけるよ、二人共…、キバット!!」

ワタルは二人にそう言って手を上にかざす

「カッコ良く啖呵切ったから、守ってやらないとなっ!」

「わかってるよ、行くぜキバット!」

ガブっ!!

>SKULL<

そして三人は同時にその言葉を叫ぶ

『変身!!』

ワタルは腰に現れた赤い止まり木にキバットをセットし

アラタはドライバーにメモリをセットし開く

遼太郎はベルト、「オルタリング」のサイドスイッチを押す

それぞれキバ、スカル、アギトトリニティへと姿を変え構える

「ワタル、油断すんなよ」

「そつちこそ」

キバとスカルはそんな口を聞きながら互いの二の腕をぶつけあった

……

スカルとアギトトリニティはバーサーカーの前に対峙する

「劣化コピーと言えども破壊力は凄まじいな…。あまり一撃は食らわないように動き回ろう」

「……!!」

バーサーカーは雄叫びを上げながら持っている剣を大きく振りかぶる

「それをさせてくれるかなあ、敵さんは!!」

アギトトリニティはバーサーカーの周囲を走りながら斬撃を回避しつつも反撃の隙を伺う

バーサーカーの斬撃は大振りで破壊力は抜群だがその分避けやすいだから斬撃の後の隙を狙えば確実にダメージを与えられる

次に繰り出すのは横風ぎ

アギトトリニティはタイミングを見計らって体を屈めその斬撃を避けるとアギトトリニティは跳躍しその胸板に拳を叩きつける

しかし

「え!？」

むんず、と剣を持っていない手でアギトトリニティは掴まれて地面に叩きつけられた

どがあ!! と地面を砕くような音

叩きつけられたアギトは激痛にこらえながらも体制を立て直す

「遼太郎!!」

アギトトリニティの背後からスカルマグナムで牽制しながらアギトを下がらせる

「無駄にパワーは高いな、おい」

アギトは腰を軽く手で叩きながら立ち上がる

「なら…、一撃で沈めてやろうぜ」

スカルはアギトにそう言つてドライバーからメモリを抜いてマキシ
мумスロットにメモリを差し込んだ

「ああ、わかつたさ…！」

アギトは一度頷いて深く構える

直後アギトトリニティの頭 クロスホーンが展開され地面にアギ
トのマークが浮き上がる

「はああ…！！」

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

スカルもスロットを軽く叩き深く構え相手の出方を待つ

「
！！」

唸りを上げて剣を地面に叩きつけ地を這う衝撃波を繰り出した

「
今だ…！！」

スカルの声を合図にアギトとスカルは同時に飛翔する

「
たああああ！！」

「であああああー!!」

アギトは空中で一回転し両足を突き出す

スカルはそのまま片足を突き出して飛び蹴りの体制を取り

二人はライダーキックをバーサーカーに叩き込んだ

「
!!」

叫び声を上げながらゆっくりとバーサーカーは地面に倒れこんだ

そのまま光となって消えてゆく

「ワタル! 後は任すぜ!」

.....

「馬鹿な...!! バーサーカーが!?!」

赤い男はは、と前を見る

キバがザンバットソードを構え一気に接近してきている

「ちい!!」

舌を打ちながら手から炎を繰り出して接近を阻もうとするがキバはザンバットでその炎を弾きながら全く速度を緩める事なく進んでくる

「貴様！ 何故こんな化け物に肩入れする！」

「化け物って言うんじゃない！ 彼女は…、風斬は人間だ！ 他の誰がなんて呼ぼうと！！ 彼女は人間なんだあ！！！」

キバは叫びながら赤い男の顔面を殴りつける

「ぐあ！？」

「たとえ彼女が一人になっても、俺は…！！ 俺だけは裏切らない！！ 無論こんなの口だけじゃいけないかもしれない…。だけど、この心だけは本物だ！」

キバは叫ぶ

どんなに風斬氷華が暗い闇の底に沈んでしまっても自分は必ず手を差しのばそう

だから

「もう自分を化け物だなんて卑下しないでくれよ、「氷華」！」
氷華、と呼ばれて風斬は頭をあげる

見えるのはキバ ワタルの背中

その背中では語る

>俺を信じろ<

「紅刃、さん…！！」

目尻が熱くなる

私を受け入れてくれる

こんなにも私を好いてくれる人がこの世界にはいたんだ

「戯言をお!!」

赤い男はありったけの炎を手に纏わせてキバの顔面目掛けて拳を振るう

「戯言で、悪いかああー!!」

それに対しキバも渾身の力を込めて顔面を殴りつけた

二人の拳は互いの顔に直撃した

数秒の硬直の後片方の人影は倒れた

もう一つの人影は倒れる事はなかった

絶対に

.....

その後駆けつけていた警備員アンチスキルによって赤い男は捉えられた

だがこの事が表に出る事はないだろう

地下街から出ると開口一番美琴の心配そうな声が耳に届いた

初春や佐天、神那賀も一緒だった

初春によると支部のコンピューターが突如使用不能になった為再び走って戻って来たという

黒子は現在事務処理等を任されているらしくここにはいない

また、別の意味でここにいない人影が二人いた

それに気づいた美琴が声を上げる

「…あれ？ 風斬さんは？」

24 正体不明編 エピソード（前書き）

かなり微妙な正体不明編になってしまいました！
：

24 正体不明編 エピソード

風斬氷華は人気ない路地裏に一人佇んでいた

近くにはワタルもいる

「良かったですか？」

氷華はワタルに問う

「何が？」

「私と、一緒に来て」

紅刃ワタルは風斬氷華と共に歩む事に決めた

それが彼の結論

「今更だよ、それを聞くのは…。言っただじゃん、俺は君を守るってさ」

彼は守る、と言ってくれた

こんな化け物である自分を全力で守る、と

得たものはある

けど失ったものもある

だから彼女は失踪という形で美琴達から去ろうとしたのだ

そしてそれにワタルがついていくと言って聞かなかった

嬉しさ半分、悲しさ半分といった感じだった

だけど美琴達にはもう会えない

自分の正体を知ったら、もう友達と呼んでくれないだろうから

「…っ、う…!!」

涙が溢れてくる

自分がああして接してくれた数少ない友達

もう会えないと思うと切なくて

苦しくて

「ワタル、っさん…!!」

顔をくしゃくしゃにしながらワタルに彼女は抱きついた

そして彼の胸板に顔を押し付け、声を押し殺してただ泣いた

ワタルはかける言葉が見当たらずただ抱き締めることしかできなかった

そんな時だった

じやり、とコンクリートをこするような音が聞こえた

「あ、いたいたー、風斬さん」

え、と風斬は涙で汚れた顔をあげる

その視線の先には美琴達がいたのだ

その更に後ろにはアラタと遼太郎が壁に背をつけていた

「やっと見つけたわよ、もー。ダメじゃない、何も言わずにどこかにいっちゃ」

「探すのに苦労しましたわ……。ふふ、二人きりで逢い引きなんて、紅刃さんも罪な男ですわね」

美琴が子供に注意するような感覚で言葉をかけて、黒子が茶化す

「そうですねー、寂しくなっちゃいますから……。いなくならないでください」

初春が軽く目尻に浮かんだ涙を拭う

「そうそう！ 風斬さんはもう友達なんだからね」

佐天も元気に言ってくれる

「な、なんで…!？」

涙で声がかすれる

それに美琴はさも当然といった様子で

「なんでって…、確かに貴女はちよつと体の作りが違つかもしれないけれど、それだけで友達を拒絶しようなんて思う？」

「…あ」

「…言つたじゃない、佐天さんが。私たちはもう友達なんだから」

その一言で

風斬氷華は救われた

………

あくる日

左翔太郎は一人歩いていた

「はあ…、学園都市でも、ペット探しは舞い込むんだなあ」

彼は依頼の遂行中

内容はペットの搜索

学園都市は広く、すぐ見つからないと学区中を探し回らないと見つからない程だ

「…ん？」

翔太郎はふと気づく

たまたま視線を横に向けると見知った顔がいた

紅刃ワタル

その隣には女の子「みたいな」人影

人影はよくわからないがワタルは楽しそうに笑っている

あの笑顔は恋人へ向けるような笑み

「…この都市も、捨てたもんじゃないぜ」

誰にともなく呟くと翔太郎はまた歩きだす

彼なりにこの都市を守る為に

EX 上条当麻の真実（前書き）

めっさ短いしめっさ駄文です

EX 上条当麻の真実

「…お前、なんで学園都市に帰ってきてんだよ」

「いや…、色々あつてさー」

そう言つて頭を左手で掻きながらベッドに上半身だけ起こしてる上条当麻はあはは、と笑う

ここは冥土帰し（ヘブンキャンセラー）が在籍している病院

先日の赤い男騒動が収まつてさあ休もう、と寮に帰ったら冥土帰し（ヘブンキャンセラー）に電話で呼ばれ今に至る

「その様子だと、旅行先でまーた不幸に巻き込まれたな」

「おつしやる通り。いや、上条さんのライフワークに確実に組み込まれてんぜ…。おかげでイタリア旅行が一日でパー…。とほほだよ…」

ぐだー、とうなだれる当麻

アラタはやれやれ、といった感じで首を振る

「…そうだ、当麻。一ついいか」

「ん？ なんだよアラタ」

…

「お前、何があつた？」

アラタが言つた途端病室の空気が凍つた

「な、何がつて…、見ての通り、俺は旅行先でトラブルに」

「違う。俺が言つたのは時折お前が見せる様子を窺うような行動の事だ」

「…え？」

「たまに友人間との会話で多々それがあつた。盛夏祭の時も、インデックスが俺の名前を喋つたのを安堵してたような表情が垣間見られたからな…。何かあつたのか？」

当麻は押し黙つた

ぎゅ、と布団を握り締めている

「あ、いや…、深い事情があるならいいんだ。誰だって人に言えない事あんだからさ」

アラタは苦笑して空気を戻す

そして背中を向けて部屋を出ようとする

「待ってくれ」

当麻の声が耳に入ってきた

「話しておきたい。そこまで見抜かれてるなら、いつそ打ち明けた方が身が楽だ」

そうして鏡祢アラタは全てを聞いた

上条当麻の真実を

.....

「...記憶喪失？」

早い話がそういう事らしい

彼はとある事情からインデックスを救い出した

しかしその代償として彼は記憶を失ったのだ

「...悪かったよ、今まで黙ってた。本当なら、真っ先に話すべきはずなのにな」

当麻は本当に申し訳なさそうに頭を下に向けた

「...バーカ。別にんなの責める気なんてさらさらねえよ」

アラタはさくくならない、と言わないばかりに当麻に言う

「記憶があってもなくても、上条当麻は上条当麻だ。違っのか？」

「...それは」

「そういう事だ。だから、困ったら俺を頼れ。迷ったら俺に話せ。出来るだけ力になってやるさ」

出来るだけ、と言ってる辺りがなんともアラタらしかった

「ぶ、あっははは！！ わかったよ、アラタ」

当麻もアラタに吊られて笑みを零す

思えばそうだ

・
・

記憶の欠落程度で崩れる関係ならば所詮それまで

記憶の欠落さえ笑い飛ばせる位がアラタなツルギらは本当の友達

また一つ、絆が深くなった…、気がした

25 バイトヘル（前書き）

今回はオリジナルなお話です

25 バイトヘル

「金がない」

そんな一言で今日の鏡祢アラタの一日が始まった

と言ってもお金がないのはいつもと一緒に珍しい事ではない

ではないのだが

「いつにもまして金がない」

先日風斬や美琴らに奢った為現在完璧に無一文

それに当麻も加わって二人してぐだー、とだらける

インデックスも吊られて床に寝ころがりながら、三毛猫をいじく
スライククス
っている

「当麻ー…日雇いでそれなりの給料でるバイト知らなーい…?」

「知るわけねーだろそんなウマイバイトなんか。…つかあんのかよ
んなバイトがよ」

「だが、そんなバイトを知ってそんな友人を俺たちは知ってるじゃないか、当麻」

「あー…アイツかー」

……

「…それで俺を呼んだのか」

つぶやいた声の主は南雲遼太郎

色々なところでバイトしている為詳しいかなー、と考えたアラタに呼び出されたのだ

呼び出したアラタ本人はインデックスと一緒に三毛猫をいじくり回している

「遼太郎なら心あたりあると思ってなー…、うりうり」

スフィックスの首もとをしゃわしゃわしてじゃれるアラタ

ちなみに当麻は台所で軽い昼ご飯を作っている

「…まあ知らない訳ではないな」

遼太郎がそう言うところアラタはガバツと顔をあげる

「マジで!？」

当麻が軽く作ったお昼ご飯をテーブルに持ってくる

意外にしつかりしたチャーハンだ

インデックスが待ってましたと言わんばかりに目を輝かせる

「それで、どんな場所なんだよ、そのバイト」

全員分のスプーンを片手に当麻が歩いてきて腰を下ろした

「教えてもいいけど、地味に忍耐が必要だぜ？」

忍耐？　と言われ当麻は怪訝な顔をした

「ああ。…結構答える仕事だ」

……………

遼太郎が指摘した場所に当麻とアラタは足を運んだ

「しっかし、どんなバイトなんだろうな、ちょっとだけワクワクしてきたぜ」

なんだかウキウキしてる当麻を尻目にアラタは頬を掻く

「何だかやな予感がすんなー…。ま、楽しんで金が入るなんて思ってもないけどな」

お前が言い出したのだが

そう言いたげな当麻の視線を苦笑でスルーする

「あ、アラタ、ここじゃないか。遼太郎の指定の住所って」

話してる間についたのかとある建物の前にアラタたちは立っていた

看板には

「しつじ、きつさ？」

.....

『お帰りなさいませ、お嬢様』

バイトとは執事喫茶での接客業もろもろ

当然かもしれないが結構カツコイい人たちがアラタたち二人の先輩だ

その中でも「中の下」くらいの当麻とアラタは

「お前が「中の下」って…おかしくね？」

不意に当麻がそんな事を呟いた

現在当麻が着ているのはスタンダードな執事服

元々スラッとしている為結構似合っている

「いやいや、当麻が「中の下」って評価も変だと思っぜ？」

アラタも同じ執事服

どこぞの借金執事が着てそうな服で、個人的チャームポイントはボタンの一番下を外していること（らしい）

「なんだよ、お前意外に人気あること知らないだろアラタ」

「そう言う当麻だって地味ーな人気誇ってんだぜ？ 不幸にめげず頑張る姿が可愛いって！」

「なんかやな評価だよそれ！ 嫌な気分じゃないけどさっ！」
「からんからーん、とドアが開く」

その刹那、会話を止めてアラタと当麻は声を揃えて言う

『お帰りなさいませ、お嬢様あ！』

.....

ところ変わっていつものファミレス

そこは美琴や黒子、初春、佐天がたむろっている

本来ならここにアラタもいるはずだが本人がバイトらしく来れない
為彼はここにはいない

そのせいか美琴はちょっぴりテンション下がりが気味

「御坂さん御坂さんっ、お昼ご飯は、最近人気あるこの執事喫茶に
しませんか？」

「執事喫茶？」

聞き慣れない単語を耳にし美琴は眉を潜ませる

「はい、本格的で料理も美味しいってモッぱらのウワサなんです」

「へえ……」

少なからず多少興味を持った美琴

「そうですわね。たまにはそういうところで食事するのも悪くないですわ」

「そうね。たまにはいいかも」

黒子がそれに同意し、美琴も賛同する

「じゃあ早速行ってみましょう。…執事かあ。きつとすごいんでしようねえ…」

執事という単語に期待の色を寄せる初春

「はは…。初春さんらしいね」

美琴はそんな初春を見て苦笑いを浮かべる

「ふふ…、お姉様、お兄様がなくて寂しそうですわね？」

そんな中黒子が含み笑いを浮かべて美琴を覗き込んだ

「な！？ ば、バカ！ べ、別に私は…アラタがいなくなつて…」

「あら？ わたくしは一言もお兄様の名前なんておっしゃっていないのに…」

「アンタがお兄様って言うてる時点でアラタしかいないでしょうが！！！」

そんなこんなで美琴たちはそのウワサの執事喫茶に赴く事になった
そこで意外な友人と再会する事などつゆ知らず

.....

その執事喫茶で現在バイト中の当麻とアラタ

一日で終わるつもりだったが、店長に「もう少しやってよ」みたいな事を言われ、いつでも来ていい、という条件の元執事喫茶のバイトを続けているのだ

「いや、慣れてしまえば楽しいもんだなあ」

テーブルを拭きながらアラタがつぶやく

「だな。未だにお嬢様って単語に抵抗を覚える俺だけだ」

「それは俺も同じだよ。…さって、休憩も終わりだ。始めようぜ、当麻」

「わかった。うし、今日も頑張るか」

からんからん

「お帰りなさいませ、お嬢様が…た？」

アラタの動きが止まる

今アラタの目の前には

アラタがよく知る女性たちがいたからだ

「…あ、アラタ？」

「美…琴？」

視線が重なる

まさかこんな形で本日アラタと出逢うなんて思わなかったのだ

「お兄様…、こんなところでバイトなさってたんですの？」

「アラタさん…執事服決まってますよお…」

黒子がびっくりし佐天がうつとりしている

「アラター…、って、御坂」

「な！？ あ、アンタもいるの！？」

何だかこのままだとヤバイ気がしてきたのでアラタは皆をカウンタ
ーに案内したのだった

………

「相変わらずアラタさんの執事服は決まってますね、ね？ 初春も
そう思うでしょ？」

「はい。以前水着の試作を試してた時に着てた執事服はかつこ良かったですねー」

初春と佐天がそんな雑談に華を咲かせてると当麻がメニューを持って歩いてきた

テーブル付近まで歩いてきてメニューを置くと

「ご注文がお決まりになりましたら、近くのベルを鳴らしてください」
意外にしっかりしている

その後「ごゆっくりどうぞ」と言ってそのテーブルを後にした

「あの類人猿、結構しっかりこなしますのね」

黒子の黒い発言

「わ、私もびつくりだわ…」

美琴も驚愕していた模様だ

「とにかくパパッと頼みましょう、私お腹ぺコぺコです…」
初春がメニューを手にとって開き中をみる

「…、」

美琴はポー、としながら思った

（アラタ…結構似合ってたな。執事服）

のろける美琴だった

.....

「あー緊張した...」

「いやいや嘘つけ」

裏側でのやり取りにて

「当麻だって、結構仕事形にハマってるじゃないか」

アラタは休憩用の椅子にぐたー、とまたれながら当麻にそんな言葉をかける

「そんな事ねーよ、お前だってカッコイいじゃねえか」

「うあー...男に言われても嬉しくねー...」

「おい！　なんだよ人がせつかく誉めてやってんのに！」

「よし、料理持ってこっぜー」

「無視すんなー！」

.....

その後は特に何もなく普通に事が運んだ

また時たまアラタと美琴の視線が合うとお互い照れて顔を逸らすばかりだった

時間経ってほぼ夕刻

当麻とアラタはバイトが終わりぐだー、と公園のベンチに座っていた

「…耐えた」

先に言葉を紡いだのはアラタだ

「ああ…耐えきった…」

一日で一年間のエネルギーを使い果たしたみたいだ

「けど、バイトも悪くないな…」

「働かざるもの食うべからずってな…、そだ当麻、お前インデックスのご飯はいいのか？」

その台詞を聞いた瞬間当麻の顔が青ざめた

「やつべー！ このままじゃまたインデックスになんて言われるかわからねー！ アラタ、悪いけど俺先帰るぜっ！」

言って当麻はシュダダダっ！ と猛スピードで走っていった

「やれやれ。いつも賑やかだな、当麻は…」

「アンタも結構賑やかだと思っけど？」

後ろ側から聞き慣れた声が聞こえた

「…美琴？」

「なんで疑問系なのよ…！！」

そこに立っていたのは御坂美琴だ

「つとに。…執事服、結構似合ってたわよ」

美琴がそっぽを向けながらそんな感想を漏らす

ちよつと嬉しい、と思ったアラタ

ふと周囲に他の面子がない事に気づき

「美琴、初春や黒子、佐天とかは？」

「初春さんと黒子は風紀委員のお仕事、ジャッジメント佐天さんはそれについてったわ」

「美琴は律儀に俺を待ってたってか？」

そう指摘さればっ！と顔が赤くなり

「…ど、どうだかねっ！」

相変わらずデレがないな

アラタはそんな事を思ったが急にデレた美琴もそれはそれでちょっと不気味だ

やはり美琴は多少のツンがあつてこそだ、と拳を握り確信する

アラタはゆつくりとベンチから立ち上がり美琴の隣を歩く

「…？」

「こんな日常が続けばいいのにな」

それは誰しもが考える些細な願い

叶いやすそうで叶えるのがとても難しいもの

「…この日常が続くかはわからないけど、私は別に、皆がいればそれでいいわ」

美琴はアラタの前に歩み出て振り向く

「黒子がいて、初春さんや佐天さんに、国法さんがいる…そして何より」

美琴はアラタの前に歩いてその瞳を覗き込む

「アンタがいるこの世界、この学園都市が好き。…これは何年経っても変わらないわ」

そう言つて軽く微笑む美琴

そんな美琴を見て心が温まるような感覚がした

「…ありがとう、美琴」

「なんか知らないけど、どう致しまして」

アラタにはにかんだ笑みを返し美琴はまた隣を歩く

しばらく歩くが会話はない

だがその沈黙は決して気まずいものではなく

むしろ心が安らぐ気分だった

そして同時に思う

皆が、美琴がいるこの「学園都市」^{セカイ}を守っていこう、と

そう改めて誓った

26 午前中のひだまり（前書き）

やっとあの人が出てきました

26 午前中のひだまり

九月の三十日

この日は学園都市全ての学校が午前中授業の日だ

理由は単純明解で、明日が衣替えだからだ

注文や採寸は大覇星祭の前後に済ませているから今日行つのはその受け渡しだ

また「慣らす」意味合いも込めて今日から冬服を着る人もいる

そんな中鏡祢アラタは完全に学校に復学し、現在は教室に座り吹寄から勉強を習っている

「だから、ここは…」

「あ、あー…はいはい、なるほどねー…」

結構な日数休んでいたから全く勉強がわからなかった

何とか一々三校時を消化し今は三校時と四校時の合間の休み時間

アラタは流石に白いスーツ姿ではなく、いつもに戻って制服だ

ただ一部を除いて

「…アラタ、その帽子って邪魔じゃないの？」

「邪魔だなんてとんでもない。この白いソフト帽は俺に力を与えてくれる。スーツは脱げててもこのソフト帽は脱げないな」

てんで呆れてしまう

けどそれがアラタか、と吹寄は自己完結してさて次の問題はとノートと教科書に視線を戻すと

がらん、と扉を大きく開け放って

「吹寄はいるかーっ!!」

と大きな声で叫んだのはクラスの三バカ「デルタフォース」の一人、上条当麻だ

その右側、左側には土御門、青髪が立っている

これまで色々なトラブルを起こしてきた（そのトラブルにはたまにアラタも入っていた）三人に対し吹寄は小さく溜め息を吐くと席から立つ

その刹那開口一番に

「一生のお願いだから揉ませて吹寄ッ!!」

ビキリ、と吹寄のこめかみに青筋が浮かび上がった

またアラタも「ごはっ！！」と吹き出し机に突っ伏した

そして一瞬で立ち直ったアラタは飛び上がっている土御門と青髪の顔面に一撃し、トドメと言わんばかりに上条当麻に踵落としを浴びせる

脳天に激しい痛みを訴えながらくわんくわんと当麻たちは地面を転がっていく

そんな空気を知ってか知らずか身長百三十五センチの先生、月詠小萌が入ってきた

「皆さーん。本日最後の授業はせんせーのバケガクなのですよー、てぎゃああ！？ ほのぼのクラスが一転、ルール無視のバトルフィールドになっっているですよー！？」

その絶叫にアラタは吹寄と二人声を揃えて

『世界平和の為です』

そう言ったのだった

ちなみになぜいきなり揉ませて、と当麻が言ってきたのは廊下で青髪が肩もみの通販カタログを見て、土御門、当麻、青髪の三人で論じて、ふと当麻が気づいて吹寄に肩を揉ませてくれるよう頼もうとしてたがいかんせん大事なところが抜けて変態な事を口走ってしまったのだ

故にアラタに殴られてKOしてしまったのだった

.....

とある車内

運転しているのは芳川桔梗という女性だ

彼女は以前新たにレベル6という分類を築こうとした【実験】を立案、実行に移した研究者グループの元一員である

「優しいではなく甘い人間」を自認している彼女の助手席には一人の青年、そして後ろの座席には一人の少年と幼い少女が座っている

「見て見て！ ミサカが入院してた間に、街の人たちの服装が変わってるって、ミサカはミサカは わぁ！？」

言葉の途中で投げられた

首根っこを掴まれて空いてる席の方にぼふ、と叩きつけられる

「テメエの服装が涼し過ぎんだバカ。つうか退院早々病み上がりの人間の膝に乗っかって外見てンじゃねエクソガキ」

そう言ったのは一方通行と呼ばれる学園都市のレベル5の第一位

アクセラレータ

今はとある理由で能にダメージを負い今まで入院していたがそれが大体治り、退院したのだ

「ヒドイ！ 病み上がりなのはミサカも同じなのにつ！ てミサカはミサカは 」

「あー、ほらそこまでそこまで」

このままだと不毛な争いに発展しそうなので助手席の男性が二人を止める

「心温まるケンカは滞在先についてからにしてくれよ」
その青年は浅倉了りやうという青年だ

何の因果か一方通行とそれなりに仲が良く一方通行の【実験】も手伝った事もある

無論彼もとある少年と探偵二人にぶっ飛ばされたが

「で、その滞在先ってのはどこだ？」

「さしあたっては、私の知り合いって所。君、今の学校辞めてしま
うのしょう？」

この街で学校を辞めるといふのは寮という住所を失うということだ
そんなリスクを冒してまで学校を辞めるといふ選択肢を選んだのは

「もうレベル6なんかに関わんのは御免だからな」

「これから会う人は、研究職じゃなく、きっと君の味方になってく
れるよ」

芳川はそう優しく呟く

対して一方通行は軽く息を吐いて窓の外を見て

「またこの手のバカが、一匹増えるって訳か」

そう呟きながら視線を前に戻した

.....

御坂美琴はコンサートホールの前にいた

待ち合わせ場所だ

「悪い、遅れたか」

そう言っただけで走ってきたのは鏡祢アラタだ

時間を見てみるとあまり遅れてはいない

それでもアラタは急いで、かつ走って来てくれた

その気持ちはちょっと嬉しかった

「別に大丈夫よ。あんまり待ってないし」

ふとアラタは美琴の手元に目をやった

学生靴とバイオリンケース

多分学校が終わった直後すぐにこの場所に來たのだろう

そう思うとやはり申し訳ない気分になってしまう

「それでも結構待ってたんだろ。お前の事だ。一時間くらい前に来てそうだし」

「うぐ」

地味に当てたので美琴は何も返せなかった

「お詫びになんか買ってやるよ。…別にモノで釣ろうとかはしてないからな」

「わ、わかってるわよそんなこと」

詫び、と言われて美琴は少し考えた

「じ、じゃあ、ちょっとお願いしたい事があるんだけど」

「お願いしたい事？」

.....

「彼女が、これから貴方たちの面倒を見てくれる人よ」

芳川は言うが一方通行の視線は全く違う場所を見ている

そして一言

「なんだ、これは」

「なんだアクセラ、黄泉川の顔を忘れたのかよ」

「違う、ソイツじゃねエ…、俺が言ってンのは、この説明不能の生き物の事だ！」

びし、と右手の杖で一方通行曰わく【説明不能な生き物】を指した

「せ、説明不能とは何ですか！ これでも私は先生なのですよー！」

説明不能な生き物とは月詠小萌の事である

だが元居た場所が場所だけに無駄に深く考えている一方通行

「細胞の老化を抑える研究は、もう完成してたって訳か…」

「あれ、おいアクセラ？ ないからね、お前が考えてる事はないから」

「かわいそうに…」

浅倉の声が遮られる

「きつと実験ばかりで、このままずーと自由時間とかないんだって、ミサカはミサカはそつと目にハンカチを当ててみたり…」

完全に無駄にシリアスに考えている

「先生の話聞いてくださいですっ！」

「あははっ！ つかみは完璧じゃん！」

そんな光景を目にした黄泉川は豪快に笑い飛ばす

「もう！　つかみの為に連れてきたんですかあ！？」

ぶーたれる小萌を軽く流しつつ

「早速君らを私のマンションに案内するじゃん。ちよっくら車を回してくるから」

そう言つて黄泉川は歩きだした

黄泉川が一方通行の隣を過ぎて少しの間があつた後

「イイのかよ」

一方通行が呟いた

「俺なんかを居候させてよ」

「ノープロブレム。部屋は余ってるしなんの問題も」

「そっちじゃねエ。…俺を匿うって事ア、学園都市の醜いクソ暗部を、丸ごと相手にするって事だ」

「だからじゃんよ」

「あん？」

「私の職業を忘れたか。アンチスキル警備員の自宅をバカ正直に襲つヤツはいないと思うけどね」

「死ンでから文句言っンじゃねエぞ」

「大丈夫だよん」

「お前の名前が、連中のリストに登録される事があつかもしんねエ」

「そいつらを更生させる事が私の仕事でね」

そして黄泉川は歩いていく

「…ち、これだからこの手のバカは始末に負えねエンだ」

一方通行が毒づく中浅倉はよく言うよ、と内心思った

浅倉は知っている

なんだかんだいいながら彼女と住む事になったって決まるとチエツ
クリストに一つ一つ印をつけて死角を潰そうとしたことを

どんなに小さな穴も埋めて襲撃の可能性を低くしようとしているのだ

それが意味するのは何が何でも守ろうとしている

そういうことだ

「…やれやれ」

素直じゃないな、と了は呆れながら溜め息をついた

27 平和な日

ロンドンのランベス宮はイギリス清教の最大主教アークビショップの官邸として用意された建造物だ

今は敷地内に観光地として解放されてはいるが未だに建物内部に一般人が入る事はおろか一切の情報も封じられている

簡単に言うと誰も内部がどんなのかを知らない

一般人にはあまり縁がない、故に徹底した非公開が怪しまれないこの建物はバッキンガム宮殿以上の魔術的防御網が張り巡らしてある館そのものが巨大な一つの装置である以上【罨を避けて進む】という侵入方法が一切通用しないという屁理屈をそのまま実現させたような設計思想を持っている

そのランベス宮も今は深夜の静寂に包まれていた

日本と英国では約九時間の時差がある

昼には比べられれば人員は減ったが警備レベルはグンと跳ね上がりなおかつそれを誰にも勘付かせないという【見えざる厳戒体制】のなか最大主教ローラースチュアートはバスルームにいた

「ふんふんふふーん……」

鼻歌が反響する

光に満ちたその空間を見ればランベス宮に憧れを抱き高貴なイメージを巡らせている連中は腰をぬかすだろう

バスルームと言ったがそこは二十メートル四方のサイズを誇る広大な空間だ

だがそれに反して大浴場というわけじゃなく小型のユニットバスが何十にもわたりぎっしりと配置されている

おまけにそれぞれの浴槽に【電気風呂】とか【マイナスイオン】とかなんか科学サイドの匂いがぶんぶんする機能ばかりだ

これらの風呂は学園都市がお近づきの印、としてお中元やお歳暮感覚でローラの所に送っている品々だからだ

現在ローラは修道服のスカートを大きくめくりジェット水流風呂の縁に座って足だけ浴槽に入れている

足湯用の洗面器な風呂もあるがローラはこの水流に足を当てるのが最近のマイブームだ

身長の数倍ある金髪は湯気を浴びて雨滴を受けた蜘蛛の糸みたいになつてるがこっちは後で整えるからさして問題ない

とりあえず、いまは足湯だ

「んー…至福のひととき…。さてさーて、足をほぐしたら今度ビリビリ電気風呂で全身を温めたるつかしらー」

そんな一日の疲れを癒やすローラの元へ

「ロオオルアあああああー!!」

巻き舌になりながら名前を叫び、ドアをぶち破る勢いでバスルームに突っ込んできた

ラフな格好にスーツを着崩した男、ローラの側近で唯一タメ口で話せる人物クロス「アラストルが侵入してきたことにローラはビクッ! と体を震わせた

足湯といえど彼女はスカートをめくり生足を露出しているのだ

おまけに結構普段から一緒にいるクロスだった為恥ずかしさも跳ね上がり慌ててスカートを下ろそうとしたがその急な動きにより足が滑って座ってた浴槽の縁から中に盛大にすっ転んだ

ざぱーん、と池に大きめの石を投げ入れたような音が広がる

それに対し報告書を片手にしたクロスは気にもしない

「報告書コイッに書かれてる事はマジか!? くだらないマヌケスキル発揮しやがって…。いいか、最大主教の一言は世界だつて動かす事もあんだから……、てか、ブクブク言っていないで答えるやコルア!!」

ブクブク言ってるのはジェット水流を顔に喰らって苦しんでるだけなのだが

ローラはザバァ、と勢いよく水面から顔を出すと

「な、何をいきなりレディの浴室に土足で踏み入れたるのよクロス！ い、いかにお互いを意識してると言っても、いや意識してるからこそこういう場面を見られたるは」

「いいから、答えるよ！」

「ダメよクロスー！ フェイズエッジを水面にさすればお風呂が煮えちゃう！」

転がるようにローラは浴槽から脱出する

直後浴槽からじゅう！！ と蒸発するような音が聞こえた

濡れた床の上で水槽の中でエサをもらう魚みたいに口をパクパクさせて呼吸してる最大主教は長い髪が繭のように全身に絡みついてなんかモンスターっぽい

クロスは頭を抱えながら

「早く報告書^{コイツ}を再読して詳細を説明してくれ。俺は早いとこ寝たいんだ……」

だけどローラは聞いていない

黙ってるローラを怪訝に思ったクロスはまたローラを見る

「先ほどのお湯で修道服が肌に張り付きて淫靡なる肢体が露わになりて……！ いけなし、あちらを向きてクロスっ！ 私の肌着は何人にも見せるつもりはなしにつきなのだから！」

両手で体を抱きながらくねくねさせるローラにクロスは

無言でファイズフォンを取り出し

555と入力して

ベルト代わりに付けてあるファイズギアにセットした

>COMPLETE<

電子音声にびく、と体を震わせたローラはゆっくりと目を開けて目の前の事象を確認する

ファイズはカメラ型のデバイス、「ファイズショット」を絶賛装着中で、レンズ部分にファイズのミッションメモリをセットし終わったばかりで

「いっぺん死ねやこのバカ野郎おおおお!!」

「ダメよクロスー! グランインパクトを私に当てれば私が消えちゃうー!!」

逃げ惑うローラをファイズが追う

なかなかシユールな光景だ

眠れない夜はまだ続く

.....

一方通行らは黄泉川愛穂の住むマンションに来ていた

結構な高級マンションっぽい

ロック機能もカードを握る指先から指紋や生態電気信号パターン等のデータをやりとりしているのだ

部屋に入ると4LDK

家族向けで一生かけてローンを払い続ける規模だ

結構キレイでテレビ、リモコン、コンポなどピシッと丁寧に位置取りされてある

「へえ…。結構キレイに掃除されてんだな」

浅倉がそんな事を言うのと打ち止め（ラストオーダー）はソファにダイブして

「すごいすごいっ！ ホコリもほとんどないかも、ってミサカはミサカはソファに飛び込みながら誉めてみたり」

そんな打ち止め（ラストオーダー）の明るい声に反し芳川は呆れたような声色で

「貴女、また勤め先で始末書を書かされたわね…」

ギクリ、と黄泉川が大きく揺れた

「あは、あはは…。何の事じゃーん？」

「？ 桔梗、どういふこと？」

「彼女、昔から問題が起きると部屋の整理整頓をする人間なのよ。後先考えずに片しまくるから、後になって部屋の鍵が見つからないとか言ふ事態にもなるの。気をつけておきなさい」

「それが次の仕事を一緒に探してる恩人に対する言葉じゃなかよー」

黄泉川と芳川はどうも二人きりだと話す時若干子どもっぽくなるな、と浅倉は思った

あるいはかなり昔からの付き合いがあるのだろう

「その癖が抜けてないって事は、台所のほうも相変わらずね」

「おーいっ！ 整理整頓の悪癖は認めるけどそっちを指摘されるのは癪しやくじゃんよっ、桔梗だって私が出した料理美味そうに食ってたじゃんか」

「作り方さえ知らなければね」

？を頭に浮かばせて顔を見合わす浅倉と一方通行、打ち止め（ラストオーダー）

黄泉川が芳川を連れてキッチンに行ったので彼らも後に続く

黄泉川宅のキッチンには様々な調理器具が並んでいた

水蒸気を利用したスチーム電子レンジやAI搭載の高周波食器洗い機など、メカメカしたものが集結している

だけど黄泉川はそういうものを使わないらしい

放っておかれてますと言わんばかりな調理器具より目立つのは四台五台と置いてある電子炊飯器

オマケに全て稼動中

一方通行はウンザリした顔で

「…一人一台つてか。フザケてんのか白米マニア」

「違う違う。炊飯器つてのは、炊く、煮る、蒸す、焼く。何でもありじゃんか。だからこっちのがパン焼いてて、そっちはシチューを煮込んで、あっちのは白身魚を蒸してんの」

なんとなく芳川の言いたいことがわかってきた

すでにそれを知る芳川は変わらない光景に溜め息を吐き

「怠け者」

「変な動物みたいな評価は止めて欲しいじゃんよ。…そんなに悪いめのかなあ…ちゃんと味と栄養と満腹感は得てるんだから問題ないじゃん？」

「はあ…。貴女は一度、苦労して作る楽しみを覚えた方がいいわね」

「…桔梗が言つとあんま笑えないな」

浅倉の言葉に軽い苦笑を示す

こんな日常もありかな、と浅倉はふと考えたのだった

.....

「あ。あつたあつた。ここよここ」

美琴に連れられやってきたのは地下街だ

以前赤い男がやってきて色々と破壊されたがもうその爪痕は見当たらない

美琴が指を指したのは携帯のサービス店だ

大きさは大体コンビニエンスストアの半分ほど、ガラスウィンドウ越しに横一線に並べられたカウンターと椅子、マガジンラックに収まっている薄い機種カATALOGしかない

だが美琴に連れてこられたのだから何かしら意味があるのだろう

「アラタ、ハンディアンテナサービスって知ってる？」

「ハンディアンテナサービス？ たしか、個人個人の携帯がアンテナになるってヤツだっけ。近くにアンテナがなくても通話ができるってヤツ」

「そうそう。私さ、それに契約しようと思ってるのよ。ペア契約にすれば、ハンディアンテナだけじゃなく、その他の通話料も安くなるみたいだし」

「…ペア契約？」

「さらに今なら、ラブリーミトンのゲコ太ストラップが貰えるのよねー」

「…は？」

ようはストラップが目当てなのだ

「やれやれ。…らしい、と言えらしいな」

「訳わかんない事言っでないで早くいくわよ、ゲコ太が私を待っているっ！」

美琴はアラタの手を引きながら店内な入っていく

そんな美琴を見ながらアラタは

（変わらないな、本当に）

………

当麻とツルギは同じく地下街に遊びに来ている

発端はツルギが当麻の部屋に来てインデックスに留守番をさせ、地下街に来た所存なのだ

「てかいきなりやってきてなんだよツルギ」

「そうカリカリするなカーミンジョン。デパ地下のタイムセールも

見逃せないだろう」

「む、そりゃあ確かに…。よっしゃ、いっちょ安いのいっぱい買って、インデックスを喜ばすとするかっ！！」

「うむ、その通りだカーミンジョン。さって、まずはどこに行って何を買おうか」

平和な日はまだまだ続く

……………

《今ミサカはミサカの下位個体と追いかけてこしてるのってミサカはミサカは現状報告してみたり。今すぐは無理だけど晩御飯は作っておいてほしいかもってミサカはミサカは注文も出してみる》

留守番電話から流れたのはそんな音声だった

そんな音声に苛立って一方通行は杖で電話を破壊しようとしたが浅倉に止められた

能力がなければ今の彼はバタバタ暴れる程度の力しかないのだ

ぜーぜーと荒い息をしながら

「…心の底から鬱陶しいガキだ」

「人間関係なんてそんなもんさ」

「んじゃ、探すしますか」

黄泉川は留守番電話のUSBメモリを抜きながら

「どうも屋外みたいだったし、あの子の後ろから聞こえてくる物音を解析できりゃあ場所を探る事も出来るじゃんよ」

「愛穂…、それ職権乱用じゃないかしら」

「迷子の搜索と発見も警備員アンチスキルの一つ。問題なしじゃん」

「…何でコイツらは楽しそうな顔してんだ」

「さあな」

浅倉のそんな一言と共に、打ち止め（ラストオーダー）搜索網が展開された

28 過ぎ行く日常

午後五時

アクセラレータ

一方通行は冷房の効いたマンションから出てアスファルトに杖をつく

数歩後ろには浅倉了もいた

二人は結局いつまでも帰ってこない打ち止め（ラストオーダー）を探すことになった

「んー、こりゃ一雨振りそうな予感だな」

浅倉が天気を見ながらそんな事を言う

黄泉川は車で別の場所を搜索

芳川は留守番だ

探している時に打ち止め（ラストオーダー）が帰ってくる可能性も捨てられない

その場合鍵も暗証番号もない打ち止め（ラストオーダー）は玄関前で立ち尽くすことになるからだ

最も、立ち尽くすだけで収まるならいいが

「あのガキがどこにいるかは、大雑把に掴めたンかよ」

「黄泉川の情報によると、地下街にいるっぽい」

「…ア？ アイツ事件でもねエ迷子探しに解析機材使ったのかよ」

うんざりそうに一方通行は溜め息を吐く
アクセラレータ

「で、こつから地下街にいけないのか」

「ま、ひとまずはな」

そこで会話が終わる

それなりに長い付き合いだ、だいたい言いたいことはわかっている

ある程度歩を進めた所で浅倉が問うた

「いまだに、他人に好意向けるのが怖いのか」

「…なんだ、また随分と楽しい話題だなア。散歩の肴にゃピッタリだ」

「まあな。アンタは打ち止め（ラストオーダー）の好意は受け入れてるけど、自分からあの子に好意を向けることを恐れてる。ソイツは結構、危ないからな」

「…、」

アクセラレータ
一方通行は黙る

唯一彼の事情を知る浅倉の言葉をただ聞いた

「…好意を向けるなンぞ不可能だ。虚しいンだよ。一億の責任に対して一円返した所でなンになる。利子だけで食い潰される好意なンぞ払う気もねエ。考えるだけで馬鹿馬鹿しい。全てを払い終えて日差しの中で笑ってる光景なンてよオ」

無様な声色

浅倉はしばらく黙る

そして告げる

「どんなに無様でも、払い続けるしかないのさ。いつか道が開く」

「笑えるな。微笑ましくて顔が歪ンじまう」

一方通行の力は破壊しかない

破壊しか生み出せない

だが

それでも

《もしも》と思った事が何度あるだろう

今からでも遅くないのなら

…出来る訳ない

誰に言われるまでなく、その力を行使し続けた自分自身が誰よりも

それでも

「くだらねエ」

「その積み重ねが、責任を返済してくのさ」

浅倉はそう告げた

誰よりも一方通行を知る者として

.....

風斬氷華は学園都市を歩いている

地味な少女だ

腰まである長い髪は自然のまま、と言えば聞こえは良いがそれは手を加えていないからだ

だが彼女に起きている不自然な現象がより注目を浴びる

それはノイズ

ひっそりと咲く小さな花のような雰囲気を持つ少女はその輪郭が偶に歪む

受信電波が悪いテレビみたいに

ザザ、と耳障りな音を立て

グニヤリ、とシルエットが崩れまた元に戻っていく

氷華はそれでも街を歩く

普通なら大騒ぎだろうが周囲は《注目を浴びる》程度でしかない

ここは科学と超能力の街だから

「氷華」

そう言って走ってきたのは紅刃ワタル

氷華の大切な人であり、またワタルも氷華を大切な人とお互いを想い合っている

「…行こう、皆が見てる」

「…はい」

氷華はわずかに頬を染めながらワタルの手を握る

その光景を周囲はひそひそと訝しむ

だが氷華は構わないと考えた

ワタルは受け入れてくれる

一番大切な部分も含めて

.....

上条当麻はベンチに座り盛大に溜め息をついていた

「く、くそっ……！」

そして齒を食いしばる

己の無力を痛感した

「ちくしょお……！」

非力を嘆いた

友人さえもなくしてしまった

「俺は……！」

彼は叫ぶ

「おばちゃん達には、勝てないのかぁ……！」

上条当麻

つい先ほど安売りのバーゲンにて、そこを戦場に行っているおばちゃん達に大敗した

友人であるツルギはおばちゃん達のこつたこたに巻き込まれはぐれてしまったのだ

「くそ…、バーゲンのおばちゃん、かなり強敵だぜ…！」

ぐだー、とベンチにうなだれていると

「何を莫大な疲労に肩を落としてるの？　ってミサカはミサカは癒し系として背中に張り付いてみたり」

「おわ！！　な、なんだあ！？」

背にのし、という重みが伝わり背中を見ると御坂をちっこくしたアホ毛が特徴的な女の子が張り付いていたのだった

……………

なんでこんな事になってるんだろう、と浅倉は一方通行と一緒に肩を落としていた

ここは地下街に入っすぐそこ、といったファーストフード店だ

オープンスペースのテーブルの一つに真っ白い修道服を来た少女がべちゃー、とテーブルに突っ伏していた

おまけにその周辺にハンバーガーやらポテトやらサラダとかに埋もれていた

念のため言っておくがこれらは全て一方通行が買い与えたものだ

少女は一銭もお金を所持していなかった

そもそもなんでこんな事になったのか

きっかけは一方通行と浅倉が地下街に入ろうとした時に入り口にぐべちゃー、とぶっ倒れていたのだ

とりあえず空腹であろうシスターを起こして一方通行が財布を投げつけると「あれ食べたい全部食べたい」などフザけた事を抜かした為今に至る、ということだ

因みにこのシスター、両手で小さい三毛猫を抱えてたのだが、お腹が減ってないのかハンバーガーに興味を示してなかった

どっちみち細かく刻まれたタマネギが使用されていたのでダメなのだけど

地下街に迷い込んだネコと井戸端会議みたいにニャーニャーと鳴きあっている

「…馬鹿げてやがる。あのクソガキ相手にだってここまで疲れたりしねエぞ…」

「もが？」

「いちいち動き止めてねエで一気に食べ。んで俺に何か言う事あんじゃねエのか」

「うっくん。うん、ありがとうね」

「ひ、一言か…やるなシスター」

これは大変な人と遭遇した

日頃からこのシスターの相手をしている知人にはご冥福をお祈りしたい

「えとね。私の名前はインデックスって言うんだよ?」

「…それより、味わかるのかそれ」

「とうまを捜してただけど途中でお腹が減っちゃってね。というか、お腹が減ったからとうまを探そうと思ったんだけど」

口の周りにソースがついていることにも気づいた様子はない

こういうところが打ち止め（ラストオーダー）とよく似ている

「…チッ」

一方通行は舌打ちするとポケットティッシュを取り出してインデックスの顔面に投げつけた

なんだかんだで面倒見なんだから、と浅倉が思っていると今度は彼女はポケットティッシュの内包からティッシュを取るのに悪戦苦闘してるのを見て軽く苦笑をこぼす

そんな光景を見ながら一方通行は携帯の電源を入れてディスプレイに打ち止め（ラストオーダー）の顔写真を表示させ、それをインデックスの方に向けながら

「オマエ、こオいうガキを見たことあるか?」

「ないよ」

「そ、即答: :?」

恐るべき速さだった

しかし興味がなくて言った訳じゃなく妙に自信に満ちていた

「私は一度見た人の顔は忘れないから間違いないと思うけど」

「あ?」

一方通行は軽く眉をひそめたが彼女はハンバーガーをたくさん食べて満足なのか説明する気はないらしい

「いやー、でも良かった。もう一回言うけど本当にありがとうね。これでお腹の事を気にせずとうまを探しにいけるし。お腹がいっぱいになっちゃったからとうまも探す理由も薄くなっちゃった気がするけど」

「あアそオカよ俺らは手伝わねエぞ」

「? あなた達なにやってる人? 忙しいの?」

純粋なインデックスの問いに浅倉は苦笑を浮かべつつ

「生憎、ね」

彼女も人捜しなら、こちらも人捜しなのだ

.....

人通りデートを楽しんだアラタは今晚夕食と一緒に食べようという話に収まり、現在は一旦別れ地下街を練り歩いていた

白いスーツに白いソフト帽、というかなり異例なスタイルだがこれでも一応対魔力防壁を施してあるのである程度の術式は問題ないのだ
まあ最近では私服として定着してきたが

自販機で烏龍茶を購入しちびちびと飲みながら歩いていると
ばちーん、とコントで聞いたような音が耳に入ってきた

音の方に目を向けると

我が級友、上条当麻と

御坂美琴の幼少時代みたいな少女がいた

「…当麻、ついにそんな少女まで…」

「違うから！！　ちょっと悪戦苦闘してただけだから！！」

いいながら当麻は少女のゴーグルと格闘していた

かけるゴムの部分がやけに伸びる

確かにこれはてこずりそうだ

「どれ、俺もちょっと手伝ってやるよ」

「お、助かるぜ」

その後ゴムと格闘すること三分

いい感じにゴムが調節されたゴーグルをかけた少女がいた

「おおー！！　ってミサカはミサカは感嘆な声を上げながらくるくる回ってみる！！」

くるくると回る少女を見ながらアラタは

「知り合いか」

「いや、俺もついさっき知り合ったんだ。打ち止め（ラストオーダー）って言うらしくてな」

「打ち止め（ラストオーダー）って…偽名？」

「触れない方がいいぞ。後々面倒くさくなるかもだ」

そんな会話をしているところくるくる回っていた打ち止め（ラストオーダー）はピタリ、と動きを止めて

「あのね、ミサカはそろそろ帰らないといけないの、ってミサカはミサカは残念なお知らせしてみたり」

「あー、ま、時間が時間だしな」

時計を見ると結構いい時間帯だ

子供は確かに帰らないと親が心配するだろう

「本当はもつと一緒に居たかったんだけど、ってミサカはミサカはしょんぼりしてみたり。そっちの白いお兄さんとももつと話してみなかった、ってミサカはミサカは胸中を吐露してみる」

打ち止め（ラストオーダー）はゴーグルに両手をやりながら

「でも、あの人達は心配すると思うんだ、ってミサカはミサカは思い出しながら先を続けてみたり。あまり遅いとミサカを捜すために街に出てくるかもしれないし、ミサカも迷惑はかけたくないから、ってミサカはミサカは笑いながら言ってみる」

アラタはそれを聞きながら思った

多分その人は良いヤツっぽいな、と

「…弱いんだよ」

彼女は続ける

「いっぱい傷ついて手の中のものを守れなかったばかりか、それをすくっていた両手もボロボロなんだ、ってミサカはミサカは断片的に情報を伝えてみたり。だからこれ以上負担をかけたくないし、今度はミサカが守ってあげるんだ、ってミサカはミサカは打ち明けてみる」

「…そっか」

アラタと当麻は言ってる事の半分も理解出来ていないが当麻は頷いた
アラタも声には出さずゆっくりと首を縦に振る

打ち止め（ラストオーダー）の言葉に嘘偽りは全くない

良いヤツっぽい、ではない

きっとそいつは間違いなく良いヤツだ

バイバイ、と手を降って走っていく打ち止め（ラストオーダー）
を二人はしばらく見守っていた

終電の時間が迫っているせいか慌ただしくなり始めた地下街の人混
みをすり抜けて彼女の体はあつという間に見えなくなった

「ん？」

ふと当麻は視界に見覚えのある人物を捉えた

「彼女」は近づいてくる

.....

「あ、とうまだ。あらたもいる」

傍らにいるインデックスが動きを止める

「インデックスが捜してた人？」

「うん」

浅倉は一方通行と共にそちらに視線を向けるが人混みでそれらしい人影は見当たらない

それ以前にこの状況で誰を差しているのかもわからない

インデックスは一方通行の顔を見上げてくる

一方通行は言う

「行けよ」

「でも、あなた達の知り合いは…」

「大丈夫、こつちも今見つけたから」

浅倉が言葉を投げた方向もインデックスと同じ前方

二人は彼女の名を知っている

それが本名なのかわからない

だが呼び名がそれだけなら間違いなくそれが彼女を示す名前だ

だから言う

「ラストオーダー!!」

一方通行に呼ばれた事に気づいた打ち止め（ラストオーダー）はさらに走るスピードを上げていく

本当に嬉しそうな表情が顔に張り付いている

それを見ていた浅倉の横でとん、と小さい音が聞こえた

「じゃあいくね。ありがとう」

それだけ言うと

「とうまー！ あらたー！」

軽い足音に力がこもる

ほんの短い間行動を共にした彼女は人混みの向こうに走っていく

インデックスは振り返ることはない

ラストオーダーが振り返らないように

二人の少女は交差し、すれ違い、互いが互いに気づかないまま距離を離す

それぞれが行くべき場所へ戻っていく

打ち止め（ラストオーダー）が一方通行達の所に飛び込んでくるまで十秒もかからなかった

「ただいまー、ってミサカはミサカは定番の挨拶を試みたり…、
て痛っ！　なんで無言かつ連続でチョップするの！？　ってミサカ
はミサカは頭を押さえて嘔泣きしてみる！」

とりあえずチョップを終えた一方通行に変わり今度は浅倉がチョッ
プされた所をなでなでし始める

「うー、ってミサカはミサカは頭を撫でてみたり…」

「今まで何をしてたの？　ダメじゃん心配させちゃ」

「遊んでもらってたの、ってミサカはミサカは正直に答えてみたり」

へー、と浅倉が頷くなかシスターがどうなったか少し気になったの
でもう一度人混みをみた

だがそこから得られるものは何もなかった

ただ漠然とした「人混み」があるだけだ

いつも、通りに

29 佐野充（インペラー）と木原数多（けんきゅうしゃ）（前書き）

佐野充の「充」は意図的に変更しています

29 佐野充（インペラー）と木原数多（けんきゅうしゃ）

「あ。雨が降ってる、ってミサカはミサカは夜空を見上げてみた
っ」

打ち止め（ラストオーダー）は真っ暗になった街の中で雨粒を掌で受けている

この学園都市は最終下校時刻を過ぎると電車はおるかバスもなくなる為ほとんどの住民は面からいなくなる

残ってるのは今日は帰らないでいいや、と考えている気合の入った夜遊び派だけだ

パラパラと雨が降ってる

傘を差すほどではない天候の中打ち止め（ラストオーダー）は楽しそうにせわしなくうろつろしている

それを一方通行は
アクセラレータ

「鬱陶しいからその辺で固まってる」

「できればお月様が見たかったのに、ってミサカはミサカはちょっとしょんぼりしながら踊ってみたり」

ちよろちよると動く打ち止め（ラストオーダー）を浅倉が確保する頭のとっぺんをホールドしながら

「ダメだろ、また捜しにいく体力もうないんだから…」

軽くなだめながらそんなこと言う浅倉は本当に疲れたような表情だ
打ち止め（ラストオーダー）は静かに頷いてちよろちよろはしなく
なった

ただ先を走ったりうろろはする

「やれやれ。元気がいいというか何というか」

「面倒臭エ、の間違いだバカ」

言いながら溜め息をつく

慣れとは恐ろしいものだ

今ここにある環境を平然と受け入れて

あまつさえ不満すら漏らす自分自身は一体何様だ

あれだけのことをしたのに

ここに立っていられる事さえ奇跡なのに

「痛っ！ … 転んだー、ってミサカはミサカは地べたで報告してみ
たり」

「単なる泣き言だろオがよ」

「擦りむいたー、ってミサカはミサカはちょっと涙目になりながら掌をじっと眺めてみる」

浅倉が屈み傷を見ながら

「んー…、あ、確かに。ちょっと消毒が必要な、これは」

「…そのベンチで座って待ってけ」

本当にウンザリだ、と言わんばかりの表情でバス停のベンチを指差しながら一方通行が杖をつきながら歩きだした

「…じゃ、一方通行を待ってようか」

「おっけー、ってミサカはミサカは頷いてみる」

………

屋根がついたバス停で一方通行を待つ

なんだかんだで一方通行は優しい

悪く言ってしまうと過保護なのだが…

本人に言うとは間違いなく挽き肉になってしまいそうなので絶対に言わない

「今日会った人ね、とってもユニークだったんだよ、ってミサカはミサカは報告してみたり」

「今日会った人？　どんな人かな」

「んつとねー、頭がツンツンしてて、色々とデリカシーがないんだ、
ってミサカはミサカは記憶を頼りにイメージを生み出してみる」

…　なんか主人公みたいな人だなあ、と思った

打ち止め（ラストオーダー）も個性的だけど、自分たちが出会った
インデックスもかなり個性的だった

…　食べる量は尋常じゃなかったが

そう思考してるとなにやら左側から変な物音が聞こえた

浅倉はちよつと待ってて、と打ち止め（ラストオーダー）に言っ
てベンチを立つ

そしてはて、とまた考える

一方通行が遅いな、と

確かに一方通行は杖について歩く為結構遅い

だがそれでも遅過ぎる

そう考えた所で

頭に痛みが疾った

「が…！？」

そのまま顔の横に蹴りを入れられて盛大にすっころがる

「はいはい、悪いね浅倉さん？」

人を小馬鹿にしたような声色

「てめ…！！ 佐野…！？」

「だいせいかい」

軽い調子で転がる浅倉に蹴りを打ち込む

「がつ…、は…！？」

「ハウンドドッグ 獵犬部隊の下っ端さん」

佐野の点呼に何人かの黒づくめで武装された者が近寄ってくる

「打ち止め（ラストオーダー）を回収、んで木原さんのトコ持ってる」

「この男はどうします」

「適当に蹴りとか入れてその辺に放置。銃器も殺さない範囲なら許可。じゃ、あとよろしくね」

サラッと指示し佐野充は歩いていく

「んー、いくら貰えるかなー」

彼の行動理由は金

ただ、それだけ

.....

濡れる地面に転がり雨粒を体に受けながら浅倉はゆっくりと立ち上がる

（ハウンドドッグ
（猟犬部隊……？）

その部隊の事ははっきり言ってわからない

だがこれだけはわかる

アイツらは敵

恐らく一方通行の帰りが遅いのも必ず関係しているはずだ
アクセラレータ

そして奴らの目的は

打ち止め（ラストオーダー）

浅倉はゆっくりと内ポケットから紫色のデッキを取り出す

奴らは佐野充と話していて気づいていない

だがまあ、奴らの末路は決まっている

「ブチ、殺す」

現れたVバックルに無言でデッキをセットする

鏡の割れるような音と共に浅倉の姿が変わる

王蛇…

それが今の浅倉の姿だ

佐野がいなくなり、かつ突如として現れた王蛇に驚きを隠せない^ハ
ウインドトック
犬部隊の隊員がサブマシンガンを構える、が

王蛇のほうが早い

瞬時に伸びた王蛇の掌が隊員の一人の顔を掴み思い切り地面に叩きつけたあと

躊躇なく「踏み砕いた」

グシャア！！ と表現し難い音が^{ハウントトック}猟犬部隊の耳に届く

その後、一方的な蹂躪が始まった

.....

^{アクセラレータ}
一方通行は地面に突っ伏していた

傍らには自分のよく知る男がいる

名を木原数多

一方通行に関わった研究者の一人だ

「武器つてなあ大雑把な方が効き目が高い。ナイフよりチェーンソーの方がエグいみてえにな」

一方通行は喋れない

木原に殴られ踏まれて大敗したからだ

「木原さーん」

また別の声が聞こえた

「ん？ んだ佐野」

佐野は自分の後ろの辺りを指で指しながら

「回収完了です」

一方通行もかろうじて顔を動かしその方向を見る

百メートル離れた場所

その先に

黒づくめの男二人に二の腕を掴まれて

ダラリ、と手足を揺らす、あの少女がいた

「あーあー。ありやもう聞こえてねえかもな。つか一応「本命」は生け捕りってハナシだろ。こんなんで始末書なんざ真っ平だぜ」

ふざけんな、と一方通行は呟いた

彼女はまだ生きている

もし死んでいるなら代理演算に頼っている一方通行にも影響が出るはずだ

（確証なンかねエよ…！）

一方通行は葉を食いしばる

（あのガキが死んだら影響が出るかどうかンざ知らねエよ…！試そうと思つた事もねエからわかる訳ねエだろオがよオ…！」

会話の内容から、木原たちの狙いは打ち止め（ラストオーダー）だどこに連れて行くかなど知らないが、そこらの自動車にでも押し込まれたら、

もう終わる

あの少女は再び血と闇にまみれた世界に戻される

そこから帰ってくる可能性は

ゼロだ

（やら、せるかア…！！）

地面に指を這わせ

ボロボロの体に力を注ぐ

「打ち止め（ラストオーダー）アアアアアアッ！！」

顔を上げて叫ぶ

ぴく、と少女の肩が僅かに動いたような気がした

倒れたまま腕を振り上げる

いま木原らを倒すことは考えてはならない

もつと優先すべき事がある

「アアッ！！」

歯を食いしばり手をアスファルトへ叩きつける

破壊音が響き一方通行は風を掴む

そのベクトルを操作する

「ちい!!」

木原が舌を打つ

風の槍は木原と佐野の横を抜け打ち止め（ラストオーダー）の元へと突っ込んだ

風速およそ百二十メートル

打ち止め（ラストオーダー）は十メートル以上のビルを飛び越え風景の陰へ消えていく

一方通行の喉から変な音がした

血の塊が吐き出され彼はまた雨に濡れる路面に落ちる

「あらー…派手に飛ばしましたねー」

「全くだ。ったく、ヤード単位で人間飛ばすんじゃないやねーよなーもう。飛距離抜群じゃねーかよ。誰が回収すると思ってるんだ。俺はやんねーけどな」

「どうしますか」

黒い装甲服に身を包んだ男たちの一人が指示を仰ぐ

木原はボリボリと頭を掻きながら

「あー、あれだ。班を三つに分ける。本命を追うのが一班だ。二班は俺らんとこに残れ。後始末とかその辺で潰れてる部下の回収とか色々あるしな」

「しかし、最優先命令は最終信号の捕獲にある為、班の」

「おや」

木原はキョトンとした顔で部下を見る

そして尋ねる

「お前さ。この「ハウンドドッグ獵犬部隊」に最近補充されたヤツだろ」

「え、あ、いや…」

「いいんだいいんだ、別に探ろうって訳じゃねえんだ。ただルールがわかってねえなら教えてやる」

木原は軽く咳払いして

「いいか、てめえらはクズの集まりだ。人権なんてモンはねえ。クズの補充なんざいくらでも効く。大事なだあいじな作戦を邪魔すんならぶつ殺しても構わねえんだよ。分かるかな。てめえ、今一度死んだぞ、確認するぞ、わかってんのか」

体を伝う雨粒の感覚が消え、声をかけられた男の不快感すら消滅する

思わず部下が一步退いたのを見て木原は頷いた

「よし、わかりやいいんだ。質問を受け付けてやる」

「え、ええ……。最終信号は生け捕りとの事でしたが、ああなってしまつと……」
ラストオーダー

「その辺はこのガキだつて考えてんだろ。どつかの川に落としてるとか」

「水面の場合、最終信号が氣を失っていた事を考えると、溺死の危険性も……」
ラストオーダー

その部下がそう言つと佐野がバシ、と殴りながら

「馬鹿。着水のショックで覚ますでしょう。クッションになりそうなのをピックアップしてその近辺を調査。わかった？」
了解、という声が響き散り散りとなつていく

木原と佐野は水溜まりに転がる一方通行を見て

「こいつはどうすんですかい」

「モチ殺すよ。この手の努力しちやってるヤツ見てるとイライラすつからさあ。こういう追いつめちやう派の根暗な自己満足野郎は今殺した方が無難だよなあ」

軽く笑つた佐野が木原に向かつてハンマーを投げ渡す

「君も馬鹿だよなー？　せつかく不意をついたなら殺さないと。第一位も凡ミスかな？」

佐野は笑いながら地面に倒れる一方通行を毒づく

「…黙れ…」

吐き捨てるように一方通行は言う

「クソツたれが。オマエらにゃ、一生わかンねエよ」

「あつそ。じゃ殺すけど、今のが遺言って事でいいんだよね？」

くそ…、と一方通行は呟いた

このままでは打ち止め（ラストオーダー）は捕まってしまう

助けを一瞬期待したが答えは分かりきっている

来るはずがない

みんな笑ってみんな幸せ

そんな幻想など起きるはずはない

（誰か、起きろよ、幻想…、^{ラッキー}誰か、誰でもいいから、あの、ガキを…）

みっともなく彼は思う

届くはずないその願いを

ハンマーが振り下ろされる

その寸前

「そこで何してるの？」

あ、と木原は動きを止める

佐野もぽかんとしながら声がした方を見る

その彼女は

その名前は

.....

「またムサシノ牛乳買ってこいつて？ 人使い荒いぜ、最近」

>文句言わないの。今まで抜けてた分、雑用や諸々で取り返す事。
わかった？<

鏡祢アラタは現在電話をしている

ちなみながら電話だ

インデックスを探しながら、国法と電話している

なぜインデックスを探しているか、と言うと

どうやら当麻たちと合流する以前に誰かに厄介になっていたらしく、
その際にポケットティッシュを借りたらしく、それを返す為、全力
疾走したので手分けして捜すことになったのだ

>…ねえ、今日御坂さんと一緒に出かけたの？<

「あ？　なんだよ藪から棒に」

>いいから答えなさい<

「…まあ、そうだな。ああ、出かけたぜ？」

>ふうん…<

軽い沈黙

>アラタ。暇が出来たら私とデートしなさい<

「は？」

急にデートに誘われた

「え、いや、あの国法？」

>いい！？　約束だかんね！！<

最後にツンデレな反応をさせて電話を切った

「…なんなんだ一体」

「アラター」

奥の人混みから当麻が走ってきた

アラタは急いで携帯をしまい当麻に向き直る

「当麻、そっちは見つかったか？」

「いや。…はあ、アイツどこいつちまったんだよ」

「んー、もしかしたら地下街の外に出たのかもな」

「かもなー…つたく、手間のかかるヤツだぜ」

そう言う当麻の表情はどことなく楽しそうだ

なんだかんだで手のかかる妹みたいなものだろうか

「ありや！？ 雨かあ…」

当麻が夜空を見ながら思わず呟いた

「流石九月末、冷えるねえ」

「…布団は干してなかったよな…。インデックスのヤツ窓はちゃんと閉めただろうな」

「当麻、嘆く前にインデックス捜そうぜ」

だな、と会話を終え当麻と歩く

ある程度歩いたあたりでふと思った疑問をアラタが口にした

「なんか警備員アンチスキル多くないか？」

「…言われてみれば」

時間帯か天気のせいかはわからないがあちこちに警備員アンチスキルが歩いていた

「あんまり遅いと厄介事になりそうだな。早く見つけて帰ろうぜ」

「おう。そうだな」

そして二人は歩こうとした、

その直前

ゴトリ、と妙な音が二人の耳に聞こえてきた

視線をやるとそこに立っていた防具満載の警備員アンチスキルがいきなり地面にぶっ倒れた

うつぶせになった体が水溜まりに浸食されていく

しかし身じろぎ一つしない

いかに防水機能があるうと普通ではない

とりあえずアラタが近寄って軽く体を揺すってみる

「もしもし？ 大丈夫ですか？」

結構耳に近い所でしゃべってみたがいつこうに反応がない

「まさか、意識が？」

当麻の指摘にアラタは首を横に振り

「いや、こういう服はそれなりに通気性は良さそうだから、それは
ないと思うけど…」

すると今度は

あちらこちらからバタリ、という音が聞こえた

一つではなく、バタリバタリ、とドミノみたいに連鎖していく

「…な…！？」

二人は一斉に立ち上がって周囲を見渡す

立っている人は当麻とアラタの二人だけ

夜道を巡回していた警備員が全員倒れていた

アンチスキル

何かの衝撃を受けた訳でもなく、ただ漠然と転がっているだけ

「ちょ、なんだよこれ！？」

「俺に聞かれてもわからねえよ！ とりあえず、生きてるか確認す

るぞ！」

アラタと当麻は駆け寄って最初に倒れた警備員アンチスキルに近寄る

その後あちこちを走り回ったがその全てで似た状況が起きている

誰一人意識のある人物はいなかった

とりあえず一人に近寄り首筋に指を這わす

どうやら命に別状はない

当麻は呼吸を確かめたがこちらも問題はない

なら原因はなんなのだろう

「麻酔ガスか何かか？」

「いや、それじゃ俺達だけ無事なのが説明できない」

とりあえず素人判断で放るのはマズい、と判断し当麻が救急車を呼ぶ事になった

当麻が携帯で事情を説明してる中

> 、 ゼウ<

無線の雑音

倒れた警備員アンチスキルの肩あたりから聞こえてくる

> 侵入、繰り返す……！！ ゲート 破壊を確認！ 侵入者は市街地へ こちらの部隊も、正体不明の、 <

ブズン、と無線が切れてしまった

アラタは先ほどの無線から聞こえた情報を元に断片的に推理する

「……侵入者……？ 学園都市の外から誰かやってきたってのか」

すると伝え終わった当麻が走ってやってきた

「アラタ、とりあえず通報したぜ……、つて、どうした？」

アラタは先ほど聞いた情報を当麻に包み隠さず話す

「侵入者……、インデックスの方は大丈夫なんだろうな……」

こんな状況でも彼女のことを考えるという事はよほどインデックスが大切なのだ

それほどまでインデックスは思われている、そう考えるとどこか微笑ましくなった

「とりあえず、早いとこ合流しよう」

「ああ。なんか学園都市でヤバい事が起こってるしな」

二人で頷いて走ろうとした所に

ドン、と当麻のお腹に何かが当たった

その正体は小さな少女

「打ち止め（ラストオーダー）…？」

うう…、とくぐもった声が聞こえた

くぐもっているのはその顔を当麻のシャツに押し付けているからで、ぶつかった、というよりほとんど抱きついてきた、という表現が適切だ

その体は小刻みに震えており、その衣服はこの小雨にぶつかったとは思えないほどずぶ濡れだった

「助けて…！！」

打ち止め（ラストオーダー）は当麻のシャツを掴んだまま顔を上げた

その瞳は真っ赤に充血していて、瞳に涙が伝うのがすぐにわかった

彼女は叫ぶ

その感情をぶつけるように

「お願いだから、あの人たちを助けてっ…！！、ってミサカはミサカは頼み込んでみる…！！」

.....

二人の少女は交差し、二人の能力者、そして二人の仮面ライダーへと道が繋がる

決して交わらない、完全に平行した、二つの道

その道が、一つに交わる時

学園都市を舞台にした、本当の物語が始まる

EX 神の右席

バタバタと人間が倒れていく

抵抗もなく、雑音も、鮮血も、悲鳴さえない

ただひたすらに人間の倒れていく

学園都市の治安を司る警備員達だ
アンチスキル

倒れた彼らは指先一つ動かない

それとは別にカツン、という細々とした足音になる

じやりじやりと金属が触れあう細かい音が聞こえる

女の服はワンピースの原型となったカートル

腰にはベルトなどの十五世紀前後のフランス市民の格好だ

顔にはピアスが至る所にまで穴が空けられている

そのピアスは顔が崩れる事を承知で実行されたものだ

その女は一度立ち止まり周囲をクルリと見回し、足に転がっていた無線機を一つ蹴り上げた

宙を舞う無線機を片手でキャッチしマイクへ口を近づける

そして囁くように告げる

「はっあーい、アレイスター」

ざざ、という雑音と一緒に返ってきたのは困惑する警備員アンチスキルの声だ

しかし女は無視して続ける

「どうせアンタはこういう普通の回線にも割り込んでるって事でしよう。さっさとお相手してくれると嬉しいんだけどな」

ブツ、というスイッチが切り替わる音が聞こえた刹那、音質がクリアになる

> 何の用だ<

「聞く気があるなら話しても良いって事なんだけど？」

> 一応確認するが、その程度の挑発に乗るとでも思うか<

「そ。統括理事会の顔を三つほど潰したトコだけど、「その程度」では堪えない、か」

女の表情には軽い落胆の色があった

「統括理事会ってさ、確か十二人しかいない事なのよね」

> 補充なら効くさ。いくらでもな<

「問題発言よね、それ。…まあいいや、私の名はわかってる？」

>さあな。賊については取り調べで聞く事になっているので<

「神の右席」

サラリ、と息をするように

魔術サイド最大深部の名前を口にした

世界最大宗派ローマ正教の闇の闇の闇：、とてつもなく、かなり深い奥底の闇の果てに沈む二つの名前

知っているのは一握りの人物だけで、仮に知っていたとしても「知るに相応しくない人物」と判断された場合は即処刑される程隠密性に満たされた単語

だがアレイスターはスラスラと答える

感情に起伏はない

>おや。テロ行為指定グループにそのような名前はあったかなく

「ふうん」

>名を売る為の行為だとしたら、少々無謀が過ぎたようだが<

「白を切るならそれでもいいけど、今ココで命乞いしなかった事を最後の最後で後悔しないようにね」

>この街を甘く見ていないか<

「アラ？ 自分の街の現状すら掴めていないなんて。既に報告機能にも支障が出てんの？ 失敬しっけー。私は自分が潰した敵兵の量を数えられないからなあ。はは、オペレーターまでぶっ倒れてるか」

>…、<

「行き過ぎたかな。まあジキに十割全て倒れる事になるだろうけど。
アンチスキル ジャッジメント
警備員や風紀委員だっけ。そんなチャチなモンで身を守ろうとかしてっからあっさりクビを取られんのよ。自分がもう終わりだって事ぐらいはわかってんのよね？」

>…ふ<

「…？」

>その程度で学園都市の防衛網を砕けたと思っているなら本当におめでたいな。君は、「この街の本当の形をまるで理解していない」<

「へえ」

>隠し玉を持っていれのは君だけではないという事だ。最も、君はそれを知る前に倒れるかもしれないがなく

「なんであれ、私は敵対する者は全て叩き潰す。これは私が生まれた頃からの決定事項だ」

二人は会話を交わしているように見えるが、両者共にただ一方的に言葉をぶつけているだけだ

最後に女は自身の名を告げる

「私は「前方のヴェント」。二十億の中の最終兵器」

無線から多少口を離しながら

「この一晩で全て潰してあげる。アンタも、学園都市も、幻想殺しも、禁書目録も、そして戦いの神、その全てをね」

そしてヴェントは握力だけで無線機を握りつぶした

.....

「人間」アレイスターは窓のないビルにいた

その中央に生命維持装置が鎮座していて、逆さまで彼は浮かんでいた

周囲に浮かぶモニターに移るのはエラー、の文字

どこを見てもエラー一色で埋まりきっている

「なかなかやるようだな」

コツコツとオーデインが腕を組みながら歩いてくる

「ものの数十分で学園都市の治安を司る警備員アンチスキルの七割弱が犠牲となった。：死にかけてるな、この街は」

確かに学園都市は絶望的だ

だがしかし、

それでも「人間」アレイスターの口元に浮かぶのはただ、笑みのみ

「面白い」

彼は囁く

「最高に面白い。これだから人生は止められない。こちらもようやくアレを使う機会が現れたか。時期は早いが…、プランに縛られた現状では、イレギュラーこそ最大の娯楽」

その言葉にオーディンもくく、と笑みを浮かべながら無線を繋ぐ

闇に蠢く者達へ

「木原数多」

>こちら木原<

オーディンは告げる

「虚数学区・五行機関…。AIM拡散力場だ。多少早いが、ヒューズIIカザキリを用いて「奴ら」を潰す。手足は飛ばしてもいい。逃走中の検体番号200001号を捕獲次第、指定のポイントに運べ。
シリアルナンバー早急かつ、丁重に」

>了解<

笑みと一緒にアレイスターは言った

「さあ。久方ぶりの楽しい楽しい、潰し合い（ショータイム）だ」

30 壊れる日常

ザーザーと降りしきる雨の中、暗い闇に白い修道服が浮かび上がってくる

インデックス

両手で小さな三毛猫を抱えて、その場に現れた

（最悪だ…）

一方通行は崩れ落ちたまま、ぼんやりと思った

これでは厄介が増えただけだ

事実木原や佐野も眉をひそめていた

あの二人のどちらかが指示を飛ばせばあの少女は一瞬でミンチになる車のドアさえ蜂の巣にするサブマシンガンを使えばどうなるか、考えるのは用意だろう

（取るべき道は、なんだ。見捨てるか、助けるか、利用するか…）

まだ能力は使用できるはずだ

だが全身に刻まれた傷が体を動かす事を拒絶する

「…どうすんの？」

木原の隣にいた佐野が木原に聞く

「そりやお前」

対して木原は一言

「消すしかねえだろ」

（ちィー！！）

インデックスは「ハウンドドッグ獺部隊」の活動を目撃している

彼女はここから逃げたところで延々と追跡される立場にある

おそらくそれは三日と持たない

（どのみち俺が殺される事ア変わりはねエ…、なら、やってやるオ
じゃねエか！！）

彼の意志に力が戻る

（シスターなンざどオでもいいが、やられっぱなしじゃ収まらねエ
！ 今度はお前が歯噛みする番だぜ木原アア！！）

首筋にあるチョーカー型電極のスイッチは入りっぱなしだ

後は、命じるだけだ

（今やる事は一つ。あのシスター連れて安全な場所まで逃げ切る事

！！）

「ああああアア！！！」

叫びと共に能力を発動させる

爪先を地面に押し付け思い切り蹴りそのベクトルを操る

恐るべき速度でインデックスの傍に止めてあつた黒いワンボックスの後部スライドドアに突っ込んだ

「っ！？」

運転席で待機していた黒ずくめが反応する前に一方通行は潰れたドアのスライド部分を強引に引きちぎり、その破片を握り締めると勢いよく運転席の背もたれの中心に突き刺す

ずぶり、と「何か」を貫いた感覚

「い、あ！？」

悲鳴など上げる暇など与えない

運転席に縫え付けられた男に一方通行は語る

「進め」

容赦なくただ事実のみを

「お前は三十分で死ぬ。さっさと病院に行かねェと手遅れになるぞ」

応急処置だけじゃどうにかならないのは男も痛みの程度でわかるだろう

そもそも「あの」木原数多が負傷し足手まといになった部下をどう扱うかは誰よりも理解できているだろう

「ひ…!？」

決断は早かった

オン!! と甲高いエンジン音と共に一方通行を乗せたワンボックスが発進した

その進路上にいた黒ずくめ達がバラバラと左右へ散っていく

その間に包囲を抜け、その先にいるインデックスの場所を把握する

「左へ寄せろオ！」

一方通行は絶叫し、出入り口から邪魔なスライドドアを投げ捨ててそこから身を乗り出す

「チツ!!」

一方通行は手を伸ばす

インデックスは三毛猫を両手で抱えている

掴むなら二の腕か

パン、という銃声が響き、顔のすぐ横を掠めたがそれを無視してインデックスの腕を掴む

そのままベクトルを操り強引に車内へと釣り上げた

「わ、わぁ！？」

インデックスが場違いな悲鳴を漏らす

一方通行は運転席の背もたれを隠すよう自分の位置を調整し、背もたれを貫通してる鋭い金属の凶器を指先で軽く触れた

「っ、が！？」

ビクン、と運転席の男が震える

一方通行はインデックスに聞こえないよう小さな声で囁いた

「騒ぐなよ。そのまま直進しろ。時間がねエのはお互い様だろ」

「お、客さん、どちらまで…？」

「いい医者を知ってる。そこまで案内してほしいけりやしっかり働けよ運転手」

.....

「あーあーあー！！ アレだアレ、アレ持ってこおい！！」

小さくなっていくワンボックスを眺めながらムチャクチャな指示を飛ばす

だが部下は従順に応じた

残るワンボックスの中から迅速な動きで木原に渡したのは携行型対戦車ミサイルだ

木原は一切の迷いなく一気に組み立て安全装置を解除していく

むしろろたえたのは「ハウンドドッグ獵犬部隊」の部下の方だ

そんな部下を尻目に佐野は聞く

「運転手は？」

「関係あるかよお！！ 脱走兵は即死刑！ 貴方の事ア二秒くらいは忘れませんってなあ！！」

ガコン！！ と全長一メートル、太さ約三十センチのミサイル砲を肩に担いで木原はスコープに目を通し照準を合わせる

ワンボックスは通りの角を曲がろうとしている所だった

木原は笑う

間に合う

たとえワンボックスが曲がりきってもミサイルは車を追って斜めに進み、角のビルの壁に当たればコンクリート片の嵐を喰らいワンボ

ックスはひっくり返る

一方通行は死なないだろうが確実に足をなくす

後は負傷したその他二名ともどもじつくり料理すればいい

「あばよクソ野郎！！ その白い体丸焦げにしてらやあ！！」

ハイな笑みと一緒に引き金を絞ろうとした

が

スコープの照準が黄色一色に染まった

縮尺のズレた何かが遮っている

木原がスコープから目を離すとわずか十メートル前後の位置に奇妙な女が立っていた

今まで全く気づけなかった

黄色を主体としたワンピースのようなものを着ているがどうも古い
というか、時代がかっている

まるで中世ヨーロッパの人間だ

だが木原にとってそんな事はどうでもいい

重要なのはこの女に気を取られたせいでワンボックスが通りの角を曲がりきって消えてしまった事だ

「……」

木原の顔から一気に表情が消えた

ポカンとした表情のままとりあえず引き金を引く

ボヒュ！！ と対戦車ミサイルが発射された

ミサイルは一直線に飛び立っていた女の胸のド真ん中に直撃し爆発する

赤い炎と黒い煙が木原たちの視界を遮った

だが、その時間はわずか五秒ほど

ビュオ！！ という烈風が全て吹き飛ばす

女は変わらぬ様子のままそこにいた

衣服はおろか、髪的一本すら焼けていない

「良い街ね」

女は言った

木原数多や佐野充などみていない

「…何者だ」

木原の問いに女は答える

「殺しの商売敵」

付き合いきれん、と言わないばかりに木原は溜め息をついて後ろを向く

「班を二つに分ける」

弾がなくなったミサイル砲をその辺に放り投げると

「今いるメンバーの中から使えないヤツを順番に十人集めて足止めさせる。その間に俺と佐野、んでもう一班は「別荘」ほんぶに移動する。わかったか？」

あまりにぎつくりした命令だが従わないと体中に弾丸を喰らうのはわかりきっている

佐野は足早にワンボックスに乗り込んで木原も続く

その背中に女は声をかける

「アンタ、敵意がないのね」

「向けて欲しけりやもうちよつと有能になる事だ」

木原はそう言うと言転手に「出せ」と命令しワンボックスを発進させた

後に残ったのは女と罔だけ

「…さて、と」

女は首をこきこき鳴らすと舌を出す

じやらり、と口の中から鎖が落ちた

「随分ナメられたモンだけど、アンタらはお役に立てんのかしら」

.....

上条当麻と鏡祢アラタ、打ち止め（ラストオーダー）は立ち尽くしていた

三人とも傘を差していない

故にずぶ濡れだ

打ち止め（ラストオーダー）のおでこにくっついてる電子ゴーグルもびしょびしょだが、軍用だから問題はないのかもしれない

最終下校時刻と共に電車やバスもなくなったせいか、真っ暗い道路に人影は一切いない

少なくとも、二本足で立つごく普通の人影は

打ち止め（ラストオーダー）は倒れている男の一人を指差して顔を真っ青にしたまま言う

「この人たちに襲われたの、ってミサカはミサカは本当の事を言ってみる。本当だよ？、ってミサカはミサカは念を押してみたり」

言われて二人は改めて倒れている警備員を見た

「…こいつら、アンチスキル警備員じゃない…？」

よくよく見てみると自分が知る警備員の装備よりレベルが違う

そんな気がする

「けど、アンチスキル警備員じゃないなら、こいつら一体誰なんだよ？」

「さあ、それはわからないが、確実に言えるのは警備員じゃない」

おまけにその襲撃者達もバタバタと倒れている

全く状況が掴めない

「ここで襲われてたのってお前の知り合いなんだろう？」

当麻が立ち上がりながら打ち止め（ラストオーダー）に問いかける

「そうだよ、ってミサカはミサカは答えてみたり」

「これって、そいつが振り返りにしたって事なのか…？」

「それはないかも、ってミサカはミサカは首を横に振ってみる。あの人は気が短くてケンカっ早いから、あれだけやられたのに仕返しがこれっぽっちなんて考えられないもん、ってミサカはミサカは簡単に推測してみたり」

どんなヤツだそいつは、とアラタは心の中でツッコんだ

「…、」

アラタは一人思案する

能力者は無敵じゃない

レベル5の超電磁砲レールガンみたいな力を所有していない限り訓練された集団に銃器で襲われたら太刀打ちなど不可能だ

能力者といっても基本的には学生なのだ

戦場に投げ出されても何もできない

「機転を効かせれば」、といってもその余裕がないと意味がない

覚悟を決める、なんて事は一介の学生にはできない

普通なら間違いなく死ぬ

「とりあえず、通報か」

今度はアラタがプライベート用の携帯を取り出して番号を

「…あれ」

思わず声に出していた

「どうした、アラタ」

聞かれたがアラタには聞こえていない

アラタはゆっくりと周囲を見渡す

ひしゃげたワンボックス

そのワンボックスが爆発した時に巻き出た炎

遠くから見ても火事が発生している事は分かるだろう

アラタが携帯を使うまでも普通誰かが通報してるはずだし、そもそも野次馬だって集まっていなとおかしいのだ

「…なあ、当麻。…お前、火事とか見かけたら普通どうする？」

「ああ？ そりゃ——九に通報するだろ」

「じゃあ何で「この状況が通報されてないんだ」？」

最初当麻は「はあ？」といった表情をしたがすぐにはっ、とする

当麻は急いで周囲を見る

おかしい

今日の学園都市は確実に以上だ

人為的な攻撃か、意図のない現象か

（この街で、一体何が起きている…？）

そこで動きがあった

近くに倒れていた男の傍に寄って装備品をいじくっていた打ち止め（ラストオーダー）が突然何かに気づいたように顔をあげ、二人の元に走ってきて、二人の手を掴みグイグイ引っ張り始めた

「早く、ってミサカはミサカは警戒を促してみるっ！」

「…なんだ？ 打ち止め（ラストオーダー）」

アラタが屈んで聞く

「ヤツらが来たっ、てミサカはミサカは路地裏へ体を隠しながら報告してみたり！！」

打ち止め（ラストオーダー）に引っ張られるまま当麻とアラタはすぐ近くに止めてあった自動車の陰に隠れた

「…ヤツら？」

と、当麻は眉をひそめていたが、文句を言う暇などなかった
ガロロロ、と低いエンジン音が響き、ヘッドライトを点けていないワンボックスが走ってきた

そのワンボックスは奇妙な男たちが倒れている場所に停車し、全く同じ装備の人間がわんさか出てくる

パツと見ただけでも十人以上

おまけに全員揃えたように、肩にサブマシンガンをかけていた

おそらく他にも手榴弾やら拳銃で身を固めているだろう

当麻と目を合わせる

二人が一致した思考は

今、とてもヤバいという事

打ち止め（ラストオーダー）を見捨てる気などないが、さすがにこれらは分が悪過ぎる

アラタは静かな動作でロストドライバーを巻きつけた

「（アラタ？）」

「（念のためだ。いざとなったら俺が足止めする。スカルなら可能だ）」

頷きあって様子を窺う

ただ気付くな、気付くな、と頭の中で念じる

ちやぶ、と水音が耳に届いた

小刻みに震えていた当麻の足が、水溜まりに触れ小さな波紋が作っていた

それは盾にしている車をくぐり、向こう側にまで

だがこの程度なら問題ない

降り注ぐ雨も水溜まりを叩いている

結構暗いし、目を凝らしても水溜まりの様子なんて確認できない

だから問題ない、と当麻とアラタは祈るように考えた、が

グルリ、と

少し離れた場所にいる黒ずくめ達が一斉にこっちを向いた

31 相対するモノは

あれから車で十分ほど走った

車で十分は「そこそこ」な距離だと思うが、逆に言えば「そこそこ」でしかない

ないと思うが衛星なんかを使われて逆探知されたらすぐ見つかるだろう

そんな事を考えながら一方通行は携帯を取り出しある番号に電話をかけた

スリーコール待つて聞き慣れた声が聞こえてくる

「浅倉ア。生きてるか」

>生きてるよ<

現在別行動を取っている浅倉了の番号だ

>そつちはどう？ 打ち止め（ラストオーダー）は？<

「打ち止め（ラストオーダー）は逃がした。場所まではわかんねエ。
…悪い」

>謝る必要なんてないさ。…お互い様だよ<

「っは、そオカ。ひとまず合流する。あのカエル医者ンところだ」

>了解<

言って電話は切れた

とりあえず浅倉の無事は確認できた

それは良ししよう

「おい」

一方通行はインデックスに向き直る

「なに？」

「俺はこれからあのガキを捜さなきゃならねエ」

「あのけーたいで見せてくれた子？」

一方通行は頷き

「手のかかる事にアイツは自分の足で家まで戻ってこれねエみてエだしな。だからお前とはここでお別れだ」

「私も捜すよ？」

インデックスはすぐに返答した

一方通行の赤い瞳から一瞬たりとも目を逸らさずに

「だって、貴方が困ってるのわかるもん。ここにいるのがとうまだ

「つたらおんなじ事言ってると思うし」

「ふん」

一方通行はつまらなそうに視線を外し、運転手に声をかける

「この辺りで停めろ」

文字通り命を握ってる一方通行の指示で男は路肩に車を停めた

一方通行はインデックスを見て

「協力しろ」

「うん。何をしたらいい？」

「この近くに徒歩五分から十分つてところにデカイ病院がある。そこに行つて、いかにもカエルに良く似た医者を見つけてこい。医者にあつたら」

そこで言葉を切り一方通行は自分の首筋をトントンと叩いて

「ミサカネットワーク接続用電極のバッテリーを用意しろ、と伝える。それで通じる。バッテリーてな大事なモンだ。ソレがねエと人捜しが出来ねエ。だからバッテリーを受け取つたらお前はダッシュで戻って来い。わかつたな」

「わかつた。「ミサカネットワーク接続用電極のバッテリー」、だね」

完璧に復唱された

多分復唱した本人は意味なんてわかってないだろうが、意外に頭の回転は早いのか、と一方通行が思う間もなく、インデックスは三毛猫を抱え、雨の道路へ躊躇なく飛び出した

「待っててね」

「ア？」

「私が戻ってくるまで、ちゃんと待ってなきゃダメだよ？」

「……。わかってる。良いからさっさといけ」

一方通行は答える

インデックスは二度、三度とこちらを振り返ったが、やがてパシヤと水溜まりを踏みながら走っていった

その小さな背が闇の奥へと消えていく

「……クソッたれが」

思わず吐き捨てて座席の背もたれに体を預けた

病院に電極の替えなんかない

そもそも電極自体が試作品なのだ

それに対応したバッテリーも特殊なもので量産化なんてされていない

量産されてるなら最初からバッテリーをポケットにでも、大量に突っ込んでいる

そう、簡単なウソだった

カエル医者^{カエル}の所へいけ、という部分以外は全て

一番マズいのはあのシスターが一人になってしまう事

少しでも生存率を上げるなら人の多い場所にやった方がいい

何もしないよりは遥かにマシだ

これから始まるのは木原数多^{ハウンドドッグ}らや、「**獵犬部隊**」との打ち止め（ラストオーダー）^{ラストオーダー} 争奪戦だ

ただでさえフルで七分と持たないほど戦力が不足するなか（浅倉がくれば多少は抗えるが）あれだけの数を相手にインデックスという荷物を背負って戦うなんて馬鹿げている

「……」

一方通行は薄く息を吐いて思考を切り替える

その時コンコン、とガラスを叩く音が耳に聞こえた

そちらに目をやると浅倉が立っていたのだ

「遅エぞ、タコ」

「それでも急いで来てんだよ。多目に見ろや」

浅倉はどかつ、と一方通行の隣に腰を下ろす

「車アだせ」

「ま、まだ解放してくれねえのかよ…！ あが！？」

「死ぬか生きるかテメエが選べよ」

後部座席に突き刺さった凶器を軽く揺すると自動車は静かに動き出した

浅倉はその間目に入った大きなバッグを掴み真ん中に置いた

ファスナーを開くと、殺人兵器がゴロゴロ入っていた

掌に収まりそうな小さな銃、辞典のケースに隠れてしまうようなサブマシンガン、モップのような長さを誇ってるのは室内制圧用のショットガンか

「アクセラ、今いるのってなんだ？」

「だなア。…やっぱ杖の代わりだな」

浅倉は一方通行の辺りを見る

いつも使ってるト字型の杖が見当たらない

恐らく戦闘が何かで無くしてしまったのだろう

「ならこのショットガンなんかいいんじゃないか。グリップ掴んでストックを脇で挟めば、杖に見えなくもないだろう」

投げられたショットガンを掴み一方通行はソレを見る

「…？　おい、コイツは何だ」

浅倉は気になるものを見つけた

見た目はサイレンサーを取り付けた拳銃みたいだが、先端にマイクの形をしたスポンジ状のセンサーが取り付けられていた

そしてグリップの上、ハンマーのある辺りに三インチの小型液晶モニタがついていた

「そいつは、嗅覚センサーだ」

ルームミラーで確認したのか、ハウンドドッグ「**獵犬部隊**」の男がそう答えた

「香水や消臭剤で使ってるヤツを、軍事に転用した…」

「よオは警察犬の機械化か」

「ま、犬よりは確実だろうな」

データ化により、入り混じった匂いの中から必要なものだけを取り出したり、メモリに登録できたりもするのだから

「俺たちは、いつもその嗅覚センサーを使って標的の足跡を追う。」

迅速かつ、確実に。… 木原さんらに睨まれて、逃げ切れたヤツを、俺は知らねえ…」

一方通行と浅倉はつまらなそうな表情になる

ヤツらを叩き潰すのに、依存はないが「相手から奇襲される」パターンは好ましくない

ならこちらから「相手に奇襲する」構図を作った方が良い

一方通行は嗅覚センサーを弄り回しながら

「コイツの使い方は？ あのがキ捜すのに役立つかもしれねえ」

「無理だ」

男は僅かに笑った

青白い、乾いた笑み

「ハウンドドッグ「**猟犬部隊**」は、嗅覚センサーを打ち消す洗浄剤を持ってる。匂いの分子構造そのものに干渉するヤツだ…。襲撃地点でそいつを使っても意味がねえ…」

話によると、洗浄剤には衣服にかけるものと後から現場に散布するものの二種類があるようだ

「アンタは持つてるのか。その洗浄剤」
浅倉の問いかけに男は震えた声で返す

「あればとづくに使ってる。所属が違つ。足跡を追う係と、足跡を消す係は分業だ…」

ち、と一方通行は舌打ちした

しかしセンサーをごまかせる物質が存在する、という事がわかっただけでも収穫だ

「…、聞きてエ事はもうねエな。…オマエ、そこ動くンじゃねエぞもぞり、と後部座席で蠢く雰囲気を感じ、運転席の男が引きつった声をだす

殺される

そう思つた男だが

「停めて」

浅倉の言葉に従つて車を停める

そこから二人はドアのない出入り口の方に動いていた

外へ出ようとしているのだ

「ど、どこに行くんだ？」

「あん？ 木原を潰して、ガキを助けにだよ」

「俺は、佐野に個人的復讐だな」

億劫そうな二人の声に男は啞然とした

「なんで諦めないんだよ、どこ逃げたって、木原さんは笑顔で殺しに来る。主導権は全部向こうに握られてる。それでもやるってのか」

「当たり前だ」

「そこで即答出来る根拠はなんだよ。こんな世界に浸ってたんだ。自分がどれだけ分の悪い状況にいるかわかってんだろ」

「知らないね」

一方通行と浅倉了は吐き捨てた

カエル医者に連絡するために、ドアのない出入り口に手をかけて

「平和ボケして、ヤキでも回ったンだろ」

「ラッキーな事にね」

.....

判断は一瞬

「走れ当麻!!」

指示に従い当麻は打ち止め（ラストオーダー）を抱えるように持ち上げると車の陰から飛び出した

そしてその当麻を庇うようにアラタも飛び出しながら、メモリを取り起動させ

>SKULL<

「変身」

ドライバーにセットし開く

>SKULL<

風が巻き起こり黒ずくめの視界を一瞬遮るとすかさずスカルはマグナムに手をやり、サブマシンガンを狙い撃つ

「アラタ!!」

後ろから自分を呼ぶ声が聞こえる

「先に逃げる！ 後から追いつく!!」

「…、わかった！ 無茶すんなよ!」

「任せておきな!」

走る当麻の背中を見送りながらスカルはスカルマグナムを構える

「ここは、通さない」

その言葉は決意の表明

……

全員を気絶させるのに、あまり時間はかからなかった

黒い武装に身を包まれていようと、やはり人間、仮面ライダーには及ばないようだ

加減するのに苦労したが

スカルは変身を解除し辺りを見回す

やはり人が来るような気配はない

それよりもさらに静寂が増したようにも見える

「…当麻たちは逃げのびたのか」

何よりも心配なのはやはり当麻と打ち止め（ラストオーダー）の安否だ

おまけに

「…美琴になんて言おう…」

言い訳なんてらしくないのはアラタ自身深くわかっている

なんだか電話をかけるのが怖くなってきた

もちろん、当麻たちも心配なのだが

とりあえずアラタは当麻たちが走った方向に歩を進めながら美琴の番号に電話する

以外にすぐに出た

> あ！ アラタ、今どこよ、もう結構な時間なんだけど<

「あ、あー…、その、美琴。晚ご飯なんだけど…」

言葉を濁しながらアラタは言葉を続ける

「急用が入った。…、だから、すぐにはいけない。もしかしたら今日はいけないかもしれない…」

> …、<

電話の向こうで美琴が押し黙る

「すまない…！ 埋め合わせは必ずするから…！」

> …。別に怒ってないわよ<

「…え？」

予想外だった

> どうせアンタの事だから、また厄介事に首突っ込んだんでしょう？ お見通しよ<

… かなわないといつかなんといつか

>その代わり、いつでもいいから一日、私の言う事何でも聞く事。
それがアラタへの罰ゲームです<

「…、そんな事でいいなら、約束する」

>約束だかんね<

そのまま多少会話をして電話を切る

切った矢先

遠くでマシンガンみたいな銃声が連続した

「…あつちか！」

アラタは走り出す

友達を守らんとする為に

.....

一方通行がやや寂れた感じの公衆電話のボックスに入ってカエル医
者に連絡を取っている中、浅倉了はボックスの外に待機していた

そして情報を整理する

まず相手の狙いは打ち止め（ラストオーダー）

これは間違いない

そしてその為に「ハウンドドッグ 獵犬部隊」という特殊部隊を動員しているという事

今わかるのはこの程度

次にそれを率いる人物

まず木原数多

科学者で一方通行の能力開発に関わった人物、とは一方通行本人の談だ

次に佐野充

コイツは思い出すのもイヤだ

常に相手に媚び、自分の利益になる事しか動かない

会ったら必ずブチ殺すと決めている

そのまま待っていると一方通行が公衆電話から出てきた

その表情は、何か全てを受け入れたような笑み

ブチリ、と裂けた、この世のものとは思えない恐ろしい笑み

「浅倉ア」

一方通行が問いかける

「あのガキ救う為なら、善人でも悪人でもブツ殺す覚悟、テメエにはあるか」

爛、とした赤い瞳を浅倉に覗かせる

それは、これ以上進むと後に戻れなくなる

引き返すなら今しかない

そう言っている

それに対する浅倉の答えは

「当たり前じゃねえかよ」

裂けた笑みに似た、不気味な笑みを一方通行に返す

「…イインだな？」

「今更だな。聞くなよアクセラ」

浅倉は一方通行に背を向けて言葉を続ける

「ハウンドドッグ「獵犬部隊」は嗅覚センサーを持ってんだろ。こここの位置もすぐ
にバレる。まずはそいつを迎撃する」

「その為の戦場が欲しいつ、てワケか。は、イイねエ」

こんな所でのんびりしている暇は、ない

32 前方のヴェント

神代ツルギは一人、学園都市を歩いていた

「…一体何があつた」

突然、周囲の人がバタバタとドミノみたいに倒れ始めたのだ

心当たりは全くない

いや、唯一あるとするならば

「…魔術…？」

それしか頭に浮かばない

「…またこの学園都市で何かが起こってる…！？」

ツルギは思わず走り出す

バーゲンではぐれてしまった上条当麻の事が気かりだったが

そのまま街中を走っていると聞き慣れた声がツルギの耳に届いてきた

「おー。小萌せんせんとこの教え子じゃなかよー」

声がした方へ振り向くと、万年ジャージ姿の教師、黄泉川愛穂が車の窓から顔を出していたのだ

この車、国産の安いスポーツカーだがエンジン音が妙に低い

聞いた所によると逃走者を追う為に見えない部分をガッツリチューニングしてあるのだ

一回車内を見せてもらったが、ギアが七速入る時点でヤバいほど無茶している

「お前は無事じゃなか？」

「ヨ・ミカーワも。アンチスキル警備員の巡回か？」

「いやー、最初は迷子の搜索だったんだけど、流石にこんな事が起きちゃ優先順位は変わってくるじゃんよー…、っと」

ががが、と小型プリンターからハガキが吐き出されてきた

黄泉川はカーオーディオの代わりに突っ込んである車内無線のランプが光った

その写真は粗く、輪郭もぼやけている

遠距離から撮ったのだろうか

ツルギがその写真を覗こうとすると

「おっと。流石にこれはダメじゃんよ」

黄泉川に写真を隠された

黄泉川は写真をじつ、と眺めた後

「よっし。ツルギ、あんたはさっさと家に帰るじゃんよ。あとは、
アンチスキル
警備員の仕事じゃん」

そう言われると何も言い返せない

諦めて別の場所を調べようと思ったツルギは車の前を通り過ぎた
しかし変化が起こった

「…?」

黄泉川車が動いていない

運命席の黄泉川を見ると何故かハンドルに突っ伏している

「…ヨ・ミカーワ?」

すぐさま運命席のドア付近に移動しそれを開ける

黄泉川愛穂が気を失っていた

体を揺すっても全く変化がない

「ヨ・ミカーワ? …黄泉川先生!？」

思わず喋り方が真面目になってしまつほど動転していた

車のない道路

やけに静かな街

…事態は、とてつもない規模で進行しているのかもしれない…

………

「これだな…」

第三資源再生処理施設のコントロールルーム

そこで一方通行は小さく笑った
アクセラレータ

窓のない小さな部屋の四方の壁に、何十ものモニターが据えられた部屋

浅倉も別のキーボードを弄りながら調べ物をしていた

二人が求めているのは匂いの粒子そのものを科学反応で「別の物質」に変える洗浄剤だ

「浅倉、見つけたぞ。…何種類かあるみてエだが」

ハウンドドッグ

「猟犬部隊」と徹底交戦する覚悟は決めたが、だがしかし、「常に襲撃される側」なのは好ましくない

一方通行が能力をフルに使えるのは七分もない

木原数多本人ならともかく、部下相手に無駄遣いは避けたい

そう考えると戦いの主導権はこっちが握っていた方が良いに決まっていた

「打ち止め（ラストオーダー）を捜すにしても、今の時点で奴らの追撃は振り切っておくべきだな」

「当たり前だ。あのガキ回収した後の方が、難易度が跳ね上がったからなア」

つまり、「いつ戦っていつ避けるのか」

それはこちらで掴まなくてはならない

「さつさと洗浄剤で匂い消して、本命に戻ンねエとな。…その洗浄剤は施設のどこだ…？」

一方通行が洗浄剤を探すべくキーボードを弄った矢先

「アクセラ、ハウンドドッグ「**獵犬部隊**」が来やがった！」

「ンだとオ？」

一方通行が浅倉の隣に移動する

浅倉はカタカタとキーボードを弄りながら言葉を紡ぐ

「さつき監視モニタのヤツ見てたら、一瞬黒ずくめの人影が映った。

…多分アイツらはこっちのセキュリティ全部潰す気になりや潰せるはずだ。…誘ってるぜコイツはよ」

「ち…。予想よりも早いじゃねエか」

普通に歩ける浅倉と違い、一方通行は杖がなくては動けない

つまり速度が出せない

洗浄剤を使用し嗅覚センサーを逃れたとしても施設に潜入してくるこの一団だけは相手をしなくてはならない

「上等だ。あのストーカー共、ここで叩き潰してやる」

一方通行は杖の代わりにしているショットガンに体を預けつつ周囲を見渡す

正真正銘、ただ巻き込まれただけの作業員たちに警告する

「これから銃撃戦が起こる。戦闘が終わっても後続の奴らが押し寄せてくるかもしんねエ。お前達は銃声が止んだら二十分位待って、私服に着替えて施設を出ろ」

頷いてるか震えてるかわからない返事が返ってくる

まず、状況を整理する

一方通行の力は使えそうにない

この施設内は分厚いコンクリートに阻まれ、外部との電波通信の精

度は落ちる

とにかく雑音がひどい

普通の会話なら「ちょっと乱れる」で済むが能力を派手に使ってる時にそれが起これば暴発する

「ま、ここで使うようなら木原にや届かねェか」

「わかってるじゃんか…。俺は遠慮なく使っけどさ」

浅倉は紫色のカードデッキを前に突き出す

すると浅倉の腰にVバックルが現れ浅倉は言葉を告げる

「変身」

バックルにデッキをセットする

幾重にも残像が重なり浅倉の姿を変える

仮面ライダー王蛇

「相変わらず悪趣味なカラーだなア」

「うっせ」

「っと。忘れるとこだった。浅倉」

ヒュン、と投げ渡される一枚のカード

「…何だこれ」

「打ち止め（ラストオーダー）の包帯買った時に、店員が、渡してくれ、つってきたからよオ。いつ渡すか迷ってた」

それで今渡したらしい

描かれているのはエイみたいな紋章

「…手塚か？」

ま、ありがたく貰っておこう

「…で、どうする？」

「…そオだな…」

二人は迎撃方法を模索する

誘いに乗るか、蹴るか

そこから勝負は始まっている

……………

御坂美琴はコンビニにいた

雨具の置いてあるコーナーに突っ立っている

「…小さい」

安いビニール傘を見ながらぼつりと美琴は呟いた

こういう傘はかさばらない方が人気かもしれないが、ここまでサイズが小さいとどの道濡れてしまいかもしれない

ウィンドウから外を見るとすっかり真っ暗

ガラスには結構大きめの雨粒がぶつかっている

先ほど鏡祢アラタとの電話で、彼がまたトラブルに突っ込んでいるのを広い心で受け入れ、さらに一日罰ゲームを与えられたので、結構気分が良かった

だが…

「ったく。何で降ってくるのよ」

彼女は鞆と一緒に持っている携帯会社の紙袋に目を落としつつ

「ストラップは濡らしたくないのよね…」

ストラップ、とは携帯会社でアラタとペア契約した際に貰ったゲコ太とピヨンの事だ

その二体（？）を濡らしたくない美琴はうんうん唸っていると不意に携帯が鳴った

面倒そうに携帯を取る

ディスプレイに表示されているのは、後輩の白井黒子の番号だ

>おっねえさまーん<

「何よ、黒子」

>それが風紀委員のお仕事で今日は帰れそうにないので、あのやつ
ジャッジメント
かましい寮監に一言連絡して欲しいのです。もう門限も過ぎていますし<

「えと…、私も今コンビニだから」

>ぎゃあ!?!<

黒子が絶叫する

また、黒子より少し遠い位置から、別の声がスピーカーに入ってくる

>あれ、白井さん。御坂さんに連絡できなかったんですか?<

初春の声だ

となると現在黒子は支部にいるのだろう

>やかましいですよ。お姉様は外にいるから寮監に連絡はつけられないとの事ですのよ。…むう、参りましたわね。門限延長には書類の提出が必要で、あの寮監は電話には応じませんし…、これでは問答無用で二人共減点を喰らいそうですの<

> あれ？　けど何で御坂さん今日は門限ぶつちぎってるんですかね？<

今度は佐天の声だ

> つ！？<

黒子が息を呑む音が聞こえた

黒子は尋ねてくる

> まさかお姉様…！　ついにお兄様と夜のデートをッ…！　何でわたくしを誘ってくれなかったんですのっ！？<

「なんでアンタに許可取れないといけないのよ…！　あと、違うからね…！」

思わず美琴は叫び返していた

しかし黒子は全く聞いていない

> ついに…、ついにお姉様もお兄様に貞操を捧げますのね…！！<

「て、貞操とか言っなバカ…！」

> ならばより具体的に言っとか

「言っな…！」

顔を真っ赤にし叫ぶが、もう黒子は完璧に聞いちゃいない

スピーカーからマシングンのように言葉が飛んでくる

>ともあれそっちに行きます見届けますGPSサービスを使うために必要な認証用のコードメールを送ってください <

>ダメですよ<

初春が放った一言で白井マシングンが詰まった

さらに続けて

>こっちの事務書類の束に会計書類の山、指示書類の山脈が全然終わってないんです。白井さん、今日は徹夜といたら徹夜なんです。佐天さんだって今日晩御飯作りに来てくれたんですからー<

>うがあああああああー!!<

>ひゃあ!?! 白井さん!?!<

バタバタ、という音が電話の向こうから聞こえてきた

美琴は電話を若干遠ざけながら

「じゃ、じゃあ切るね?」

錯乱している黒子を初春が押さえているので、代わって佐天が返事してきた

>はい。御坂さん、白井さんは私たちで押さえとくから、頑張っ

て下さいねっく

「だ、だからデートじゃないって!-!」

美琴は全力で返したがもう向こうには届いておらず、しばらくドタバタと暴れてる音が聞こえたと思ったらそのままブツ、と通話が途切れた

電話をパチンとたたみふう、と息を吐いてるとまた別の声が聞こえた

「あれ、御坂さん」

「…ん? 神那賀さん」

神那賀雫がバック片手にこちらに歩いてきていた

「奇遇だね、やっぱり傘?」

「うん。いきなり降り出してくるもんだからさー。…あれ、神那賀さんジャッジメント風紀委員のお仕事は?」

「え? 私、今日国法先輩に休んでいいって」

「あ。そうなの?」

恐らく日頃頑張っているため、徹夜作業は免れたのだろう

「…ねえ、神那賀さん。一緒に帰ろっか?」

「え? いいけど…。何で急に?」

神那賀の間に美琴は「ふふ」、と微笑んで

「同じ人が好き同士、ね」

.....

上条当麻と打ち止め（ラストオーダー）は柱の陰に隠れて息を潜めていた

黒ずくめの連中がマシンガンで窓ごと破壊してきた時には流石に体が震えた

あまりのストレスに脳が崩れるかと思った

しかしいつまで経っても男たちがやってこない

連中はこちらのおおざっぱな位置を確認しているはずだし、何よりもロクな武器もない事も認知しているはずだ

（...という状況なんだ）

下手に動くのはまずい、という心

そして今動かないとチャンス逃すかもしれない、という二つの心が交差する

「...、」

目立った物音はない

息を潰し

目を瞑り

時を待つ

そして一つの動きがあった

「ハッアイ　ビクリしちゃったカナ？　怖がってないで出ておいでー」

聞こえてきたのは甲高い女の声だ

これまでのヤツとは明らかに違う動きだ

今までの黒ずくめ達は自己主張を避け、出来るだけ迅速に、可能な限り無駄を省いてこちらを殺そうとしていた

しかしこの女は真逆

まず声を出して存在をアピールする時点で、黒ずくめ達と「合わない」

（となる、と…黒ずくめ達の仲間じゃない？）

かと言って、安易に出ていくわけにも行かない

そもそもあの声は誰だ

アラタじゃないのは完璧にわかる

「はは。怖がつてるなあ。ま、あんだけピンチってたら仕方がないでしょうけどー。こっちにも事情があるからさ。あんまり言うこと聞いてくれないとー」

あっけらかんと女は続ける

こちらの同様な警戒などお構いなしに

「グツチャグチャの塊にすんぞコラ」

「!?!」

当麻は打ち止め（ラストオーダー）を抱いてとっさに柱の陰から飛び出すように床に伏せた

ドー!! という轟音が響きさつきまで盾にしていた柱を横に屈いだ見えない何かが柱をくの字にへし折りそのまま二つになって壁に飛んでいった

建物が震える

当麻は打ち止め（ラストオーダー）を庇いながら視線を凝らす

明かりの落ちたフロアの中心に立つ一人の女

妙な女、というのが表現にピッタリだ

服装は中世ヨーロッパの女性が着るワンピースに見える

髪は束ねた布で覆われて、顔はピアスがたくさん取り付けられていた

口や、鼻、まぶたにまでも

そして女の手

約全長一メートル前後の巨大なハンマー

殴られれば痛いでは済まない、しかしサブマシンガンで武装している
集団にあれだけで勝てると思えない

にも関わらず

一体どうして黒ずくめたちが周囲に転がっていたのだ

意識がある者は一人もいない

（…これは）

どうやって物音を一つ立てずに無力化させたのか

（似てる…！）

情報不足が不気味さをより強調させる

音もなく倒れていった都市まちの人たちとかにあまりに類似していた

「「神の右席」の一人、前方のヴェント」

ヴェントはイタズラっぽく舌を出す

「目標発見。まあそんな訳で、サッサとぶっ殺される上条当麻ア！」

舌に取り付けられた細い鎖がジャラジャラと落ちる

.....

「...一体何があったんだ」

鏡祢アラタは息を潜ませながら先の出来事を覗き見ていた

恐らくあのヴェントという女はこちらにも気づいているはずだ

どう攻めるか

その単語がアラタの頭の中でぐるぐると巡り回る

ふと、アラタの視線が止まる

ジャラジャラと落ちた、ヴェントの舌先に付けられた

唾液に濡れた小さな十字架

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4977r/>

とある魔術の禁書目録 ～戦いの神と呼ばれた者～

2011年6月17日22時17分発行